
仮面ライダーエクストリーム ～KAMEN RIDER XTREME～

k.i

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーエクストリーム 〜KAMEN RIDER XT
REME〜

【Nコード】

N9339V

【作者名】

k.i

【あらすじ】

” 劇場版仮面ライダーW A to Z 運命のガイアメモリ ” の後。風都は束の間の平和を得て、平穏な日々が流れる。しかし、そんな風都の路地裏で、広 ひろがる こうすけ 光介と、その中学校の教師、大道 だいどう が、ある組織に襲われていた。組織の名は「CORE」。財団Xがガイアメモリから手を引いた後、「コアメダル」というまったく新しいモノを研究し始めたことから、財団の支部であるCOREが、ガイアメモリとコアメダルを合わせるといふ研究を始めたのだ。そこか

ら生まれた「TCガイアメモリ」と、光介が変身した仮面ライダー
エクストリームは戦うことになる――。？ただいま、『エクス
ビッカー編』終了しました。基本的な登場人物が出揃ったので、こ
れからは光介の一人称でお送りさせていただきます。？『メモリ量
産編』終了しました。描写不足な部分アリだと思いますが、これか
らもよろしくお願いします。？タイトルを微妙に変えました。

第一話 始まりの夕（前書き）

ネット小説を書き始めました。k・iは、次回からこの欄に、仮面ライダーエクストリームが使用できるガイアメモリを記載していると考えています。

小学生のときには文はうまかったつもりですが、なにかおかしい点があれば、指摘していただけると幸いです。

第一話 始まりの夕

「先生、大道先生！」だいどう

人気のない路地で、中学一年生くらいの少年が大道と呼ばれた男性に向かって叫んでいた。少年の服装は間が開いて黒い服が見えている紺色のジャケットに、動きやすい繊維で形成された薄い茶色の長ズボン。時間は夕方くらい。大道は路地に倒れこんでいる。先ほど、大きなケガをしたようだ。全身打撲、重傷だった。何故このようなケガをしたのかは定かではない。

顔が横長で、中学生にしてはまだ幼さを感じさせ、微妙に茶髪。

それに対し、大道と言われたほうは、中年で、頬にシワがはしっている。全体的に黒い服を着用。

少年は体に大きなダメージを受けた大道をヒザをついてゆすぶった。気を失っている相手の意識を戻す行為。少し呼びかけると、大道は辛そうな目を開ける。

少年はその目を見ると、すぐに強く大道の名前を呼んだ。

「先生！！」

「こ、光介くん……」こうすけ

大道が話し始めた。光介はゆらすのをやめ、じっと耳をかたむける。その目はまっすぐ大道の口へ向けられ、一言一句聞き漏らさないつもりだ。

「僕はもうだめだ……助かりそうもない。学校で会ったときから迷惑かけてすまなかった……。だが、奴らと戦うためには、どうしても、君が必要だった……」

大道が話しているうちに、奴らが路地に入ってきた。奴ら——
—大道のケガの原因であり、二人がついさっきまで戦っていた相手。今は逃げる側に立っているが。

「先生、奴らが来ました!」

傷を負った大道の代わりに、光介が敵の存在を感じ取り、知らせる。大道は、ふっと息を吐き、

「もうか……。時間がない。光介くん、最後に、君に渡したい物がある……」
と言って、ぴくりと体を動かした。

それに対し、光介は目を最大まで開く。

「さ、最後? そんなこと——」

途中で己の言葉を遮った。大道の最後、という言葉に驚愕の表情を見せた光介だったが、確かに大道にとってはこれが最後なのだと悟ると、こくりとうなずいた。

その顔を見ると、大道はもう大丈夫だろう、というふうにはズボンのポケットに手をつっこむ。

「これだ……」

大道は、服のポケットから、赤い、ベルトの前側の金具にあたるような機械を出した。なにか、端子を差し込むようなスロットがついている。USBメモリを入れることが出来そうなもの。

「ロストドライバーだ。これなら奴らをけちらせる」

その名を告げる。それに呼応するように、ロストドライバーがキラリと赤く、神々しく光った。にごりのない、正義を象徴する赤。

「ロストドライバー……」

光介は、大道が出したロストドライバーを、ゆっくりと受け取った。手渡しする際に、金具の音がカチャリと鳴る。

完全にドライバーが光介の手に行ったことを確認すると、最後に言った。

「“仮面ライダー”は、君が引き継ぐんだ……。そして、本当にすまない。これが、最後の頼みになる。もしもだ、もしも助かったなら、風都に向かうんだ……」

そういつて、気が晴れたように大道は目をつぶり、ロストドライバーから手を離すと、力尽きてまた倒れた。体を支えていた光介はすぐにそれに気づき、また大道の名を叫ぶ。

「だ、大道先生！？ 大道先生！！」

だが、いくらゆさぶっても、大道はもう答えなかった……。単なる無言ではない。体全体に力が感じられないのだ。その意味を知った光介は、ゆっくりと、大道の体を地につけた。

「フッフ、見つけたぞ」

奴ら————マスカレイド・ドーパントたちは、ゆっくりと近づいてくる。余裕の歩みだ。光介の後ろは路地の行き止まり。マスカレイドたちが路地に気付かず通り過ぎるのを待つつもりだったのだ。

「大道先生………わかりました。僕が新しい、”仮面ライダー”になる!!」

光介はすつくと立ち上がり、マスカレイド・ドーパントと向き直った。その目には微塵の迷いもない。それと同時に、

「パライイイン!!!!」

という、路地の窓のうちの一つが割れる音。そして、鳥のような、黒い翼、それを支える銀の骨格、翼の内側に沿って、Y字に金色が描かれている『それ』が光介の上空に来る。

光介は、なんとなく、どうすればいいのかがわかった気がした。だから、つぶやくように、搾り出すように、低い声で一言だけ言う。

「変身……………」

そして……………。

第一話 始まりの夕（後書き）

k. iはこの欄には製作時のウラ話を書いていこうと思います。
主な内容はウラ設定です。お暇がありましたらお読み下さい。

－作品のウラ設定－

1、この物語の時間設定

この物語は、プロローグにあたる「始まりの夕」に関してはA
to Zの前、本編はその後の時間、となっています。なので、こ
の物語は、Wの話でフィリップが消えたあと、オーズの話でアंक
と映司が出会ってからしばらく経ってのことです。ですから、当分
は、Wではなくジョーカーが登場し、オーズもしばらく登場しませ
ん。

第二話 Mの仕事／ジョーカーVSマスカレイド（前書き）

今回、仮面ライダージョーカーが登場します。前話の後書きで申しましたように、Wが登場することは出来ません。しかも、肝心のエクストリームはまだ未登場、となってしまうたので、前話の前書きにあった、「エクストリームが使用出来るメモリ」というのが出来なくなってしまいました。しかし、エクストリームはいずれ登場しますので、その時こそ、この計画を実行しようと思います。

第二話 Mの仕事／ジョーカーVSマスカレイド

風都。風の街。

その名の通り、風を大事にする場所で、風力発電によるエコを推進していた。

今日も涼やかな風が、赤い風車をまわしている。中心部では、先日起こった、大道 克己^{かつみ}、仮面ライダーエターナルと『NEVER』の隊員たちによって引き起こされた大事件で破壊されてしまった風都のシンボル、風都タワーの再建がすでに始まっていた。

それを見ている男が一人。黒い上着で、ハードボイルド小説の主人公のような縁がついたソフト帽をかぶっている。彼の名は左 翔太郎^{うたろう}。あの事件のとき、エターナルと戦った、”仮面ライダー”の一人だ。

「今日もいい風がふいてんなあ……」

工事により直っていく風都タワーを、工事現場から近い距離より見て、翔太郎は満足そうに見る。だが、同時に少し哀しげな表情を見せた。

実は、翔太郎はこの前、大切な友人を失っていた。共に風都を守るヒーロー、仮面ライダーW^{ダブル}に変身していた、フィリップ、という人だ。最後の変身を遂げてから、もう、一週間が経っていた。彼は地球との接触が自由な能力を有していたために、最後の変身によって、接触どころか完全に消えてしまう運命にあったのだ。翔太郎の所属する鳴海探偵事務所の所長の、鳴海 亜樹子^{なるみ あきこ}も、いつもの元氣

な声を出さなくなった。

「フィリップ・・・・・・・・」

大丈夫そうに背骨をぴしっと伸ばしているながらも、ときおり、フィリップのことを思い出し、哀しくなる。そんな時間がずっと続いていた。翔太郎は少し肩を震わせる。泣いているわけではないのだが、フィリップが消えたそのときはやはり泣いた。

今は泣けない。フィリップの代わりに今度は一人で戦っていくと心に決めたからだ。消える前の日、フィリップが、二人で変身する『W』ではない、一人で変身できる変身ツールをプレゼントしてくれたのだ。今はそれを使い戦っている。

プルルルル・・・・・・・・。

翔太郎のケータイであると同時にWの武器にもなる、メモリガジェット『スタッグフォン』が唐突になり、ズボンのポケットをふるわせた。スタッグフォンはクワガタのようなメカにも変形できる。その為、ケータイとして使うときも、赤と黒のクワガタが変形したような形をしている。

「もしもし」

スタッグフォンを耳にあて、かけた相手の返答を待つ。相手は大体想像がついていた。

「翔太郎くん、大変よ!!」

その相手は、亜樹子である。亜樹子のこの大きな声は、フィリップ

プが消えて以来、久しぶりに聞いた。翔太郎は少し安心する。

「どうした、亜樹子。そんなに急いで」

ふー、と息を吐きながら言うと、亜樹子は、翔太郎よりも若いらしく、早口で。

「あのね、さっき街の人に聞いたんだけど、黒服を着た怪しい人が、バイクで風都タワーに向かってるってよ。もし風都に手を出したら、翔太郎くん、やっつけちゃって!!」

まるでガッツポーズをしているかのような亜樹子の、久しぶりの声に、

「ああ、わかったよ」

と、自然といつもの返事が出来た。

「よし、と・・・・・・・・」

翔太郎がカチャ、とスタッグフォンをしまいが早いか、すぐに工事現場に多数の黒いバイクが入ってきた。乗っている人間は皆黒服を着込んでいる。あれか、と翔太郎は思った。この夏の暑い日に黒服とは、確かに怪しい。それに、あのような服装をするのは、仮面ライダーの敵側の組織の戦闘員で、怪人『マスクレイド』になる者たちくらいしかない。

「いくぜ」

翔太郎は彼らのあとを追って、勇んで工事現場に駆け込んでいった。

黒服の男たちは、工事現場に入ると、いつせいにバイクを降りた。無精ひげを生やしたライダー格の男がニヤリと笑う。他の人間たちもまた、似たような姿をしていた。本来マスカレイドたちにライダーとかそういった関係はなく、一種の平等関係にあるのだが、今回の任務では

「ここか、大道 克己が派手にぶちこわしたところは……」
よし、アレを回収しに行くぞ」

男の合図で、男たちが黒いUSBメモリに似たモノを出す。それは彼らが怪人マスカレイドに変身するツールで、仮面ライダーの変身ツールの一つでもある『ガイアメモリ』というものだ。そして、ボタンを人差し指でカチリと押した。

『『『『『『マスカレイド』』』』』』』

メモリ上部にあるスピーカーから流れ出た電子音声が工事現場のかげで鳴り響いた。

「ふん」

彼らはメモリをうなじに差込み、顔だけが変化。黒服はそのままに、体のみが怪人となった、マスカレイド・ドーパントになった。マスカレイドは、骨が顔に張り付いたような怪人である。ドーパントとは、平たく言うと、メモリで変身した怪人。本来『コネクタ手術』という、メモリ挿入用のマークを設置するものなのだが、なぜか今回はそれはなく、肌直に挿して変身した。

マスカレイドたちは、行動を開始しようとする。だがそれは、計画が始まる前に間に合って現れた翔太郎の、

「待て!!」

という声によって止められた。声に気付いたマスカレイドはぴくつと動きをやめ、背後の翔太郎を見つめた。

「おまえらやっぱリドーパントか。風都タワーを壊す気かっ。・・・
・・・そうはさせないぜ」

そういつて翔太郎は、黒い、『J』の文字が描かれたガイアメモリを手にした。端子は金色である。同時に変身ベルト、ロストドライバーを装着する。風都で活躍している仮面ライダーは、このように赤く、スロットが一つあるいは二つあるベルトとガイアメモリを使って変身するのだ。例外もあるが。

「フィリップ・・・」

翔太郎は何か言いかけたが、おっと、とやめると、ボタンを、先ほどのマスカレイドたちと同じく、カチッと押した。

『ジョーカー!』

さつきとは違う音がスピーカーからこぼれた。それを聞いたマスカレイドは、骨が張り付いている顔をぴくりと震わせて、むう、と低い声をもらした。

「ジョーカー、仮面ライダーのメモリか」

そういわれると、翔太郎は否定せず、自らを名乗る。

「そうだ。俺は」

そして、メモリをロストドライバーに差込み、展開しながら叫んだ。

「仮面ライダーだ!!」

メモリのスピーカーから、使用したメモリを知らせる、メモリの名前が言われる。

『ジョーカー!!』

小気味よいリズムの変身音と共に、翔太郎は、現在風都を守っている仮面ライダー、ジョーカーに変身。マスカレイド軍団に向かって恐ろしい速さで走っていった。仮面ライダーは皆このような身体能力を有する。

「ハッ、ダッ!!」

強力なパンチを次々と浴びせていくジョーカー。マスカレイドたちには、気の休まるヒマも与えられない。能力は以前の仮面ライダー、Wに劣るが、ジョーカーメモリに秘められた技の力で、どんどん彼らを押していく。

（フィリップ……おまえはどうしてる？ 今もどこかで生きてるのか……。俺は今も、仮面ライダーとして風都を守り続けている。仮面ライダー、ジョーカーとして。フィリップ、おまえが戻ってくるまで、俺は負けない!）

「おりゃあーっ!!」

ジョーカーのキックが、マスカレイドの一人に命中し、吹っ飛ぶ。ジョーカーは、なんとかマスカレイドを工事現場に行かせまいとしていた。フィリップが戻ってくるまで、風都を守り続けると誓ったのだ。

『ジョーカー！ マキシマムドライブ！！』

力強い電子音が響く。ジョーカーメモリを右腰のマキシマムスロットにセットしたのだ。マキシマムスロットは、メモリをセットすることにより、メモリの力を強制的に増大することが出来る。それをマキシマムドライブという。また、マキシマムドライブによって発動した技は、メモリだけを破壊する”メモリブレイク”になる。

「ライダー、キック」

ジョーカーは大きくジャンプし、紫色のエネルギーがこもったライダーキックをマスカレイドたちに当てた。

「ぐ、ぐああああっ！！」

マスカレイドたちはいっせいに爆発、メモリが排出された。

カラ、カラカラ。

メモリが地面に落ちる。ジョーカーはメモリのうちの一本にかけよる。

ヒュオオオオオオ・・・・・・。

ロストドライバーのスロットを閉じ、変身を解除。そしてメモリを拾い、翔太郎は驚きの表情を見せた。

なんと、マスカレイドメモリは破壊されず、依然として『M』の字を翔太郎の目に映している。他のメモリもそうだ。しかも、おどろくべきことに、メモリは全て、翔太郎が今使ったジョーカーメモリと同様の仕様なのだ。

通常、敵組織にあるメモリは、骨がはりついたような仕様のメモリになっている。それに対し、仮面ライダーが使用するメモリは、純正化されているため、機械的な雰囲気をただよわせる、かたい感じの仕様になっていた。通常、といったのは、敵組織の造ったメモリの中でも、翔太郎のメモリと同じ仕様の、”T2ガイアメモリ”という種類のガイアメモリが存在するからである。

このT2メモリは、財団Xという組織が造り、AからZまでのメモリが一本ずつ造られ、マキシマムドライブでも破壊されないという特徴を持っていた。

「どうなってんだ、こりゃ」

またT2メモリか、と、翔太郎は険しい表情を見せた。

第二話 Mの仕事／ジョーカーVSマスカレイド（後書き）

—製作ウラ設定—

2、マスカレイドメモリについて

今回登場したマスカレイドメモリは、T2ガイアメモリと酷似していることが本文中で出ました。このメモリ、実はグレードアップを果たしています。それはどんなことか。マスカレイド・ドーパントの能力アップがされているほか、

「マスカレイドメモリの力は弱いので変身者にまったく影響を及ぼさない」

「マスカレイドメモリは量産可能」（本編において）で、とても小さな機械で製作可能、簡単に出回る」

というのがあります。要は、マスカレイドの戦闘員としての能力を大幅にアップしたわけです。よって、マスカレイドは、本作ではかなり重宝されることになります。なので、マスカレイドのパワーがかなり強くて、納得出来るようになったと思います。

第三話 Mの仕事／ねらわれた風都タワー（前書き）

今回、ついに光介がちらりと姿を見せます。なので、カウント・ザ・メモ리즈を始めようと思います。

— カウント・ザ・メモ리즈 現在エクストリームが使用出来るメモリーは—
不明

第三話 Mの仕事／ねらわれた風都タワー

「ほう、これがそのメモリか」

風都署超常現象捜査課。翔太郎と亜樹子は、課の刃野 幹夫、真倉 俊、そして風都を守る二人目の仮面ライダー、アクセルである照井 竜に、例のマスカレイドメモリと、逮捕した男たちから押収したメモを見せていた。竜は赤いジャケットが特徴的で、刃野は孫の手を常備していた。

「確かに、俺たちの使うメモリと似ているな」

竜はメモリを手にとって見た。指紋検査は完了していたが、まったく手がかりはつかめていない。

「俺が思うに、また財団Xが何か始めたんじゃないかと思うんだが・
・・・・」

竜が、メモを見ているところで、翔太郎が言う。

「おうら左、おめえまだ隠してることあんじゃないのかコラ！」

あまりにも調べが進行しないことを気にしてか、真倉が翔太郎につめよる。真倉は、翔太郎が警察の仕事に介入することをあまり良く思っていないかった。

「おいナマクラさん、俺は風都のためなら命もかける男だぜ。そんなことするわけねえだろっ!!」

翔太郎も真倉につめよる。翔太郎は真倉のことを『ナマクラさん』と呼んでいた。いつにないがみあっている二人を、

「翔太郎くん、ナマクラさん、ちょっとストロップっ!!」

と、亜樹子がスリッパで二人をたたいてとめようとするが、今度は二人がかりで亜樹子につっかかってくる。

「亜樹子、今取り込み中だ。あっち行つてろ！」

「俺はナマクラじゃない!!」

「うるさい!!」

あまりにうるさくつかかってくる二人を、亜樹子は緑の、『だまれ!』と書かれたスリッパでたたく。

「「ああゝ・・・・・・・・」」

二人ともぼったりと床に、文字通り枕を並べて倒れた。今のは亜樹子のMAXパワーだった。それを見て、竜と刃野はあ、とため息をついた。同じうるさい知り合いを持つ者同士、気が合ったのかもしれない。

「静かになったな。じゃ、説明だ」

竜は残りの二人に説明を始めた。

「まず、このメモ」

竜はピラピラとメモを見せた。このメモも指紋等の検査は終了している。

「このメモには、『風都タワーのアレを回収』、と書かれている。殴り書きなので、この先はとぎれとぎれしか解らない。忘れっぽい奴が任務の内容を書いた物だろう」

「はい、質問です」

亜樹子が、ぱっと手を挙げた。

「なんだ、所長」

「アレって、何ですか？」

亜樹子の質問に、うーんと一考すると、ためらうように言った。

「”回収”とあることから、何か、役に立つもの、ある程度の大きさを持つもの。それはおそらく」

「エキスビッカーですか？」

刃野が自身の予想を言う。

「そう。おそらくエキスビッカーだ。……………そしてそれを使うのは、メモリを多く持っている」

「財団X、だな……………」

いつの間にか、翔太郎が再び起き上がり、ハードボイルドっぽく言った。竜は、もう起き上がったのか、という顔を見ると、こくりとうなずいた。

「そうだ。さっきおまえが言っていたとおり、財団Xの中の支部の一つではないかという見解が出ている。まあ、こういうことは市民の混乱を避けるため、あまり口にしえないほうがいいんだが……」

「なに言ってるんだ。仮面ライダーにはいわなくっちゃ、なんにも始まんねえだろ」

翔太郎は久しぶりに、自信のある顔をした。フィリップを失って以来、とても久しい。事件は探偵を元気にする————そんな言葉が翔太郎の脳裏に浮かんた。

（そうだよな。フィリップが戻ってくるまで、俺が風都を守らないと。落ち込んでる場合じゃない！……また『ハードポイルドじゃないね』っていわれちゃうぞ）

翔太郎は自分で自分を元気づけようとしていた。そんな翔太郎の顔を見て、竜は、

「そうだな」

と笑った。刃野は、というと、真倉を起こそうと孫の手で一生懸命に彼の頭をたたいていた。

「おい、起きろよ、ナーマーカーラーさん！」

「お、俺は、ナマクラじゃ、ない……」

真倉は、寝言にも同じことを言っていた。そのこっけいさに、一同はどっと笑った。

風都には、丘が一つだけある。風都緑公園の丘だ。とても見晴らしが良く、風都の風がよく吹く。

そこに、二人は立っていた。

「光介、ここが風都か。結構良さそうところだな」

「うん。僕の生まれたところでもあるから」

「仕事でいなくなってた君の両親もいるんだろう？」

「ああ。当分、ここで生活するには支障ないだろう」

その後少しの間、風都の、箱庭のように美しい風景を見ると、二人は丘を降りていった。

第三話 Mの仕事／ねらわれた風都タワー（後書き）

―製作ウラ設定―

3、広 光介の名前の由来

光介の名前の由来は、主にエクストリームのマークから来ています。エクストリームの、広がるようなマークから広、広がっていくものと言えば光。そして、物語に介入して人々を変えていく、主人公としての介です。これからもどんどんオリジナルの人々は増えていきます。光介の周りの人々も増えていき、さらに設定は深くなると思います。

第四話 Xの始まり／住居編（前書き）

ついに光介が動き出した第四話！ これから光介の周りの人々を増やしていくつもりです。

— カウント・ザ・メモ리즈！ —
エクストリーム

第四話 Xの始まり／住居編

丘を下り終えた光介は、風都緑公園にある、風都全域を表した地図を見た。住居、商店街に至るまで、全て書いてある。

「風都って、誠意あるなあ」

感心しながら地図を見せてもらう。一緒に下ったもう一人とは別行動だった。彼は今、光介が入るのに良い中学校を探しているだろう。

そして、光介は住居を探す係。二人とも今日中に探す気でいた。まあ、実際には、ここに来るまで、野宿も珍しくなかったのだが……。

そうだ、と光介はポンと手をたたいた。野宿していたときに出会った面白い人のことを思い出していたのだ。

私利私欲はなし、強いて言えば、明日のパンツと少しのお金が必要……そんな人だった。初めて会ったときには、もう野宿はやめるっぽかった。今はどこかで楽しく暮らしてるのかもしれない。

「まあ、元気にしてるかな。また野宿してたりして」

よし、と光介は歩き出した。住居はもう決まっている。名は『アパート ツイン』だ。なんでも、双子の子供たちがいるそうで、その子たちが生まれた記念にそういう名前にしたそうだ。彼らはもう、光介と同じ中学生というから、ずいぶん長いことこのアパートはあ

るようだ。

「さて、行こうか」

レッツゴー、と光介はアパート ツインに向かった。このとき、光介はアパートに入る際の重要な手順を完璧に忘れていたのだ・・・。

「えっ、アパートって、アパートの大家さんに入るって言うんじゃないんですか？」

光介はアパートに来て早々に、驚きの表情。

「ああ、すまんねえ、このアパート、私と不動産屋に言わなくっちゃならないんだよ」

大家の両崎 りょうづき まさこめ 纏が、申し訳なさそうに言った。

そう、光介の忘れていたアパートに入る際の重要な手順とは、不動産に一報告（許可をもらう）↓大家に一報告（許可をもらう）↓入れる、ということなのだ。

「まあ、私から不動産屋に言っとくから、今日は勘弁な？」

（今日で野宿も終了か、なんて思ってたのに・・・）

今日だけでどうにかすると言っていた光介は、ガックリとわかりやすく落ち込んでいた。それを、両崎が慰める。

「今日は私のうちに泊まってくかい？」

他に住むところがなさそうだと感じた両崎は、せめてもの助け舟を出した。

「はい………お願いします」

なんとか話をまとめれた、と思った両崎はホッとした。大家たるもの、住む者、住もうとする者には寛大じゃなくちゃいけない、それが両崎のモットーだったからだ。

「—————で、今ボクたちはここにしているわけか」

「うん」

その晩の両崎家………光介は、無事学校を見つけて帰ってきた彼に事情聴取されていた。両崎家は、昭和の家、な感じがしてとてもいいところだった。

「おまえの一言、もう一度、言ってみて」

「『今日一日だけで全部済ます』」

「………だったよな。で、ここの大家の一言」

「『早ければ、明日どうにかなるよ』」

うむと、彼はこっくりうなずいた。

「じゃ、最初の一言がキミは出来てない、と」

「うん」

「で、ボクは出来ている、と」

そのとおり、と光介は申し訳なさうに言った。

「ごめん」

「うん」

やっぱり約束は守らなくっちゃな、と愚痴をこぼしながら、彼は両崎に与えられた寝室に向かった。

「八時から風呂入っていいってよー！」

昭和らしく、急ななぼり坂の階段を黙ってのぼっていく彼に、一応言っておくべきことを伝えた。

「ふう、あいつは約束事に敏感だからな。約束は破れないな。まあ、このメモには――――」

光介は彼が残したメモを手にとった。メモには、『風都緑中学校』と書かれている。なにかと細かい彼の、『この地域は名前に緑とつくところが多いな』というコメントも書かれている。

「明日から行けるであろう中学校の名前も書いてある」

光介はメモをポケットにしまって明日の身支度を始めた。中学校の方は当日行くことが出来るだろう。

「お風呂どうぞー！」

両崎の高い声が光介の耳に入る。七時半。風呂は光介の順番になった。パパッと身支度を整えた光介は風呂に向かった。

「ああ、良い風呂だった。君はどうだった？」

「まあ良かった」

光介は彼の機嫌の良さそうときに聞いてみた。彼はまずまずな感想を述べた。

「一番良かったのは、適度な水温であろう。人体は活動時には体温二十三度がいい。それを保つための水温がパーフェクトだった。それに――――」

「はいはい」

彼の話、光介は途中で遮断。彼は約束事にうるさいだけでなく、話も長い。頭に情報がどんどん入ってくるのだ。その情報は、無限に伸びるヘビのように長い。いやむしろ、永い。

「ところで、エ――――」

彼の名を呼ぼうとしたとき、

「早く帰ってきなさいよ!!」

という大きな声が二人の耳に入った。

二人は、なんだなんだ、とそつと一階に下りる。

その声は、両崎の声だった。両崎は、電話で誰かと話しているようだった。

「ショウタロウ、早く帰りなさい。最近、ずっと夜おそくじゃないの! ライトは勉強のせいで帰ってこないのだろうけど、あなたは何? 不良っぽい人とからんでるっていうウワサもたってるのよ! あ、ちよつと切らないで話を聞きなさい————」

ツーツーツー……。

電話が切れた。両崎はバシッと受話器をたたきつける。そして、光介たちのほうを見た。

一瞬ビクッとした二人だったが、彼女は悲しそうにすこし笑っただけだった。

二人に近づいて、話し出した。

「このアパートの『ツイン』っていう名前はね、私の、双子の子供、ショウタロウとライトが生まれた記念につけられたのよ。それは皆知ってる。だけど、最近の二人は、ずーっと家に帰ってこないの。ライトは勉強を夜遅くまで、学校でして、そいで帰ってくるんだけど、ショウタロウは……。」

両崎は泣きそうな顔をした。あまりにも深刻だと思った光介は、一つ質問をした。

「あの、ちょっと伺いたいんですけど、その二人の学校は？」

ふう、と気を落ち着けて、両崎は言った。

「風都————風都緑学園よ」

「そうですか、ありがとうございます」

「おやすみなさい」

「おやすみなさい」

両崎と光介たちは、それぞれの寝室に向かった。

（こんなことがあったなんて・・・・・・・・）

深夜。光介は仰向けに寝ながら考えていた。

（ショウタロウさん、ライトさん、明日、家族の大切さを教えに行きます）

ふーっ、と息をして、光介は久しぶりの布団にくるまって休息した。

第四話 Xの始まり／住居編（後書き）

—製作ウラ設定—

4、両崎 纏の名前の由来

『両崎』は、シヨウタロウとライトの二人がいるからです。『纏』は、二人をまつめる、親の意味です。シヨウタロウとライトに関しては、ツインなのでWの二人の名前を持ってきました。

光介「ところで今回、今まで『彼』ってふせられてたヒトの名前が一瞬出そうにな ったよね」

彼「エから始まる名前なのは一目瞭然だね」

光介「教えよう！ 彼の名はエ——」

k. i「そっ、それだけは」

光介「もごもごっ！ 口をふさがないで」

彼「名前は次出るからいいんじゃない？」

第五話 Xの始まり／学校編（前書き）

ーカウント・ザ・メモリーズー
エクストリーム

第五話 Xの始まり／学校編

次の日の朝。

光介は、彼に昨日教えてもらった学校に向かった。心のうちでは、昨日の夜に、やると決めたことが何度も何度も反復されて思い出されていた。

「風都緑中学校・・・一体どんな中学校かな？ 緑だから、学校内が木ばっかり、とか？」

初めて彼に会ったあの日————同時に大道先生と死別した日から、学校には行っていなかった。ただ、風都に行かなければ、思ってきただけだ。それだけに、久しく通うことになる中学校には興味があった。

校門に入り、靴箱で靴を履く。思ったとおりの、緑あふれる学校だった。光介のクラスは一年三組。二階だ。

風都らしい緑の学ランに白ボタンの制服をぴしっと着て、すたすたと光介は二階に上がって行った。学校に入る際の手続きは彼によってすでに完了していた。

学校側によると、新入生の紹介をするために二階の学習室で午前八時まで担任が来るのを待っていてほしいそうだ。

学習室に入り、入り口近い机に座ると、きちんと座って先生を待つ。

ふーっと、光介が息をついたとき、突然、ガラガラとドアが開いた。

「おかしいな」

光介は教室内の掛け時計を見た。まだ七時四十五分。先生が来るには早すぎる。何か用事があったてきたのだろうか。

「おはよう」

ところが、教室に入ってきたのは中学生だった。同じ階であること、身長が同じくらいであることから、同じ中学一年生のようなのだ。

「おはよう」

一応、光介もあいさつを返した。先生ではなく生徒のほうが来るのは意外だったが、必要最低限の礼儀は持たなくてはならない。

「君が新入生だね。よろしく。俺は友。ゆう柱。はしら友。君と同じ一年三組だよ」

友は光介の手をつかんでぶんぶんとふりまわすような握手をした。振動が光介の肩まで届く。

「じゃあ、また。行くよ、一真^{かずま}」

手を離すと、友はさっさと教室を出て行った。後ろには一真と呼ばれた少年もついている。光介は、一真の顔を少し見てみた。一真のほうも教室の入り口のほうを見ている。

(するどい目だなあ)

第一印象はそれだった。一真の名前にふさわしいように、一気に切り裂いてしまうような、そんな目を持っていた。光介はそれに深い何かを一瞬感じ取ったが、特に気にはしなかった。そんなことよりも、この学校のフレンドリーさのほうに興味が移った。

「新人生が来るといつもあんなのがいるのか。とても興味深い学校だ」

光介がうんと考えていると、八時を表すチャイムがすつと通る音で鳴った。

キーンコーン、カーンコーン……。

それと同時に、ガラッとドアが開き、またまたフレンドリーそうな男性教師が入ってくる。雰囲気的には、さっきの生徒、友と寸分たりとも変わらない。

「おはよう」

始めに、この先生もあいさつをした。光介も、今度はさほど驚くこともなく、表情を動かさずあいさつを交わす。

「おはようございます」

光介はガタリと席を立ち、ぺこりと礼をした。

「はじめまして。僕は君の担任の、柱 支モウキです。よろしく」

「よろしくお願いします」

あいさつを返しながら、光介は、ん？ と気づいた。

「あの、柱さん、ということは、友くんのお父さん？」

質問すると、支先生はにっこりと笑って返す。

「ああ、そうだよ。よくわかったねえ」

光介は、何故知っているのか、ということの説明することにした。

「ついさっき、教室に入ってきて、あいさつしてくれましたから」

支先生は、その言葉を聞いて、にっこりからにっこりにつこりに変わるくらい笑顔になった。要は満面の笑顔だ。このあたり、親も息子もとても友好的だ。

「おお、そうか。どうだい、うちの友は、親しそう過ぎて驚かなかった？」

「まあ大丈夫です」

実は意外に少し驚いたりしたのだが。それにしてもやはり、支は友の父だったようだ。

「よし、それじゃ、広くん。八時十分からホームルームだから、早めに準備しておこうか」

「そうですね」

二人は学習室を出て、一年三組の教室に向かった。

「……………というわけでこちらが広 光介くんだ、よろしくたのむよ」

八時十五分。もう新生紹介は始まっていた。黒板には、さっき光介が名前を紹介するために書いた、『広 光介』がある。

「よろしくお願いします」

光介は約四十人の生徒に向かって、礼をした。

「よろしく」

生徒たちから返事が返ってくる。

（ふうー、どうにかなった）

光介は事の成り行きにほっとした。自己紹介は短かったが、基本的な紹介は怠らずにやれた。

光介はこういった紹介事が苦手だったのだ。

「それじゃ、光介くんは……………開いている席がある、友のとなりに」

光介は友のとなりにゆっくり座った。となりがまさかさっき出会

った友とは、という驚きがあった。

「改めて、よろしく！」

「こちらこそ」

改めて握手することになった。友は、とても友好的だ。

（この学校もずいぶん良さそうだな！）

風都の理想的な学校状況に、光介は顔をほころばせた。

昼休み。光介は、双子の一人、両崎 ライトがいると聞いた二年五組の教室に行った。

ドアは開け放してあったので、遠慮なく入らせてもらった。

「ライトさんいますか？」

近くにいた男子生徒の一人に質問。

「ああ、あいつなら図書室にいるよ」

「ありがとうございます」

失礼します、と光介は教室を後にした。きちんとドアを閉めて。

「ライトさーん……………」

図書室に來た光介はさっそく、机にすわって静かに本を読んで
いるライトに声をかけた。昼休み終了まであと十五分。急がなくて
はいけなかった。

しーん……………。

ライトは、本に集中しているのか、まったく無反応だった。

「ライト先輩……………」

もう一度言ってみる。やはり無反応。

「あのラ……………」

「うるさいな！」

今度は払いのけられた。だが、すぐにライトは冷静に戻った。

「……………ああ、一学年新入生の広 光介くんだね」

何だ君か、というような顔をして、ライトは言った。

「知ってたんですか」

「ああ。ここの学校ならば僕に知らないことはないよ」

自信があるような顔で言うライト。

「すごいですね」

「君に興味はないよ」

「え」

なんと、本人の目の前で、相手を『興味ない』と言ったのけた。

（失礼な先輩もいたもんだ。って仕方ない。ここは大家さんのために、ライト先輩と和解を求めねば！）

自信のちょっとした怒りを封じ込めると、光介は友を見習って、友好的な物言いに徹することにした。

「それがですね、実は僕、先輩のお母さんの経営するアパートに住むことになったんですね。で、大家さんの悩みについて知っちゃったんです」

「どうせ、『ライトが勉強ばかりでロクに帰ってこない』……
・だろ？」

「知ってたんですか」

「風都の中でも僕が知らないことはないよ」

また自信のあるような顔をする。

「でも知ってるならなんで、改善しないんですか？」

「それはねえ……」

ふう、とライトは語りだした。

「ショウタロウがね、最近帰ってこないんだよ」

「知ってます」

「だろうね。で、その理由は、僕だけが知ってるんだが……」

「知ってたんですか」

「家族に関しても、僕が知らないことはない！」

（その話、三回目だ！！）

光介は口に出そうになった言葉をのみこみ、

「ぜひ教えてください！！」

といった。

ライトは、情報に関してならばとても探究心を持つらしい。机をガタリと立ち上がり、

「教えよう！ キーワードは金、身代金、人質、そんなところかな」と教えた。

「えっ」

ライトの答えに光介は口をアングリあけそうになった。

「キーワードだけですか？」

「うん」

そうだよ、とライトはコックリうなずいた。

「キーワードだけで考えろと？」

「大丈夫だ、広くん。人間、キーワードだけでもうまくいくものさ。よく考えて、自分なりの答えを出し、行動する。それが、人間ってもんさ！」

言い終わると、ライトはまた本を読み始めた。

「あと、母さんに伝えといて。『これが僕なりの親孝行だよ』って」

「は、はあ………」

そして、昼休みは終了した。

「—————で、キーワードをゲットしたと」

「うん」

その夜のアパート ツイン。光介は、彼に今日の報告をしていた。

「そして、ライトは親孝行してる、と言っている」

「それは大家さんに言つといた。『確かにあの子、昔から誰にもなにも教えず、教えてもキーワードだけだったもんねえ』って、言つてたよ」

「なるほど」

彼はうんうんとうなずいた。情報を整理しているのだ。」

「エクストリーム、なにかわかった？」

光介は、彼————エクストリームに聞いてみた。

「まあ待て。データ体がデータを整理するのは難しいんだよ。逆に吸収されないように、データを必要な量だけ吸入することが大切だ」

「それってダジャレ？」

「まさか！　ボクがデータ体なのは事実さ」

光介と会話を交わしたあと、エクストリームは目をつぶり、情報を整理を始めた。

エクストリームがデータ体なのに関して、彼はあの日来たエクストリームメモリだ。しかし、力を使いすぎたため、人体の体を模することで、メモリとしての能力を使わずに保っていた。

「ま、これは時間がかかるから、光介はねなよ」

エクストリームがぴつと時計を指差す。時刻は夜九時をさしてい

た。

「あ、そうだね。おやすみ」

光介は手早く布団を敷き、バフッと布団にくるまって寝た。

深夜。

情報整理が終了したエクストリームは、つぶやいた。

「両崎 ライト・・・・・・・・ただもんじゃあないな・・・・・・・・」

第五話 Xの始まり／学校編（後書き）

—製作ウラ設定—

5、ライトの能力

ライトの能力について、その能力は、ウォッチャマンとフィリップの情報収集方法を混ぜ込んだような情報収集です！ この能力は、仮面ライダーエクストリームでは、情報屋としての役割を果たしていきます。これから活躍が著しくなるでしょう！

光介「ついにエクストリームの名前が明かされ、うれしい限り！」

エクストリーム「両崎 ライト・・・・・・・・彼はただもんじゃあない・・・・・・・・・」

ライト「そうだろう。作者もこれからどんどん活躍するって言うぞ」

光介「そんなことより、キーワードの答え教えてよ」

ライト「ダメさ。この方法が僕のウリなんだから」

光介「まあ、本編の大活躍は重要・・・・・・・・このままでいいのかもね」

ライト「次からの僕は一味違う！」

第六話 Mの男／ツインのヒビ（前書き）

— カウント・ザ・メモリーズ —

エクストリーム

光介「全然変化しないね」

エクストリーム「これでマスカレイド一人でも倒せたら変わると思
うんだけど」

ライト「ここでまた新しいメモリが出そうだから、期待して待とう」

第六話 Mの男／ツインのヒビ

「ライト先輩は、親孝行しているつもりなのかぁ……………」

次の日の学校の帰り、光介はうーんとうなった。

もしかしたら何か特別な意図があるのかもしれないが、親孝行するんだったら、早めに家に帰ってあげたほうがよっぽど良いと思うのだが……………。

「やっぱり説得して、連れ戻した方が良いかな」

光介が回れ右して学校に引き返そうとしたとき――――。

「やあ。広くんじゃないか」

後ろから声がかかった。

「え」

光介が見てみると、ライトだった。ふふん、と笑っているような顔を見ると、後ろからずつとついてきていたようだ。ふふんと笑っているところを見ると、ずっと、後ろから尾行していたようだ。

「何故ここに？」

光介が後ろに向きなおして聞く。

「ショウタロウがいるからさ」

ぴっと、ライトは、さっきまで光介が歩っていた向きの前方を指差した。さっきは考え事をしながら歩いていたために気がつかなかったが、確かに、前に制服を着崩した人がいた。あれがショウタロウなのだろう。

「何故ついてきてるんですか？」

「昨日言っただろう。これが僕なりの親孝行だって。何故、ショウタロウが家に夜遅く帰宅しているのか、それを唯一知っている僕は、ショウタロウを見てなきや」

「やさしいんですね」

「僕は情報のほかに、地球レベルの優しさも持っている！」

そうやってライトは、昨日見せた自信顔を見せた。

「それでも、毎日見てるのさ」

ライトと話している途中に、ふと、ショウタロウがこちらを向こうとして、首を曲げた。

「まずい、隠れなくては」

そういうと、ライトは光介の襟首をつかみ、土手の下に隠れた。

「なんで隠れんですか」

「ショウタロウに気づかれるとまずいんだよ、いろいろと。とにかく

く、君は別の道を通って帰りたまえ。なぜなら、これから、シヨウタロウは――――」

「聞こえてるぜ」

突然の声にライトがはっと頭上を見ると、土手の真上にシヨウタロウが立っていた。

「気づいてたのか」

「ああ、ずっと前から。ライト、おまえはもう帰れ。オフクロが心配するだろう」

「心配させてるのは君じゃないか！」

タツと、ライトは土手の上に来た。

「シヨウタロウは、あんなことするより、きちんと家に帰ってあげるほうが、よっぽど母さんを喜ばせてあげられる」

「気にすんな。ここは、おめえが入る領域じゃねえ」

「カッコつけないでくれ！」

ライトが叫ぶ。光介は、『あんなこと』のほうも聞きたかったが、今はそんな空気じゃなかった。

「とにかく、今日はいい。帰ろう」

ライトがシヨウタロウの腕をつかみ、ひっぱろうとする。だが、

ショウタロウはその手を振り払った。

「黙れ!!」

今度はショウタロウが叫んだ。きっとライトをにらんでいる。

「オフクロをたすけるためだ。あいつは、後二回でオフクロを助ける、そういつてるんだ」

そういつてショウタロウは、札束をライトに見せた。目測で、十万円というところだろうか。

「これを溜めるため、俺はいろいろがんばった。おかげで、ここまです来たんだ。頼む、俺の邪魔をするな」

ショウタロウは札束をポケットにしまうと、走り出した。

「待って!!」

ライトはショウタロウを追おうとしたが、ダメだった。いつも図書室にいたライトと、外で金を集めて回るショウタロウでは、足の速さの差は圧倒的だった。

「くっ・・・・・・・・」

ギリリ、とライトは歯ぎしりした。光介は、どうしたらいいかわからず、ただ立ち尽くしているだけだった・・・・・・・・。

「ただいま」

光介はアパートに帰ってきた。

「今日は両崎 ライトは早く帰ってきたんだな」

エクストリームは山積みになった布団の上で寝転がっていた。メモリ形態のときには鳥だから、何かの上が好きなのかもしれない。

「知ってたんだ」

「ああ。さっき窓から見えたから」

エクストリームはぴつと、この部屋に一つしかない窓を指差した。窓一つだけでは、朝日がなかなか差し込まないと、光介は困っていたものだ。

「まずいよ、エクストリーム。ショウタロウ先輩の話によると、あと一回分しか時間はないみたいだ」

「一回分？」

光介の言葉に、エクストリームは布団から飛び降りた。

「一回分て、なんの一回分だ」

「わからない。でも急がないと」

光介はあせっていた。早くしないと大変なことになる――――
そんな気がしたからだ。

「とにかく、こんだけキーワードそろえれば充分だろ？ 早く”検索”してよ」

エクストリームはこくりとうなずいた。

「わかった。明日朝一番に始めよう」

とある研究所————。

数人の男たちが研究室に集まり、話をしていた。

「それで、マスカレイドたちは仮面ライダーにすべて倒された」と

そういつている男は大きなイスに座っている。暗闇の中、実験道具のうちの一つがゴボツと音をたてた。

「はい」

「マスカレイド数人ごときどうということはないが、そのうちの一人が、任務の内容をメモしていたというではないか。これは、我々『CORE』にとってまずいことだろう」

「すみません」

「しかもTCガイアメモリの存在まで知られた……。ここまで損害を出したら、なんとしても任務を成功させろ」

「問題ありません。おそらくは……。あれは単なる実験に過ぎない。もう動き出してますよ。あの男はとんでもなく贅沢ですが、報酬さえ確実にもらえれば任務は遂行する」

「ああ、あの男か」

「はい」

暗闇の中、部下らしき男は礼をした。

第六話 Mの男／ツインのヒビ（後書き）

—製作ウラ設定—

6、オーズとの関わりについて

第五話でちらりと物語に出たパンツの人……あれは明らかに映司ですね。オーズはまだまだ出そうにないので、出来る限りオーズとの接点を作ろうとして出しました。

光介「そうか、あの人は映司さんだったのか」

エクストリーム「内容を見ると、アंकに会おう前」

ライト「オーズはとても興味深い。早く出ないかな」

k.i「まだ出ません」

光介「まだ六話目だし、仕方ないよ」

エクストリーム「せめてエクスピッカー編が終わらないと」

第七話 Mの男／ヒビの修復（前書き）

ーカウント・ザ・メモ리즈ー

エクストリーム

光介「最近出番が増えてきた、広 光介です」

エクストリーム「主人公なんだから当然だろ」

ライト「むしろ、第三話あたりでサブ人物みたいな登場を果たした自分を恥じるべきじゃない？」

光介「ors」

ショウタロウ「コラ、主人公をいじめるな」

ライト「いいじゃないか。僕は出番数第二位だぞ」

ショウタロウ「それも今のうちだ。いずれおれたちも、ショウタロウ、ライトの名前のおりに仮面ライダーWになって……」

それもありえるこの物語。この後の展開に、ご期待下さい。

第七話 Mの男／ヒビの修復

早朝。

光介たちの部屋では、すでに”検索”は始まっていた。エクストリームは目をつぶり、まるで情報がたくさん入った本をたばねるように、手を広げている。

二人が今している”検索”と呼ばれる行動は、光介とエクストリームが初めて出会った後、エクストリームの説明によって知ったものだ。エクストリームの本来の姿、『エクストリームメモリ』は、地球内部に納められている、『極限の記憶』を内包し、使用者を超進化させられるというメモリだ。しかも、極限とは、全ての記憶にかかるものであるために、全ての記憶を持つ場所、すなわち、地球の記憶そのものにアクセス出来る。

よって、調べたい項目は全て、エクストリームの手によって入手出来るというわけだ。

この状態において、エクストリームは、まるで図書館のように本がたくさんあるというイメージを見ることが出来る。この中から、情報検索という作業によって、一番入手したい項目を見つけ出す。

検索には、ある程度多く、キーワードが必要なため、光介が情報収集してやらなくてはならないのだ。

「一つ目のキーワードは？」

エクストリームが質問。光介が、ライトの言っていたキーワード

を思い出すように言う。

「金だったかな」

イメージ内の本棚が目まぐるしく動き回り、本の数が減った。金というキーワードを持たない本が消されたのだ。

「次は？」

「次は、身代金」

また本が減る。

「三つ目のキーワードは、……『人質』」

本が強烈に減り、残り数棚になった。

「すごいな」

エクストリームが感嘆の声をもらす。

「どうしたの？」

そう聞くと、腕組みをして、

「いや、両崎 ライトの的確さに驚いているのさ」と答えた。

「どういことさ」

光介が不審そうな目で見ると、少しばかり笑みをふくみながら言

う。

「ここまで効率的に本が減ることはめずらしい。いや、いつものが悪すぎるのかな」

「それ、どういう意味？」

光介は顔をしかめる。いつもの検索キーワードは、光介が作っていたのだ。

「なんでもないよ」

ふふ、と光介に向かって笑って見せた。

「ただ、キーワードがあと一つぐらい必要だ。おそらくそれで全て完了する。おそらく最後の金受け渡し日は今日だ。急いでさがせ」

「といったって、情報はそこら辺に落ちているものでもないしな・・・」

学校に向かっていている途中。光介は途方にくれていた。そう簡単に見つかるようなものではなかったからだ。エクストリームに聞くと、たいていのキーワードは、ライトにキーワードを聞いてきた日に検索してみた、という。ということは、意外な、誰も知らないようなキーワードなのかもしれない。

家と家の間で、光介はどうしたものかなと思いながら歩っていた。

「まいっ たな」

はあ、と光介はため息をついた。両崎家を救いたいが、救うためのキーワードは、どこにも見つからない。

ドン。

光介は、なにか金色のものにぶつかった。

「おい坊ちゃん、気をつけて歩けや」

金色なのは、ぶつかった男の服だった。めちやくちや贅沢な服を着ている。肥満な男で、どう歩ったところでぶつかるような体形だった。

「すみません」

光介は謝ると、男の横をどうにかして通ろうとした。

「おおそうだ」

急に男が振り返った。

「ぎょえっ」

男の体で、光介はぎゅう、と押される。

「おまえに名刺をやろう。おまえの母ちゃんとか、ここにさそつたら良からう」

どうやら、男は客を集めたいらしい。

（今でさえご贅沢な服着てんのに、これ以上お金集めて、一体にする気だ！？）

そんなことを考えながら、光介は一応名刺を見た。『金銀宝石店
店長 金銀きんぎん 銅鉄どうてつ』と書かれている。場所は風花町だった。

「じゃあな。あゝマネエー、マーネエ、マネーがどっこいしょ♪」

客が増えたことがそんなにうれしいのか、銅鉄は変な歌を歌いながら、道をふさぎつつ歩って行った。

（なんなんだ、あのおじさん！？）

光介は一瞬気になったが、まあいっか、と名刺をポケットにした。
った。

学校に着いた。この学校には途方通学の生徒用の入り口と、自転車通学の生徒用の入り口がある。別にどちらの道から行っても構わないのだが、自転車通学の者は自転車をしまっておくために必ず自転車用を選んでいる。

光介は今日は自転車通学をしていないが、両崎家には自転車が四台ほどあったので、ショウタロウがいなかったかと行ってみた。

「ショウタロウ先輩、いないかな」

光介はキョロキョロとあたりを見渡す。シヨウタロウはいなかった。

「まあ、そうか。やっぱ————」

「わかった」

ん！？　と光介はもう一度自転車を停めておくところを見ると、そのかげでシヨウタロウが誰かに電話をかけていた。

ささっと、自転車のかげにかくれて、シヨウタロウの動向を見る。

「わかったよ。だけど、本当にこれで最後なんだよな」

ああ、と光介はわかった。最後、というのはおそらく、金を渡すことなのだろう。

「本当に頼むぜ。ここまで夜通し働いて、疲れてんだから」

「コ・・・のためだ」

少し、電話の相手の声が聞こえた。光介は耳をすます。ちょうど風がやみ、あたりは静かになっている。

「COREのために、おまえにやらせてるのさ」

今度はよく聞こえた。『CORE』とはどういう意味なのか気になったが、重大なキーワードになることは間違いない。

（でかしたぞ、光介。これでどうにか大家さんを助けてあげられる）

グッと、光介はこぶしを握り締めた。

「検索終了。よくやった、光介。これで情報はつかめた。犯人まで特定出来るくらいだ」

へへへ、と光介は笑って見せた。どうにか今日までに間に合わせられたことがうれしくてたまらない。これで何とか、両崎家の人たちを救えるかもしれないのだから。

「で、何かわかったの？」

「ああ。よくわかった。金銀宝石店という商店の店裏に、小さな倉庫がある。光介がいつも通る土手、あれをわたりきるともう近くだ。で、その店裏で、家族を人質にされた人が金を渡してるとってわけだ。その店長は、ある犯罪組織とのつながりがあり、資金としてまきあげていたようだな」

「その組織の名前は？」

「CORE、という」

そうか、と光介は合点した。ということは、朝出会った男こそが、それなのだろう。

「エクストリーム、これを見てくれ」

光介はポケットから名刺を出してエクストリームに見せた。

「ほお、それは」

「店長の名刺さ。これによると、店長の名前は『金銀 銅鉄』。まちがいに、その店の店長だよ」

「なるほど」

「それにあいつ、マネー、って歌いながら歩ってた。てことは、彼の使うメモリは」

うむ、とうなずいて、エクストリームはマネーという項目を検索に入れた。本がさらに凝縮され、情報が収縮される。

「ああ。金銀 銅鉄が使用するガイアメモリは、『マネー』で間違いない」

ガタッ！

突然部屋のドアが開き、ライトが入ってきた。服は制服のままだ。

「大変だ。ショウタロウが土手に向かった。君たちもついてきたまえ！」

ライトの顔は冷静そうに見えて、相当あせっている。真実を知っているからこそだろう。二人は手早く準備をすると、言った。

「「わかった！」」

ライトと二人は、金銀宝石店に向けて出発した。

第七話 Mの男／ヒビの修復（後書き）

—製作ウラ設定—

7、エクストリームの設定まとめ

エクストリームの能力

？メモリとして仮面ライダーへの変身に役立つ

？人間態を有することが出来る

？フィリップと同じく、検索能力を身に着けている

？人間性が深い

光介「いやいや、？は能力じゃないでしょ。これは、エクストリームなら当然のはず」

エクストリーム「いや、意外に大変だったぞ。人間の姿かたち、心境をスキャンし、データ体をつくる。その中に本体をいれて、力が復活するまで、保護・・・・・・・・」

光介「うわっ、確かに大変だ」

ライト「ところで、次話で仮面ライダーに変身するっぽいけど、それって力が復活した状態？」

エクストリーム「そうに決まってるだろ！」

光介「実際には、力は復活してないけど変身は出来る、っていう感じになるんじゃない？」

エクストリーム「バカな！」

ライト・光介「いや絶対そうでしょ」

第八話 Xバトル／エクスピッカーの秘密（前書き）

—カウント・ザ・メモリーズ—
エクストリーム

光介「やったああああっ！」

エクストリーム「どうしたんだ？」

ライト「今回でついに、メモリゲットだって」

エクストリーム「ああ、そうだったな」

ライト「次話から、大幅にメモリが増えそうだし、期待が高まるね」

光介「やった！」

第八話 Xバトル／エクスピッカーの秘密

土手を走りぬけ、ライト、エクストリーム、光介の三人は金銀宝石店に着いた。

「着いたな」

「静かにしたまえ、広くんの付き人」

エクストリームの口をライトがふさいだ。

「ショウタロウが来たかどうかかわらなくなるだろう」

「すみません」

光介はつい謝ってしまった。

「……広くんは謝らなくてもよろしい。それより、ショウタロウが入ってくる。そのガレージに隠れたまえ」

ライトの指示で、車庫のガレージに隠れた。ガレージ内には、銅鉄のものと思われる金ピカのリムジンがあった。

（ぜ、贅沢すぎる……）

周りを見渡しても金箔ばかりはられているガレージしか見えないことに、光介は思わず感想をもらした。

「昔、母さんが来たときにも思ったものさ。『こうまで贅沢なのは

どうかしてる』ってね」

そこまで話したとき、ライトはすっとガレージ裏に隠れた。光介が見ると、すでに銅鉄も来ていた。

「やあや、シヨウタロウくん。こんにちは」

顔は見えないが、声だけは良く聞こえる。人通りが少ない店裏だからだろうか。

「・・・・・・・・」

シヨウタロウは返答を返さなかった。

「まあそう硬い顔するなってえ。今日はキミにとって最高にいい日じゃないか。いや、ワシにとってもいい日か。なんせ、今日で身代金の受け渡しも終わり。キミは本当によく頑張ってくれた。その家族愛に感動しそうだよ」

「黙れ。オフクロを人質にして金巻き上げる強盗もどきが、何言ってるんだ」

「いいのかな。そんなことってえ」

『マネー!』

「そ、それは・・・・・・・・」

くう、と恐怖にも近いうめき声を出すシヨウタロウ。ひゃっひゃっひゃ、と、顔をゆがめて笑う銅鉄の顔が思い浮かぶ。

「そ。最初、おまえに見せた、まあ強盗のピストルって感じかな。ガイアメモリだ。それもTC!! 初めておまえを脅したときを思い出すよ。『身代金一千万円渡さなかったら、これでおまえのオフクロ殺すぞ』..... 運が悪かったな、シヨウタロウ。むかし昔、あんたのオフクロがこの店に来たのが運のつき、ってわけさ!!」

(てい、TC!? なんだ、そのメモリは!?)

光介はTCガイアメモリが見たくてたまらなくなったが、まずは人命と、好奇心にも近い心を抑えた。

「仮面ライダーによって加頭は倒され、財団はガイアメモリ研究から手を引き、新たな研究物、『コアメダル』を作り出した! 我々COREは、コアメダルのメカニズムとガイアメモリの合体に成功した!! おかげでこの、TCガイアメモリを作り出せた、というわけさ。仮に今ここで、ウワサの『仮面ライダー』が来たところで、まったくのムダ。エクストリームでもなけりゃ、TCマネーは倒せない! さあ、力の差がわかったところで、金を渡せ!!」

エクストリームが、くすりと笑った。

「あほか。あいにく、こっちはそのエクストリームだよ」

「静かにしたまえって言ってるだろ!!」

エクストリームは、またライトに口をふさがれた。

ガレージ内に、パサ、という、札束がわたされる音がひびく。音

の軽量感から、十万円というところだろうか。

「フフフ。これで約束の一千万円、もらったぞ。これでCOREの資金はまた貯まる」

「てか、今日はやけにおしゃべりが多かったな」

「いいじゃないか。キミは、毎日おそくまで、中学生なのに働き、月謝をぜーんぶこのワシにくれたんだしな。で、しゃべりまくった理由はね」

『マナー!』

服のすそをめくる、ファサっという音が聞こえた後、TCマナーメモリが手首に差し込まれる音を聞いた。おそらく今は、TCマナー・ドーパントがショウタロウの目の前に立っていることだろう。

「証拠隠滅、か……」

エクストリームはさっと立ち、ガレージから出ると、TCマナー・ドーパントに走りよった。

「バ、バカ!!」

光介はガレージから顔を出し、状況を見る。

TCマナー・ドーパントは、全身が金色で、腹部が、まるで金が入っているかのようにでかかった。あれが動力源、というわけなのだろうか。

「さあ、シヨウタロウ。ワガママな不良息子として、最悪の死を迎えな!!」

TCマナーはうおお、とうなりながらシヨウタロウをなぐりつけようとした。シヨウタロウは目をつぶり、衝撃に耐えようとしている。

「バカが」

ガーン! と、エクストリームは、腹部に比べ細くなっている首筋部分をなぐった。

「いってえ!!」

TCマナーはその場にうずくまった。ドーパントと言えど、弱点をつかれると痛いようだ。

「よし」

光介も今だ、と言わんばかりに外に出た。

「なにい、二人もいたのか」

突然現れた敵にたじろぐTCマナー。

「実際には三人だけだね。よく見たまえ」

そしてライトも出てきた。

「おめえら、邪魔するなって言っただろう!」

ショウタロウが三人につっかかる。それにエクストリームは答えた。

「バカか。おまえは今死ぬところだったんだよ。ボクたちが『邪魔』しなかったら」

「ちっ……」

ショウタロウは下を向いた。光介はショウタロウに語りかけようと前に出た。

「ショウタロウ先輩、僕は、邪魔はいけないと思います。しかし、邪魔が必要だと感じたなら、僕たちは必ず邪魔します。今だって、みんなのことを最優先に行動しているから!!」

ショウタロウはゆっくりと上を見た。

「……わかった。心配かけてすまなかったな。おまえらも早く逃げろ」

「いえ、僕は大丈夫です」

きっと、痛みから回復したTCマネーに向き直った。

「僕は、『仮面ライダー』として、あの男と戦います!」

ふん、とエクストリームが前に出た。

「それを言うなら、『僕たちは』……だろ? 第一、ボク

なしじゃ、変身もできないくせして」

「ああ、ごめん。…………じゃ、行くよ」

「ああ」

ショウタロウとライトが驚く前で、光介はロストドライバーを腰につけた。ベルトが巻かれ、変身体勢が整う。

エクストリームは、己の本体である、鳥のような形状のエクストリームメモリを出し、データ体を吸収すると、ベルトに端子部分を差し込んだ。

ガシイイイン…………。

変身待機音が鳴り響く。

「「変身……………」」

光介はロストドライバーを展開した。すると、強烈な竜巻が光介の周りに現れ、

『エクストリーム!!』

という電子音声とともに仮面ライダーエクストリームに変身した。

黒いボディ。広大な面積を占める中心のクリア部分と、ロストドライバーの受光部分は、まるで地球の色を象徴するように緑色だ。黒部分と緑部分を分ける銀のラインが印象的。クリア部分の両端には、姿勢制御の役割を果たす、マフラー状の『ウインディスタビライザー』が一本ずつたなびいている。

形状では、肩と顔に『X』の文字を模したシールドがつけられ、複眼は赤い。特に、肩の『X』には、赤い背景色に、黒い『X』字が、鎖のように連なっていた。同じようなものが、アンクレットとして手首、足首の模様にもつけられている。

これが、ライトの感じたエクストリームの印象だった。

『今回は相手が悪かったなあ、金銀 銅鉄』

エクストリームが発言すると、複眼の右目が点滅した。

「そうだね。いや、運が悪かったというべきかな」

光介が発言すると、今度は左目が点滅。

「だ、黙れ!!」

TCマナーは怒鳴った。それはさつき銅鉄がショウタロウに言ったセリフである。

「『積み重ねられたおまえの罪……』」

エクストリームは右手を前に突き出し、ぐっと握り締めた。

「『今、打ち砕く!!』」

エクストリームとTCマナーの戦いが始まった。

エクストリームはTCマナーに走りより、左手でパンチした。

「痛った」

あまりの腹の硬さにうめく光介。それに対して、エクストリームは冷静に判断を下した。

『腹を攻撃するな。さっきボクがやったみたいに、首筋を攻撃しろ』

「うー、わかった!」

たあっ、とエクストリームは首筋をパンチする。だが、今度はTCマナーのほうが攻撃に向かってきた。金が入って硬くなった腹を使って、突進してきたのだ。

「おわあっ!!」

またもエクストリームは吹っ飛ばされる。常人ならダメだったろう。

「マスカレイド、来ーい!」

TCマナーの合図で、店からTCマスカレイド・ドーパントが出てきた。客として店内に紛れ込んでいたのだ。

「つ、強いぞ、このマスカレイド!」

「フッフ、マスカレイドといえど、TCだから強いんだよー!!」

TCマナーは、今のうちにと、風都タワーに向かって逃走した。

『く、待て!』

エクストリームが叫んだが、『待て』といわれて止まる敵がいるはずもなく……。

『光介、こうまで強いと、銅鉄に追いつかない。マキシマムで対抗だ!!』
ライトたちはガレージに隠れているようだから問題ない!!』

『マキシマム』とは、マキシマムドライブの略である。

「わかった!!」

承諾すると、光介は展開状態のエクストリームメモリを閉じ、再び展開した。

『エクストリーム! マキシマムドライブ!!』

「『エクストリームサイクロン!!』」

エクストリームのマキシマムによって起こった風で、マスカレイド軍団の変身が解除され、TCマスカレイドメモリがバラバラと落ちる。

「ライト先輩、警察呼んで!!」

TCメモリを回収しながら、光介は叫んだ。ライトはうなずくと、店内に入っていた。

「広、俺の自転車使え!」

ショウタロウは自転車に乗ってここまで来たので、それを使ってTCマナーを追わせようとした。

「ありがとうございます！」

光介はお礼を言うと、店裏に走りより、ショウタロウの自転車に乗る。そして、右腰からマキシマムスロットを出した。これはベルトから着脱可能なものだ。

マキシマムスロットを、今度はショウタロウの自転車に装着。そしてエクストリームメモリを抜き取り、セットする。

『エクストリーム！ マキシマムドライブ！！』

エクストリームの『データリユージョン』で、自転車がバイクのデータ体に組み込まれた。バイクは黒かった。

『光介、これはあくまでデータ体だ、スピードを出しすぎるな！』

「わかった！！」

エクストリームはアクセルをひねった。

「はあ、やっと着いたぞ」

風都タワー。TCマナーは、エキスピッカー取り外し作業の行われている工事現場に来た。

「はやく、エキスピッカーを……」

「『そうはさせないぞ!』」

ブルルン、というバイクの音が鳴り響き、エキストリームがやってきた。

「そんな、もう来たのか」

「工事現場の皆さん、早く逃げて!」

バイクから降りると、工事現場の人々を外に出させた。

『銅鉄、おまえ、こんなところで何する気だ』

「こうするのさ」

TCマナーはエキスピッカーに走りより、懷から取り出したTCマスカレイドメモリを順番にセットしていく。

『『『『『マスカレイド! マキシマムドライブ!』』』』』

「そんな、まだ持ってたのか」

「ああ、COREのご加護でな」

そういうと、TCマナーは、エキスピッカーから出たビームをエキストリームに放った。

「うわっ!」

エクストリームはどうにかしてよける。

『光介、気をつけろ！ あのビームは、当たったら一撃でやられるぞ！』

「わかってる！！」

その後も、どうにかして避け続ける。

「エクストリーム、どうしたらいい！？ 早く弱点を検索してくれ！」

『もう終わった。・・・光介、アレのマキシマムスロットのうち、一つだけ、他とは違うものがある。』

「なに！？」

『話はあとだ。行くぞ！』

今度はエクストリームが体を制御し、ビームをよけつつエクスピッカーに近づいていく。

「ハハハ・・・会ってすぐで申し訳ないが、もうおまえも終わりだ！」

そういいながら、マネーは自分の腹をぽん、とたたいた。すると、腹の厚さが変動。おそらく、集めた資金をCOREに送ったのだろう。

「ああ、シヨウタロウさんのお金が！」

『気にするな、もうすぐ、エクスピッカーに手が届く！』

そして、エクスピッカーのうち、『Z』のメモリが入っていた部分を抜き取った。同時にエクスピッカーの機能が停止する。

「「な、なに！？」」

マネーと光介は同時におどろいた。なんと、抜き取った部分は、剣状になっていたのだ！・・・それは、Wのプリズムソードと似ており、名づけるなら、『エクスソード』といったところだろうか。

『光介、おどろくのは後だ、すぐに決めるぞ！』

「う、うん！」

バイクからエクストリームメモリを抜き取ると、今度はエクスソードに挿した。

『エクストリーム！ マキシマムドライブ！！』

「『エクススラッシュュ！』」

エクススラッシュュがマネーに直撃し、マネーは、
「おわああああっ！」

という叫び声とともに銅鉄にもどった。からっと、落ちたTCマネーメモリはエクストリームが回収する。

TCマネーメモリは、Wの使っていたガイアメモリと同じような

仕様で、名前のとおり、金色だった。ただ一つ違うのは、端子部分が、地球を示すような緑色になっていることだけだ。

ピーポー、ピーポー・・・・・・・・・・。

パトカーの音が近づいてくる。風都タワー周辺のこと気づいたライトたちが呼んだようだ。

「よし、帰ろうか」

『うん』

エクストリームはバイクに乗り、その場を去った。それを、パトカー内の刃野と真倉はじーっと見つめている。

「「あ、新しい仮面ライダー!?!」」

第八話 Xバトル／エクスピッカーの秘密（後書き）

—製作ウラ設定—

8、なぜマネーになったのか

これは、作者の好きなドーパントってところですね。ドーパントの中で、結構不気味じゃないのを初登場させたかった、というわけです。それに、物語的にも、マネーが適任でした。

光介「金銀 銅鉄・・・・・・・・許せないな」

銅鉄「こんにちは〜！ マネエー♪!!！」

エクストリーム「あの歌・・・・・・・・芸でよくありそうだ」

ショウタロウ「俺にとっては、オフクロを人質にした野郎の悪趣味な歌にしか聞こえないが」

ライト・エクストリーム・光介「いやだれでもそう聞こえるよ」

銅鉄「マネエ〜〜・・・・・・・・ガツクリ」

番外編第一話 エクストリームの必殺技（前書き）

久しぶりに1日W投稿したk・iです。エクストリーム初登場記念として、エクストリームの必殺技について解説します！ 必殺技はまだまだ増えていきますが、過程として収録しました！！

番外編第一話 エクストリームの必殺技

仮面ライダーエクストリームの必殺技 （使ったら？、使っていないかったら？）

？エクストリームサイクロン

作品中で、マスカレイド軍団を吹っ飛ばした大技。主に、敵の数が多い場合に使用。イメージは、緑の風が竜巻になって敵を巻き上げる感じ。

光介「あれは強かったよね」

エクストリーム「第一話で使用したのもこれだったのかもしれない」

？ライダーエクストリーム

エクストリームのキック技。用法は『ライダーキック』と同様。イメージは、緑の風を巻き込んでける、走り蹴り版『ジョーカーエクストリーム（仮面ライダーWの技）』。

光介「いつか使ってみたい！」

？データリリユージョン

作品中で、自転車をバイクに変えた技。一応、デザイン等は自分で自由に設定可能。また、エクスソードを銃（名づけるならエクスマグナム） や棍棒（名づけるならエクスシャフト） に変えることも出来る。使用したい物にマキシマムスロットを装着する必要がある。エクストリームはこれを使って人間態を得た。

エクストリーム「便利な技だ。どういう用法もOKとは。ジーンの

ように有機物に限定されないのがいいところと言えよう」

？エクススラッシュ

作品中で、TCマナー・ドーパントを切った技。エクスソードのマキシマムスロットにエクストリームメモリを差し込むことで効果を発揮。色彩的には、他の技と同じく緑色の光を放つ。

エクストリーム「ボクが検索したものだ。よってこれはボクのものだ」

光介「いや、協同で使おうよ。この技はオーズバッシュ並に重要な技だし」

？スキヤニングスラッシュ

エクスソードにガイアメモリを装填し、放つ技。無限に種類があるため、それぞれの固有名称は不明。あくまで総称である。

？エクスバースト

データリユージョンで誕生したエクスマグナムに、エクストリームメモリを装填して繰り出す技。同じく緑の光を放つ。

？スキヤニングバースト

エクスマグナムにガイアメモリを装填し、放つ技。スキヤニングスラッシュと同じく、総称である。

？エクスブランディング

データリユージョンで誕生したエクスシャフトに、エクストリームメモリを装填して繰り出す技。他の技と同じで、緑の光を放つ。

？スキヤニングブランディング

メタルシャフトにガイアメモリを装填し、放つ技。スキヤニングスラッシュと同じく、総称である。

第九話 Xバトル／事件のその後（前書き）

ーカウント・ザ・メモリーズー

エクストリーム・・・極限の記憶

マスカレイド・・・仮面舞踏会の記憶

マネー・・・・・・・・お金の記憶

今回、翔太郎リターンズです。次回から、翔太郎と光介を近づけていこうと思っています。

エクストリーム「銅鉄・・・・・・・・本文中にもあるとおり、しゃべりすぎる奴だった」

銅鉄「マネエゝ¥・・・・・・・・。だってふつうさ、冥土のみやげにとか言うじゃないか！！」

エクストリーム「それが不注意ってものだ。ああいう大規模な組織なら、さほど問題ないんじゃないかと思うが」

光介「やっぱり、部下は、口の堅いのを選ぶべきだよね」

銅鉄「そんなあゝ。マネエゝ¥・・・・・・・・」

第九話 Xバトル／事件のその後

”前日の事件は風都全体に広まった。

事件自体の深刻さが広がるのは当然のことであるが、それ以上に広まったのは、刃野と真倉が見たという、『新しい仮面ライダー』だった。

街に前からいる二人の仮面ライダーのうちの一人が忽然と姿を消したからだ。

だから、街の人の期待は、『あの仮面ライダーが戻ってきたのかもしれない』だった。実際には、彼は・・・・・・Wはもう戻らないのだが・・・・・・。

だがそれでも、俺たち―――いや、俺は一人で戦わなくてはならない。いつか、フィリップが俺たちの前に姿を現すその日まで・・・・・・。

今回は新しい仮面ライダーが解決してくれたが、いつまでも頼り続けるわけにはいかないんだ”

「翔太郎ー！」

不意に、ばたん、とドアが開き、刃野と真倉が入ってきた。

ここは、鳴海探偵事務所。翔太郎は、事件の報告書を書いている最中だった。亜樹子は買出し中だ。翔太郎は、席を立ち、どうしたのか聞いてみることにした。

「どうした、刃野さん、ナマクラさん」

真倉のことを『ナマクラ』と呼んだとこだけ、ふっ、と意地悪な笑い顔を試してみる。すると案の定、真倉が引っかかってきた。

「おれはナマクラじゃないって言ってるだろ」

ごっん、と真倉は翔太郎の脳天をたたいた。

「いてっ！」

翔太郎は頭をおさえる。

「ほくらほら、その辺にしとけよ」

刃野が真倉を孫の手を肩にひっかけて引き寄せる。真倉は闘志満々なのか、翔太郎とケンカでも始めそうな勢いで手を振り回している。

「まったくおもしろえ奴だ。真倉の奴も。で、翔太郎。新しい仮面ライダーについて調べてみてくんねえか？」

真倉の襟首をつかみ、入り口のほうへ押しやると、刃野は依頼を述べた。

「なんでだ？」

「あの事件からさあ、新しい仮面ライダーについてのウワサがたつてんだよ。あの消えた仮面ライダーが戻ってきたー、とか。街は大

喜びさ。……だが、上層部は喜ばなかった。

上層部のところでは、『変なウワサを流すな』って言うってくる。俺たちを疑ってるんだな。実際に見た俺たちとしては、これが本当だって証明しないと、気が済まないわけよ」

刃野はまいったな、という顔を交えながら解説する。翔太郎は、帽子の縁をなでながらうなずいた。

「OK。わかった。やっておくよ」

「あんがと」

刃野と真倉は、依頼書を書き終わると、至って簡単に帰って行った。あの事件については一言も語っていない。語れないのだ。実は警察の取調べで、逮捕された銅鉄は、何もしらない、と黙秘し続けていた。ウソ発見器にもかからなかったそうで、捜査はあまり進んでおらず、風都新聞に発表したような内容しか出来ていないのだ。

今日もいい風が風都に流れ、風車をまわしていた。

両崎家にもまた、いい風が吹いていた。

ショウタロウが帰って来たのだ。事情は全て、光介たちから説明しておいた。

「ただいまー」

「おかえり、ショウタロウ！」

息子に久しぶりに顔を合わせたので、纏は思わずショウタロウに抱きついた。

「あんた、身代金払ってたの？　どうして今まで黙ってたの」

「銅鉄が、『おまえの母ちゃんには話すな』って言ったんだよ」

ショウタロウが少しうつむく。

「まあ。でも良かった。あの宝石屋さんも逮捕されたし、めでたし、めでたしよ、本当に」

纏は安心したような笑みを浮かべた。

その様子を、エクストリームは窓から見ていた。最近気づいたのだが、この窓からは、両崎家が見えたりするのだ。

「どうした、エクストリーム」

光介がお茶を沸かしてきた。エクストリームは、それをぐびっと一気に飲み干す。

「おいおい、熱いぞ」

「問題ない」

口ではそう言いながらも、やっぱり舌は痛そうだった。

「風都署では、捜査がうまくいってないらしい」

「知ってるよ」

「ウソ発見器とかいう装置にもかからなかったようだ。一体、なぜ・
・・・・」

エクストリームは、深刻そうな顔をする。

「さあ。わからないよ。でもいいじゃん。こうして大家さんも幸せ
になれたんだし」

「まあ、・・・・・そうか」

ふう、とエクストリームは立ち上がった。一応、風都署へ出かけて、調べてみるつもりだ。風都署サイトは使えなかった。ここにはパソコンはない。

「風都署行ってくる」

「おっ、ちょっと待てよ」

光介はエクストリームを急いで追いかけた。

とある研究所。

ある組織が、今日も会議をしていた。

「銅鉄が捕まったようです」

「それについては問題ない。俺の部下の能力で記憶を消した。COREにつながる言葉は一切出てこない。……。それより問題はこいつらだ」

首領格の男はぴっと監視カメラから盗んできた映像を見せた。光介とエクストリームが変身する瞬間の映像だ。

「こいつらは、TCガイアメモリ、COREの存在を知った。生かしてはおけん」

「刺客をよこしますか」

「いや、いい。今回のことで知ったが、刺客連中の中に、しゃべりすぎる奴らがいるようだ。今回は、刺客ではなく、幹部一人を、メモリ工場のまとめ役に使う。くれぐれも言うておくが、しゃべりすぎないのを選べ」

「わかりました」

暗くて、顔は良く見えない。だが、首領格の男が、この部屋から去っていったのは、よくわかった。

第九話 Xバトル／事件のその後（後書き）

—製作ウラ設定—

9、それぞれの登場人物は誰に似ているのか

この物語のレギュラーメンバーの顔が気になる！
というわけで、設定されていた人物たちはだれに似ているのかをお知らせします。

広 光介 桜井 侑斗 （学生時代）

エクストリーム アンク （あくまでも顔だけで髪型はそこまですごくはない）

大道先生 大道 克己 （もう少し老けさせたくらい）

両崎 纏 完全なオリジナル

柱 友 明日夢に近い顔

ショウタロウ 完全なオリジナル

ライト フィリップ

光介 「僕は侑斗さんに似ていたのかあ」

エクストリーム 「ボクはアンク か。しかし、何故に今ここで明かす？」

k. i 「このエクスピッカー編が、基本設定編だからです」

纏 「つまり、基本設定最後のところで、顔について一応解説しておく必要があったのね。私は完全なオリジナルだって！」

ショウタロウ「俺もだ」

ライト「僕だけは、フィリップ似か」

k. i 「強いて言えば、纏さんは、太ってない昭和主婦、ショウタロウさんは、不良に近い風貌、ということになっています。ライトさんをフィリップに似せなきゃいけない、設定的理由は、次章で明かされます」

友「僕は明日夢に近い顔・・・・・・・・」

光介「大道先生は？」

k. i 「言えませんか！」

エクストリーム「光介、ダメだ、こういうのは。もしかすると次章からイロイロ・・・・・・・・」

第十話 Yの勧誘／連続メモリバトル（前書き）

ーカウント・ザ・メモ리즈ー

エクストリーム・・・極限の記憶

マスカレイド・・・仮面舞踏会の記憶

マネー・・・・・・・・お金の記憶

光介「今回はマネーが活躍！」

エクストリーム「おい光介」

光介「なに？」

エクストリーム「おまえ、今回から一人称だってよ・・・・・・・・」

光介「一人称って、なんだい？」

ライト「情けない。一人称っていうのは、その人の心境や目から見えるものについて書いてくものさ！ 覚えておきたまえ！！」

光介「ええっ、てことは、僕の心が見えちゃうの！？」

ライト「これは、主人公を効率的に活躍させるいい方法だからね。基本設定編も終わったところで、それをやる気になったんだと思うよ」

光介「なんでだよ！」

後書きに続く

第十話 Yの勧誘／連続メモリバトル

「光介、新聞部入らない？」

一年三組内にて、僕は友にそう言われた。目をキラキラさせてる。多分友も新聞部なんだろうな。

「いや、やめとくよ。いろいろ忙しいし」

ちらりと時計を見る。十二時十五分。昼休み終了は三十分だから、あと十五分乗り切ればいいのか。

実は、友は、数日前からかなりうるさかった。この目のキラキラはまったく衰えておらず。いつの間にか、この友の勧誘を乗り切るのが毎日の昼休みワークとなっていた。

「ハッハッハ。まあそうあわてるなって。そんなに時間かけるようなもんじゃないよ。新聞部は、毎日やってるんだ。逆に言えば、いつサボったって、いつ来たってまったく関係ナシ！」

友は胸の前でバツテンを作って見せた。にかつと笑った歯もキラキラ。

「……新聞部って、運動部なのか？」

「いやいや、文化部だよ。だから体力面も気にしないでくれ。任しときなよ。なんせ、この部には精鋭がそろってる。入っちゃえば、あとは野となれ、山と……」

ダアン!!

……変な音がしたけど。友、もう帰ったほうがいいんじゃない？

「ちえっ、勧誘タイムはもうお終いか。明日も来るねえ!!」

この変てこな状況に関わらず、いつもの友好的笑顔を――（商業的笑顔なのか？）を見せながら己の席に戻っていく友。

初めて会ったときはそうでもなかったけど、こういう非常時にもああいう顔するとは、時々おそろしくなったりする。

って、あつ、友が席に座ることなく、教室を出て行く。なんだなんだ、一体どうした!？

今外で起きた音が関係するのかもしれないと思い、僕は窓を見てみた。こういうとき、窓よりの席は楽だ。しかも、先生の目が届かぬ後ろ側。

おうっと、あれは、ドーパントじゃないか! いかん、行かなくちゃ!!

僕は大急ぎで教室を出て、あつというまに学校裏に着いた。僕はロストドライバーを出し、この学校に特別に設置されている公衆電話に十円を入れた。

昼休み終了まで、残り時間、十二分! 間に合え!!

プ、カチャツ。

なんと、かけてから二秒でエクストリームは電話に出た。って、いつも家にいるからか。

『どうした』

「エクストリーム、今すぐエクストリームに変身してくれ！」

『なぜに』

「事情を説明するヒマはない！」

『・・・わかった』

通話時間が終了して間もなく、鳥状の『ライブモード』になったエクストリームメモリが、この学園に来た。

「『変身』」

『エクストリーム!!』

ロストドライバーを展開、変身する。学校に設置されている掛け時計を見ると、残り時間は十分だった。

「よっしゃ行くぞ！」

『よくわからんが、わかった!』

そして、僕たちは学校の校庭に出る。

「仮面ライダーだー!!」

校舎から歓声があがる。ヒーロー登場、って感じだ。

校庭で暴れている怪人————ドーパントは、海の波をイメージさせる姿をしてる。

「エクストリーム、検索してみて」

『ああ』

検索が開始される。エクストリームが検索を始めると、仮面ライダーのクリア部分が発光。数秒も経たず。

『オーシャン。液体化能力を持つ、オーシャン・ドーパントだ。しかもTC』

なるほどっ。液体化、というからには、振り回し系の攻撃なら聞くかも。

『わかった。振り回し系の攻撃だな。ならアレだ』

「『エクスソード!』」

クリア部分が発光したかと思うと、そこから、この前手に入れた、エクスビッカーの一部、エクスソードが出現。そして。

「『データリリジョン!』」

データリリジョンによって、エクスソードを素体にして、そ

れは棍棒らしきもの、エクスシャフトへ。

「うららららら………!!」

僕はシャフトを振り回し、TCオーシャン・ドーパントに攻撃を加えていく。

「グオオオオツ！」

突然TCオーシャンはうなり声を上げると、液化化。ま、まずい。あのドーパントは、液化化すると、手がつけられなく………。

「『ぐあああつ!!』」

うわっ、ぶつとばされた!! これはメモリで出来た強化装甲だから何とかなるけど、こんな攻撃何度も続けられるとやばい。

ダアン!! パシャッ!!

おわっ。ピストル音再び! と思ったら、強烈なフラッシュが。まぶしっ!

僕はシャフトでTCオーシャンの攻撃を避けつつ、目を閉じた。

「オウツ!!」

突然TCオーシャンも液化化を中止してうずくまった。相当な光のフラッシュのようだ。ストロボカメラに似たような発光で、目潰しに最適。

って、フラッシュを評価してる場合じゃない。目は見えづらいけど、ぱぱっと片付けないと！

『光介、行くぞ！』

うん、OK。

あーっと、この前手に入れたメモリは……………。

マネーだー！！

『マネー！ マキシマムドライブー！！』

TCマネーメモリをエクスシャフトにセット。金色のエネルギーがシャフトにたまっていく。

「『スキヤニングブランディング！』」

金色のエネルギーは、コインっぽい形をとると、TCオーシャンに直撃。

「グオオオオオ……………」

TCオーシャンからメモリ排出。マキシマムのせいでちょっとした爆発が起こったけど、使用者には問題ナシっと。

タタタ、とかけていくと、ちょうど視界も元に戻り、爆発の煙もはれた。そして、そこにいたのは……………。

柱先生？ ええっ、なぜにー！！

「!」

「仮面ライダー・・・・・・・・・・?」

一応マキシマムの影響はないものの、爆発の影響でちょっとしたケガをおってるらしかった。

柱先せ・・・・・・・・あつ、今変身してるんだっけ。

と、とりあえず、保健室へ。

僕が柱先生の体を持ち上げようとしたとき。

ドカアアアン!!

い、痛ったあ!! な、何だ今の?

僕が振り返ると、何と、そこには別のドーパントが。このドーパントも暴走してるのか? そのドーパントは、頭、手、足と、各部にロケットがついてて、いつでも発射出来そうな体勢で僕を狙ってた。

「エクストリーム、奴のメモリは?」

『あれは、R・・・・・・・・ロケットだ』

ロ、ロケットか・・・・・・・・。今すぐにも宇宙に行けそうなメモリだな。

「ウオオオオッ!!」

『まずい、悠長なこと言ってる場合じゃないぞ』

僕たちはぐつと身構えた。

『ジョーカー！ マキシマムドライブ!!』

お、おわっ！ なんだ今の音!!

「ライダーパンチ！」

今の電子音の元を探そうと首をふりふり回してるうちに、音の主の放った、『ライダーパンチ』がTCロケット・ドーパントにぶつかった。ロケット・ドーパントは爆発し、その人はふう、と息をついた。

ぱんぱん、とひざを払う彼を、僕たちは凝視した。

黒いボディに赤い複眼。『W』字の銀の角。エクストリームと同じような『ウィンディスタビライザー』はないけど、どっちかと言えば風の戦士というより格闘戦士、という感じ。とにかく、真っ黒。今の電子音声から、仮面ライダー『ジョーカー』？

「T2似のガイアメモリが、ここにもあったのか」

ジョーカーさんは、なにかハードボイルドな感じがするなあ。

ジョーカーさんは、落ちているTCガイアメモリを回収。爆発の煙からは、おそらく風都緑学園の先生、と思われる人が出てくる。

「って、この人一般人の人じゃねーかー！」

ジョーカーさんは、さっきまでまどっていたハードボイルド風な空気を完全に打ち破り、頭をがっとおさえた。雰囲気が一気にハーフボイルドに変わる。

雰囲気が変わらない人だな。

あ、と僕たちのほうを向くと、ジョーカーさんは、
「おまえら、この人頼む」

といい、じゃ、とジョーカーさんは去ってった。

風のような人って感じ。

『風都の仮面ライダーなだけに、風のように、ってわけか？』

エクストリームが話しかけてくる。また、いつものダジャレか？

「今のはダジャレ？」

『・・・・・・・・冗談だ』

まさか！ いつもやってるじゃん！

『うるさい！ ・・・・・・・・ところでさ』

話題変えてもムダだぞ。

『違うってのに！！ さっきさ、制限時間がどうのって言ってたけ

ど、大丈夫なのか』

あ・・・・・・・・。

僕はがぼつと学校の時計を見た。今、十二時二十八分・・・・・・・・。

やばい。最高にやばい！

僕は先生二人を持ち上げると、なんとしても時間に間に合わせようと保健室へ。ま、間に合えー！！

『おい光介、正門に人の気配を感じるんだけど・・・・・・・・』

知るか、そんなこと！ こっちは今大変なんだ！！ うおおおおお！

『メモリの気配も少し感じたんだけどなあ・・・・・・・・』

第十話 Yの勧誘／連続メモリバトル（後書き）

—製作ウラ設定—

10、なぜ一人称になったのか

一人称にする予定はありませんでした。しかし、第二話を書いたときで、『ああこれは基本設定編になるな』と思ったのです。理由は、『光介の活躍が少なく、エキストリームひっかけでしか登場しないから』です。

光介「ということは僕は、『流されキャラ』って感じなのか？」

ライト「まあそういうことだ」

エキストリーム「そのとおり。登場回数で言えば、確かに光介が一位だったりするが、それに継いで、というか並んで、ライトとボクが登場回数が多い」

翔太郎「俺、第二話だけなら活躍してたんだが……」

エキストリーム「そう。その時代では、翔太郎が一位、ボクたちはぶっちぎりのビリだ」

ライト「そういうのをぶっちぎりと言うのだろうか」

光介「っということであれば、これからの僕の活躍は約束されたのか！」

k. i 「そのとおり。ひっかけられキャラという位置づけは変わらないが、主人公としての活躍は増えるぞ！」

ライト 「ウソだな。実際は、CORE幹部の話を書くのが嫌いだったんだろう。暗いとか設定したのも、顔の描写を少なくするためだね」

光介 「そ、そんなことのために一人称に？」

エクストリーム 「待て。ボクたちの活躍が増えたのは、喜ばしいことじゃないか。ボクが一人称だったらもっと良かったけど」

光介 「いや、おまえはアパートにずっといるだけじゃん」

ライト 「そうだ。それにくらべ僕は、広くんと同じ学校。とてもいい話が」

光介 「やっぱり、僕の一人称で正解だったのかも」

第十一話 Yの勧誘／カメラマンと探偵（前書き）

ーカウント・ザ・メモリズー

エクストリーム・・・極限の記憶

マスカレイド・・・仮面舞踏会の記憶

マネー・・・お金の記憶

オーシャン・・・大洋の記憶

光介「・・・・・・・・」

エクストリーム「どうした？」

ライト「感動してるのさ。だんだんと増えていくメモリに」

光介「今まではとっても少なかった・・・・・・・・。それが、今や四種類に」

エクストリーム「今のこいつでヤミー作ったら、『メモリヤミー』なんてのが出来そうだな」

ライト「それもアリだね。興味深い」

エクストリーム「あと、おまえでつくったら」

ライト「なんだい？」

エクストリーム「間違いなく、『出番ヤミー』だな！」

ライト「Ors確かにね。新章に突入してから、僕たちの活躍はチリに等しい」

エクストリーム「友とか一真とかに奪われてるもんな」

光介「僕は逆に出番で苦勞することないけど」

エクストリーム・ライト「黙れ！」

光介「はい……………」

第十一話 Yの勧誘／カメラマンと探偵

結局、午後の授業には間に合わなかった……。

それはまあ、先生二人持ち上げて保健室まで行って、その後大急ぎで一年三組に戻るんだから、そりゃムリってものだよなあ……。

不幸をあげるなら、一年生の教室がある棟は保健室のある棟と違う、ということだろう。廊下を走り、渡り廊下を走り、そしてまた廊下を走る……。これはさすがに間に合わない！

唯一、良かったといえば、柱先生は軽いケガだったんですぐ戻り、代わりの先生にいつまでも叱られずにすんだこと？

とにかく、そこまで悪い事態には発展しなかったことは良かった。

ほーっ。

遅れた時間も十分くらいなものだし、大したことはなかった。

そして、下校。友、一真は、僕のとまりを歩ってる。空は夏らしく、ガラガラした快晴。こういう日って、『いいこと』が起こるシチュエーションなんじゃないのか？

「そう。こうまで快晴だと、いいことばかり！！　な感じがするよねー！！」

突然ポン、と友に肩をたたかれた。相変わらずの友好的さだ。

確かに、先生が軽いケガで戻ってきて、叱られ状態が中断になったことは、『いいこと』に分類される
のかも……。まあ、最初から時間的な『いいこと』がほしかったけど。

「時間とは、自分で作るもの。責任は全て、自分にある」

一真が言ってくる。一真は『責任男』って感じた。といっても、責任の向きは全て一真自身にかかっているんだから、まったく問題はないけど。

ガサリ。

突然近くの林がゆれる。な、なんだ、一体どうした？ 一真以外、全員がぴたっと止まった。一真が動くのは、やっぱり『責任は自分にあるから行ったところで俺の責任だ』って感じ？

と思ったら、一真も途中で止まった。しかも、細い目を見開いてる。五十歩百歩ってものだね。

「いいや、違う。あれをよく見ろ」

一真は林の向こう側を指差した。そうか、林の向こう側に誰がいるか、知ってるからか。

「特に、友。自分の目で責任を持ってよく」

「ん？」

友は興味津々なようでもた動いた。そ、それなら僕も。

見てみると、林からカメラを持った男の人が出てきた。身長は結構高い。灯台みたいな身長の人で、顔は縦長。

「やあ」

ふっと、男の人が手をあげた。誰だろ、この人？

「こ、光介、知らないの？ この人はねえ……」

すう、と友が息を吸う。な、なに。この人って、有名人なのか？

「かがみ まこと鏡 真です」

こくり、と真さんは一礼。もしかして、カメラマン……
っていう職業の？

「そうだよ！ 今は風都の風景を撮影してる、超高名なカメラマンだよ！ 知らないのは『遅れてる』ってバカにされるくらいだよ！」

へ、へえ……。僕の今までの生活じゃ、知らないのは仕方ないけど。

「知らないのは仕方ない、というのは自分の責任を環境におしつけてるだけだ」

一真、責任責任うるさい！！ これじゃ僕は遅れまくってことじゃん！

「まあ、三人とも落ち着いて。今日僕がこの学校に来たのは、ある仕事のためなんだ」

仕事？　って、学校を撮影するというやつかな。

「まあ、それはあまり言えないんだけど……」

真さんは、ひとさし指を立て、口につけた。ああ、言えない、つてことか。だけど、そんなことも考えず、友はハイハイ、と手を挙げた。

「僕、柱　友とこっちの一真は、新聞部なんです！　だから、カメラ使って写真撮るといふのには慣れまくりで。写真については結構得意なんで、聞きたいことがあればどうぞ！」

「ああ、ありがとう」

真はお礼を言う。

「今調べてるのは、さっきのフラッシュのことなんだけど……」

おお、話してくれた。正直ならぬ友好の一念、岩をも通す！！

あれ、フラッシュってことは、さっきエクストリームが言ってた、正門にいた人は、真さんだったのか。

「あ、それなら、ちょっと待ってください」

あ、友が学校に引き返して、ものすごい速さで走ってく。

……新聞部って、やっぱり体育系な感じだな。

いや、そんなことはおいといて、さっきのフラッシュって、やっぱりカメラだったのか！ にしてもどきついフラッシュだったな。

「そんなフラッシュなわけないだろ！」

痛っ！ 突然、誰かに頭をたたかれた。な、なんだ？ 同時に二つの円が見えるけど……。

「それは私の目！」

痛っ！！ またたたかれた。脳天って、めちゃくちゃ痛いんだよ。

「ご、ごめん、光介……勇香って、結構簡単なことで殴り合いに発展するんだ」

友が僕の耳にひそひそ。もう戻ってきたのか！ ということはさておき、ひそひそなのは、またたたかれるからか。アザは特になから、まあ、同じ部の人は傷つけたりしない、ってことかな。

勇香と呼ばれたその人を、僕はちらりと見た。まあ、殴り合いがなんちゃらでちょっとした青アザが手足にあるのはおいといて、結構かわいいと思うけど。よくあるポニーテールとかいうやつだね。

名前のとおり、ゆうかなな感じするし。

「ふざけないで！」

痛っ！！！！　また脳天か！　まあ全力じゃなそうだし、名前をバカにしたような感じでニヤリとした僕が悪いんだし、ここはガマンしておこう。

「で、この人も新聞部員で、勇香様といいます。あのフラッシュは彼女のものです」

・・・友達を紹介する友を見て、なんで友たちにアザがないかがわかった気がした。

「『様』づけって、へりくだりにもほどがある！」

つい僕は声に出して思いつきり言ってしまった。まずい、またたたかれる！？　いや、あるいは『殴る』に発展するかも。ごめんなさい、勇香『様』！

ところが、勇香様はまったく反応ナシ。一体どうした。

僕がちらと勇香様の顔をご拝見いただきたく（敬語おかしいぞ！）　と、ぴしっとした顔で経っている。ああそうか。これも真さん効果か。

「見ましたか？　私がストロボ写真撮ってるよ。やっぱり、フラッシュ強すぎました？」

「やはりストロボだったか！　はい、フラッシュ強すぎました」

僕が小声でそう答えると、きつと勇香様はにらんできた。・・・はい、すみません。

「いや、大丈夫だったよ。ストロボはちょっとした強さで目が見えなくなるからね。あのくらい、ちよっと見えなくなる面積が広がるくらいで、大差ないよ」

そう聞くと、勇香様は安心したように笑った。

「それに、あのフラッシュは、仮面ライダーを助けるために役立ったしね」

ああ、そういう意味か。よかった。写真撮られるときにあんなスパーなフラッシュ受けたら、たまったものじゃない。僕はほっとした。

それからの、歩きながらの話によると、真さんは、仮面ライダーを撮影するために、風都に来たそう。姿のわからない仮面ライダーに、カメラマン魂も燃えるんだろう。

ただ、なかなか仮面ライダーが撮れない。姿さえも見えないので、風都の探偵事務所にも相談しようかな、と思っているみたい。

「それなら、鳴海探偵事務所がいいですよ」

友が真さんに教えてあげた。それに対して、真さんはにこりと笑う。

「じゃあ、そこに行ってみようかな」

「僕たちも行きます！」

友は、下校中にも関わらず、即答。

「登下校中に寄り道はいけないんじゃないの？」

僕は友に聞いてみた。友はニコニコした笑顔を崩さず、言った。

「登下校のルールなら、新聞部は写真を撮るためにOKされてるんだよ」

友はニコニコと答える。そんな例外が存在してたのか！

「便利だね。じゃ、新聞部じゃない僕はここらへんでおいとましていいかな」

早く帰らないと、宿題とかあるし。

「大丈夫。君は新入部員ってことにすればいいんだから」

まだそれいいよって言ってない！

「あ、ちよつとごめんね。あっち側に、撮りたいものがあるんで、いいかな」

突然、真さんが言った。あの風都緑公園の周辺に、カメラで撮りたいものがあるのだろう。

「あ、どうぞどうぞ！」

友は敬意を示して真さんを行かせた。

「ありがとう」

真さんはぺこりと礼をして、風都緑公園に入ってた。友は今本
当にニコニコしてる。尊敬するカメラマンに出会えてよほどうれし
いんだろう。

「今日はとってもいい日だな」

うん、やっぱりそれが理由だな。

「確かにいい日だね————」

『ユニコーン!』

何だ!? 突然僕の声がガイアメモリの電子音声がさえぎった。

はっと前を見ると、前にいる通行人が、苦しんでいる。じつと見
てると、その人は、ユニコーン・ドーパントに変わっていく。

「グオオオオオッ!」

ついに完全にドーパントへ。おそらく、今度もTCドーパントだ
ろう。

TCユニコーン・ドーパントは、頭、手にユニコーンらしい金色
の角がある。特に手の角は、パンチ力充分な感じがする。全体的な
カラーは黄緑色だった。動物らしい赤いたてがみもある。

まずい、公衆電話さがさないと、エクストリームを呼べない！！

僕はあたりを見回すが、公衆電話ボックスは一つもない。最悪の状況だ。

「まずいな」

一真は落ち着いているが、汗がたれてる。この状況の打開方法を模索しているようだ。

そんな中で、一人だけ動いた人がいた。

「いくよ！」

勇香様だった。まさに勇敢そのもの。

「こんなときまでダジャレ言ってる場合!？」

勇香様は、僕に文句を言いながらTCユニコーンの頭をなぐった。元は人間だから、目の位置も人間と同じだ。

「痛っ!!」

次の瞬間、手を押さえてうずくまった。TCユニコーンの体は、この前戦ったTCマナーの腹ほどではないが、硬い。しかも、TCマナーのときとは違い、硬いところは体全体だ。

ああ、どうしよう！僕は頭を抱えた。今から学校に戻ってエクストリーム呼んでも間に合わない！

そのとき、

「変身！」

『ジョーカー！！』

という、男の人の声と電子音声聞こえる。見ると、黒いさっきの仮面ライダー、ジョーカーさんが。

「ハア！」

ジョーカーさんは、勇香様を守るようにパンチを連続で打ち込んだ。手首・足首にあるアングレットが紫に光る。

「グオオ！」

「また暴走ドーパントか！ 手こずりそうだぜ。おい、その！」

僕？ ジョーカーさんが僕を指差した。

「この人連れて公園に逃げろ！！」

「は、はい！」

僕は勇香様を連れて公園へ。

幸い、手のケガはそこまでひどいものじゃなかった。

それに、ジョーカーさんがTCユニコーンと戦っている間は、とりあえず安心だった。ただ一人、真さんが公園にいないが、まだ姿は見えないからとりあえずはここからそう近すぎはしないところに

いるだろうし、大丈夫だろう。

って、あっ、あんなところに公衆電話が！ チャンスじゃないか、これ！

僕はとなりにいる友に一言。

「友、すまないけど、二人と一緒にここで待ってて！」

「お、おい、光介……」

友に何か言われたけど、聞ってるひまはなかった。

大急ぎでかけこみ、電話をガチャッ。十円玉は、仮面ライダーになるためには必需品になってきたな。

プ、ガチャッ。

『どうした、光介？』

「エクストリーム？ ごめん、もう一回変身だ！」

『またか。どうも今日はドーパントが多いな』

ツーツーッー。

僕は電話をしまい、見つからないようにコソコソと公衆トイレのかげへ。

まもなく、ライブモードのエクストリームがやってきた。僕はパ

シリと受け取り、すでに腰につけてあるロストドライバーにセットし、展開。

「『変身!』」

『エクストリーム!!』

ギューーン、ギューーン、という変身音と、緑の風の中から、緑のクリア部分、黒光りするボディが現れた。

変身完了!　いくぞ!!

僕は公衆トイレのかげから強力なジャンプ力で飛び出した。ちらと見ると、新聞部の三人は口をアングリ開けそうな勢いで見てる。とりあえず、隠れるとこまでは見られてなかったから、どうにか正体に関してはごまかせるだろう。

しげる林を一気につきぬけ、TCユニコーンにキックをおみまい。

「グオオ!!」

TCユニコーンは地面に足の爪をひっかけながらコンクリートを退く。

「あ」

ジョーカーさんも僕らに気がついたようで、体をぴくっと動かし、た。

と同時に、ジョーカーさんにTCユニコーンの突進しながらのパ

ンチが直撃。

「うおっ！」

ジョーカーさんはズズズと押し返された。まずい、早く決めないと！

『仮面ライダー、これを使い！』

エクストリームがTCマスカレイドメモリをわたす。

「お、サ、サンキュー」

驚きつつも、TCマスカレイドメモリを受け取るジョーカーさん。

『光介、ボクたちもやるぞ』

『マスカレイド！ マキシマムドライブ！！』

マキシマムスロットにTCメモリをつっこむと、電撃っぽいものがスロットに走り、まさに『マキシマム』って感じに、力がみなぎる。

「よし、いきますよ！」

「わかった！」

突然の状況にすばやく適応したらしいジョーカーさんも、TCメモリをスロットに挿入。

『マスカレイド！ マキシマムドライブ！！』

必殺技、いくぞお！！

「『マスカレイドエクストリーム！！』」

僕らが助走してる間、ジョーカーさんはかつこよく左手をシュツとスナッブ。

「マスカレイド・・・・・・キック！」

僕たちは黒っぽい力を含んだ走り蹴りを、ジョーカーさんは黒いエネルギーで足を包んで後ろ回し蹴りを決めた。

「ウ、ウオオオオオオッ！！！」

煙の中から、通行人とTCユニコーンメモリが飛び出す。

『さて、戦いは終わりだ。早くアパートに帰りたい』

TCメモリパシイとキャッチすると、

『エクストリーム！ マキシマムドライブ！！』

『エクストリームサイクロン！！』

姿を消した。

ただ、僕はここでおおいに悩まなくてはいけなかった。なんのことでか？ そりゃもちろん、一連の行動がエクストリームの独断で行われたことだよ！

なんと、エクストリームは、アパートまで来ちゃったんだ！！

多分、エクストリームは今までのこと知らないから、家まで帰してやろうなんていう優しさなんだろうけど、これはかなりの迷惑！

エクストリームに怒るヒマもなく、僕はアパートを全力で飛び出した。

十分ほどで、風都緑公園に到着！　ちょうど真さんが戻ってきた頃だ。真さんの写真撮りが長引いてくれたおかげで、おいてかれずにすんだ！

「おい！」

友が顔をしかめて、僕の声に返した。

「あ、光介！　どこ行ってたんだよ！　ちょっとばかり心配したよ
おい！」

「ごめん！！　どうしてもやんなきゃいけないことがあってさ」

ふう、と一息。ようやくみんなのところに着いた。友好的な顔を怒った顔に変える友を、真さんが優しくとめてくれた。

「まあまあ、落ちついて、友くん。光介くんも、僕と同じように急用があったんだよ」

「まあ、そうですけど……」

友はなんとか落ち着いてくれた。真さんに感謝、感謝。

「で、友君」

「なんでしょう」

友、ぴしつと直立。

「そろそろ、さっき言ってくれた探偵事務所に行きたいんだけども」

「おまかせを！」

友のひくひくした鼻からは、煙が出てきそうなほどだ。これは、おとなしく同行しよう。

「あ、すんません。俺がその鳴海探偵事務所の探偵なんですけど・・・」

コホン、という咳払いと共に、誰かが言った。みんなが声のほうを見ると、いつの間にか、黒いハードボイルド風の帽子をかぶった人が。

事実、その人の周りにはハードボイルドな空気がただよっていた。ただ、さっきのジョーカーさんみたいに、ちよつとしたことでハーフボイルドに変わりそうな・・・。

「じゃあ、お願いしようかな」

真さんはニコリ。男の人ははい、と言って、事務所のほうへと歩き出した。

第十一話 Yの勧誘／カメラマンと探偵（後書き）

—製作ウラ設定—

11、次々出てくるドーパント

『メモリ量産編』は、ほとんど『カウント・ザ・メモ리즈』のために始めたようなものです。彼らの工場を統率する人は誰？ という話になるでしょう。

また、これらのメモリは、風都にあるメモリ量産工場で作られています。この工場は、一体どこに？ 探偵な話です。

エクストリーム「仮面ライダーの変身者として、絶対この工場につれてってくれ！」

光介「なんで？」

エクストリーム「そりゃ、ここに行けば、メモリはとり放題。あつというまに完全に元通りだ！」

ライト「大量のメモリ……とっても興味深いよね」

第十二話 Cと共に／探偵事務所で（前書き）

ーカウント・ザ・メモリズー

エクストリーム・・・極限の記憶

マスカレイド・・・仮面舞踏会の記憶

マネー・・・お金の記憶

オーシャン・・・大洋の記憶

ユニコーン・・・一角獣の記憶

第十二話 Cと共に／探偵事務所で

鳴海探偵事務所のある風花町までの道のりは、歩いていったせいか、このまえのTCマネー騒動のときよりも長く感じた。

その間、男の人から余談を交えてさまざまな話を聞かされたので、まとめると。

- 1、男の人の名前は、左 翔太郎さん。鳴海探偵事務所の探偵。
- 2、前は事務所所長は鳴海 莊吉なるみ そうきちという人だったが、今はその娘の鳴海 亜樹子さんが所長。
- 3、今、ある人の依頼で新しい仮面ライダーを捜索中。

だそうだ。

また、僕たちからは、真さんに、さっきTCドーパントが出てきたところに仮面ライダーが来たことを教えてあげた。

「そうだったのか……残念だなあ」

真さんは、ちょっとがっかりした様子。

「仕方ありませんよ、真さん。実際、あそこになかったほうが良かったんですよ。危なかったですし」

友が慰める。撮りたいものを撮れなかったという悲しさは、同じカメラを使う人である友にもわかるんだろう。

「まあ、そうだね。このカメラに仮面ライダーの写真を収められな

かったのは残念だけど、命には代えられるものじゃない」

うんうんとうなずく新聞部の人たち。僕も、仕方ないと思うよ。

「風都のヒーローだからなあ。ここに住んでるカメラマンの人たちも結構試たらしいけど、仮面ライダーが現れるのは怪人のドーパントが街を泣かせたときだけ。結局、撮ることは出来なかったそうだ」

翔太郎さんが風都のカメラマンが試したことについて話してくれる。へえ、そうだったのか。それじゃやっぱり、仮面ライダーを撮影するのは、とっても難しいことなんだね。僕が変身するときはせいぜい変身するとこだけ見られなきゃOKってなってるけど。

「光介くん」

真さんがちらと僕を見た。あれ、なんで名前を？ あ、友たちの話でか。

「君も、仮面ライダーを見つけたらよろしく頼んでいいかな」

「あ、はい」

本当のところ、僕が仮面ライダーなんだけどね。

そして、鳴海探偵事務所に到着。ビリヤード場のすぐ奥だ。

「亜樹子、依頼人だ」

翔太郎さんがドアを開けた瞬間。

バコッ！！突然、翔太郎さんの頭を、緑色のスリッパが直撃。よく見えなかったけど、金色で、『カよ、去れ！！』と書かれてる。

「いてーっ！」

翔太郎さんは頭をおさえてうずくまった。うん、やっぱりジョーカーさんと同じで、ハーフボイルドな感じ。

「あ、翔太郎くん、ごめーん！」

あ………事務所にいた女の人が、カをたたこうとしてたら、翔太郎さんが入ってきて、たたいちゃったというわけか。今夏だしなー。

たたいた女の方は、丁重に謝った。ということは、この人が鳴海亜樹子さん？

「そうです。私が、鳴海探偵事務所二代目所長、鳴海 亜樹子です」

依頼人―（？）の僕たちを見ると、ぺこつと礼をした。

見たところ、関西から来たっぽい。たこ焼きがよく似合う顔。

「依頼人さんですね。では、こちらへどうぞ」

亜樹子さんは、僕たちを、今入ってきたドアの右にあるソファに座らせた。ソファは赤く、座ると、モファモファして気持ちいい。

翔太郎さんと亜樹子さんは、反対側のイスへ。

「亜樹子、依頼の内容は『仮面ライダーを捜す』だそうだ」

翔太郎さんは、帽子を壁にかけて、イスに座りながら言った。

「お願いします」

真さん、ぺこり。

「仮面ライダーの捜索、ですか。では、依頼に必要な手続きをしますので」

亜樹子さんは、ソファとイスの間にあるテーブルに、なにやら用紙を出した。

それからの『手続き』っていうのは、僕とか友とかにはわからなかった。

とりあえずわかったのは、『探偵の仕事は結構複雑』ってことだけ。いろいろなことを聞かれる。僕を除く新聞部の人たちも、仮面ライダーを目撃したってことでいろいろ。

「仮面ライダーは、二人いました。一人は、シンプルな格闘フォームで黒く、もう一人は重量感のある、黒と緑の色でした」

勇香様は、ジョーカーさんをまじかで見ただけあって、イラストまで、僕が見たジョーカーさんとそっくりにかけた。ただ、勇香様は、僕とエクストリームが変身したほうの外見はあまりわからなか

ったようで、マフラーっぽいもの（ウィンディスタビライザー）が背中に一對ついてたことぐらいしかわからなかった。

でもまあ、意外にぱぱっと済ませられたから、よかった。翔太郎さんは、さっそくこの手がかりを元に、捜しに出かけるようだ。僕も、あんまり見られないように努力しなくちゃ。

そして、真さん、新聞部、僕は、それぞれの家に帰ることになった。さすがに、六時過ぎになってたので、新聞部の人たちも真さんを追いかけるようなことはしなかった。門限ってやつかな？

「たーだいまー」

僕は、自分の部屋、42号室に帰ってきた。

エクストリームはライト先輩を呼んでたようで、いろいろ話し込んでた。

「おう、光介、遅かったな」

「ごめん。友とかと一緒に、探偵事務所に行ってたんだ」

僕は今日の一連の出来事を報告。

「なるほど、ドーパントの大量出没か。ちょうどこっちも、それについて話してたところだ」

エクストリームはぴっとライト先輩を指差した。もう、いつつも

言ってるじゃないか。人を指差しちゃいけないんだよって。

「それは気にすべきことじゃない。……明日は土曜日だな」

カレンダーを見ながら言う。エクストリームは、元々ガイアメモリだったから、礼儀作法的なものはあまりわかんないのかな。僕は一応答える。

「うん、そうだよ」

事実、明日は土曜日。授業もなく、休日だ。

「ならば、こいつ、ボクと一緒に、明日は情報収集に行け」

ええ、宿題が。今日だって、新聞部の人に連れまわされて、宿題できてないんだよ。

「今日終わらせろ。それ以外の選択肢は用意していない」

はいはい。やりますよ。

僕は、ライト先輩が出て行く中、宿題を部屋のテーブルに広げた。

なんか今日は、いろんな人に振り回されまくりの一日だったな。はあ。

第十二話 Cと共に／探偵事務所で（後書き）

—製作ウラ設定—

12、新聞部の人たち

新聞部の方々にインタビュー&部長・副部長を聞きます！

Q1、あの強力なストロボは、実のところ、仮面ライダーを助けるためにやったんですか、それとも実力ですか？

A1、勇香「それについては、ノーコメント」

光介「実のところ、実力です」

勇香「黙りなさい！」

光介「ごめんなさい……………」

Q2、光介は、新聞部ですか、違いますか？

友「新聞部です」

一真「まあ、ほぼ間違いない」

光介「ちょ」

勇香「彼は新聞部です。まちがいありません。それは、彼本人が認めてる」

光介「勇香様、あのですね、悪口の仕返しっぽいこと、やめてください！」

Q3、仮面ライダーの変身の瞬間、目撃しましたか？

勇香「……………してません」

友「……………してません」

光介「ホッ」

一真「……………目撃まではしてないけど」

光介「ちょ、まさか」

一真「公衆トイレから出てきたのは見た」

新聞部「だっさ〜!」

エクストリーム「・・・次からはもっといい場所選べ」

光介「orsうん」

最後に、部長、副部長などの関係を

部長…勇香（苗字はまだわからない）

副部長…柱 友

新聞製作係長…一真（苗字はまだわからない）

光介「・・・他には？」

勇香「あ？」

光介「・・・いないんですね。すみません」

友「君に入ってもらいたい理由、わかった？」

光介「はい、出来たらどうにかします・・・」

エクストリーム「まーた、つまらないこと引き受けたな」

一真「俺たちのためだ。責任は俺たちが負う」

光介「わかったよ。出来る限り、ね」

第十三話 Cと共に／奇妙なドーパント（前書き）

ーカウント・ザ・メモリーズー

エクストリーム・・・極限の記憶

マスカレイド・・・仮面舞踏会の記憶

マネー・・・お金の記憶

オーシャン・・・大洋の記憶

ユニコーン・・・一角獣の記憶

エクストリーム「最近、仮面ライダーへの変身回数が多くなってきたな」

光介「うーん、オーズ最終回と共にこの話も激動の戦いになんて変わったのかな」

ライト「僕、再登場か・・・。また登場したからには、今度こそWあるいはサイクロンになりたいとこだ」

光介「さすがに今はムリですけど」

ライト「早くしてほしいよ。いつまでも後ろから見てるって、アンクもフィリップもやってない！ サポートでいいから、大活躍が欲しいよ」

勇香「戦闘の活躍は、私のほうがほんの少し上だけど」

光介「な、なんでここに」

勇香「ここに激動の時代を与えたくて」

友「光介、僕が合図するからすぐに逃げろ。どうせもうすぐ前書きは終わりだ。逃げ切れればどうか」

光介「わ、わかった。みんなにも言っとく」

そして……。

友「ヒューッ!!!!」

勇香「ちよつとなに口笛吹いてんの？」

新聞部以外全員「今だー!!!!!!」

勇香「ああつ、逃げた!!!!」

第十三話 Cと共に／奇妙なドーパント

次の日。

僕はうーんと伸びをした。昨日の宿題は、どうにか終わらせた。エクストリームの言葉は半分おどしだったけど、そこまでひどくはなかった。柱先生に感謝しなければ。昨日の宿題が少なくて済んだのは、柱先生の有効な判断のおかげだ。これで、今回の捜査にも間に合う！

そして、脳天をさすり。勇香様にぶったたかれたときにはこれ以上ないくらい痛いと感じたけど、あとになって考えてみれば、そう痛いもんじゃない。あれは、要は漫才のツツコミに近いものだったのかもしれない。反省しなければ。

「起きたか。おそいぞ」

すでに布団を片付け、ズズズとおかゆをすするエクストリーム。鳥なだけにと僕が考案した。元のメモリが鳥なんだから、食べるものも考えて作んなきゃな、と。ただ、相手が人間の姿してることから、無難なおかゆになったんだ。消化がいいからこれで大丈夫だろうってことで。

ちらと時計を見る。七時半。学校に行く日にこの時間だったらずいぶん慌てるが、休日この日はまったく大丈夫だ。

今日、ライト先輩のキーワードを調べに行くという予定がない限りは。まあ、本当のところ、あるんだけど。

僕はささっと着替えながら、はあとため息をついた。いいじゃないか、仮面ライダーの行方なんて調べなくても。実際、仮面ライダーはここにいるんだから。

でも、ライト先輩もいた。ライト先輩も僕たちが仮面ライダーであることは、よく知ってるはず。ということはジョーカーメモリを使ってるほうの仮面ライダーについて調べるのか。

着替え終わると、布団をよいしょと部屋のはじへ。部屋中央に置かれてるテーブルに、着席。なんだかんだ言ってエクストリームはすでにごはんを用意してくれてたようで、ありがたく食べさせてもら……。

ブツ。

僕はごはんを少し嘔き出した。幸い、嘔き出し先は、ちゃわんの中。な、なんだこれ？ 味おかしいぞ？ いや、おかしくはないけど、ごはんがパラパラ？ チャーハンか？ でもそれにしてもあまりにもギトギト。

「エクストリーム、ちょっと聞きたいんだけど、これなに？」

作り主はエクストリームで間違いない！！ 案の定、エクストリームは、ふっと笑ったあと、言った。でも、言った内容は驚きを隠せないようなもんだったけど。

「おう、それは、おまえが大好きなバターライスだ」

なぬーっ！？ 僕はバターライスでこの味であることに目を丸くした。確かに、バターでギトギトだけど、バターの面影が、なくては

ない……か？

「いや、いつもはおまえが作ってるだろ、朝食。で、その内容をじーっと見て作ってみたのさ、バターライスを。おまえの食べるものは、いつもバターライス。検索して調べてみたら、『バターの味が濃厚で、醤油をかけるとおいしい』とき。それで、今日ボクが作ったのはバターいっぱい、醤油もいっぱいの得盛だ！！」

がくっ。いや、それ以上かも。

エクストリーム、おまえに、常識クッキング本能ってのはないのかーっ！！

「なんだそれ？ そんな用語、検索にもなかった」

「黙って！」

ああもう、こりゃひどい。なんとかしなきゃ。僕はキッチンへ。案の定、ごはんを炊く機械のフタはあけっぱなし。バターのフタも。醤油に関しては、今にも落ちそうな危ないところに。

僕は優先順位を丁重に考え、醤油を片付け、バターのフタを閉じると冷蔵庫に戻し、バターライスの強烈な味をどうにかしようと、ごはんをおわんに大量につめこみ、フタを閉じた。

ふーっ。こんな簡単な料理も出来ないようじゃ、生活できないぞ！

「どうしたんだよ、エクストリーム！？ こんなくらい、ちゃんと作れなきゃ大変だぞ！？」

「嫉妬しちゃうな、本当に」

突然、意味のわからない言葉が。なにが言いたいんだ？ その言葉。真意を言え、真意を。

「いやさ、おまえの料理センス、ツツコミセンスに感動してんのさ」
変なところに感動しないでくれ！ それになんだ、ツツコミセンスって？ 漫才やってる覚えはないぞ！！

「あ、そうだな。じゃあ、さっさとそのバターライス食べて、七時五十分には出発だ」

はいはい。

味が濃いとはいえ、大好物であるバターリスをかきこんで、僕たちは大家さんちに向かった。ライト先輩を呼ぶためだ。

「ライトせんぱーい」

一度だけでライト先輩は出てきた。早起きなんだな。毎日自分で弁当を作ってる僕も、休日意外は早起きだけど、休日まで早起きは、ライト先輩はすごい。服装も、パジャマなんかじゃなく全身白で決めたカッコいい服。ブランドものとか、そういうものじゃなく、普通の服でカッコいいという感じだ。

「おはよう、広くん」

メモ用紙とシャープペンをポケットにつっこんでる。記録には便利なものだからね。エクストリームの検索キーワード探しときにはあんま使わないけど。めんどくさいけど。いつか直さねば！

「それだからキーワード忘れまくり、間違えまくりになるんだよ」

エクストリーム……。僕だって一応、反省してるんだ。攻撃するのはやめてくれ！

「まあケンカはやめたまえ。これから僕たちは協力しなくてはならないんだから」

「はいはい」

ライト先輩の仲裁でエクストリームが黙ってくれた。よかったよかった。捜査を始める前からケンカする二人の刑事……って、あんまりいいことじゃないし。

ってあつ、目の前に実際にケンカしてる刑事たちが！僕は冗談気味に考えたことが現実起こってることに目をまんまるにした。

その人の一人は、ピンク色の孫の手を必死に守ってる。そして、もう片方の一人は、なんとしてもその孫の手を強奪しようと努力している。

「おい真倉、一体どうした！？ 孫の手を獲ろうとするなんて、おめえらしくねえぞ！？」

確かに、真倉と呼ばれた刑事さんは全然普通の刑事らしくない。狂気の目で孫の手を見てる。

「刃野さん、欲しいんですよ、それが。それ持ってるアンタがうらやましーっ！」

そして、たまりかねた刃野さんという刑事は逃げ出した。それを真倉刑事が追う。なんだか、真倉刑事のほうが、気迫がみなぎってる感じ。だって、ピストルふりまわしてるんだもん。

「どけ、市民諸君！　どかなければ、公務執行妨害で逮捕する！」

や、やばいんじゃないの、これ？　ピストルなんて、刑事仲間から孫の手たった一つ奪うのに使うようなものじゃない……………。

ライト先輩も、ちよつと慌て気味だった。

「お、おい広くん、ここは仮面ライダーが必要なんじゃないのか？」

い、いや、人間相手にはさすがにちよつと……………。

と思っただら、にやにや笑いながら真倉刑事はポケットから、端子が緑のTCガイアメモリを出した。ただ、なんだかメモリにしてはおかしい……………まるで実体がないようで、儚いイメージがする。灰色だった。

『ノットベリージェラシー！』

「ノ、ノットベリージェラシー？　なんだ、やけに名前が長いけど。なんなの、エクストリーム？」

「わからん。ただ、英語を和訳すると、『あまり過剰でない嫉妬』

だ」

『あまり過剰でない嫉妬』の記憶を持ったメモリってこと？でも、今までのガイアメモリって、英単語一個でメモリの名前になってたけど。

「おそらく、強力な記憶を持ったメモリから派生したメモリ……・？」

あのエクストリームが首をかしげてる。こりゃあ、えらいことだ。

僕たちが話し合ってる間に、真倉刑事はスーツのあしのすそをめくり、TCメモリを差し込んだ。その事態で、おどろいたのは、コネクタ手術をしていない、ということだった。

「エクストリーム、あの刑事さん、コネクタ手術してないよ!？」

「もしかすると、ああいうタイプのメモリはコネクタ手術が必要ない、ということか」

「とにかく、仮面ライダーに変身したほうがいいんじゃないのかい？」

そうですね、ライト先輩。あんまり被害を大きくするわけには行かないですし。

目の前で、真倉刑事の体が、変わっていき、大鎌を持った、ピエロみたいな感じの漂うドーパントになった。ただ、このTCドーパントもまた、灰色だった。本来、ピエロはもっと色彩豊かなはずなのに。

「ハッハッハ！ その孫の手くださいよ、刃野さん！」

「おわあああっ！ どうした真倉！ おまえ今日おかしいぞ！！」

刃野刑事、必死に逃げようとしてる。しかし、転んでしまい、ずりずりあとずさってた。

「広くん、付き人」

ライト先輩が僕たちに呼びかけた。

「エクストリームだ」

エクストリームが名前を訂正。そういえば、このまえのTCマネー事件でも、エクストリームのことを『付き人』と呼んでいた。あのときには名前がわからなかったからだけど、今回の間違いなくイヤミだ。

「そうかい。エクストリーム、早急にいきたまえ。これ以上はもったいぶれない」

そうします！ 早くしないと、刑事さんが大変な目にあってしまう！！

いくよ、エクストリーム！！

「言われなくともそうするさ」

そういつてエクストリームはライブモードにチェンジ、僕はロス

トドライバーを装着。エクストリームの端子部分が差し込まれる。

「『変身』」

『エクストリーム!!』

電子音声が住宅地にとどろき、変身完了。僕たちはTCノットベリージェラシーに走っていく。やるなら今だ！　すぐに決めなきや後がないっ！

よっしゃ、キメゼリフだ！

「『積み重ねられたおまえの罪、今打ち砕く!』」

どりゃあーっ！

意を決してけりこむと、手ごたえなく、まるで軽いゴムボールを蹴り飛ばしたかのように、簡単に飛んでいった。ドーパントにしては、異常な軽さ。普通、人間より硬くなったり、重くなったりすることが多いのに。

「ぎゃああああっ！」

壁にぶつかったが、壁に穴はあかず。傷一つついてない。それは、そのTCドーパントがかなり軽いことを示していた。仮面ライダーの攻撃は、大体トン級なのだから、この結果はおかしい。

もしかして、やわらかくて、軽いドーパントなのか？

『それはないな。光介、ヤツ、本当のドーパントじゃない』

「え、それってどういうこと？」

僕はTCノートベリージェラシーの突進をよけつつ質問。

『わからんが、とりあえず今わかるのは、こいつはメモリブレイク——メモリを破壊するんじゃなく、肉体的ダメージでもどる、そういうことだ。』

理由の一つとして、このドーパントからは、メモリの気配を感じない。基本的な強さは、さっきの、孫の手に対する変な嫉妬の力と今ふりまわして攻撃してくる大鎌の攻撃のみだ』

そして、ふっと大鎌の攻撃を避ける。なるほど、これほど手ごたえを感じないドーパントは初めてだ。

「じゃ、パンチ一発！・・・でどうにかなるんだね！？」

『おそろく』

僕はこくりとうなずくと、本気のパンチを一撃。今度はさすがに、壁に強烈な傷が。でも、元々の軽さは変わらないので、壁は壊れない。

「うう・・・」

僕たち三人が見てる中、ドーパントは真倉刑事にもどった。刑事は地に倒れこみ、意識を失った。一方、刃野刑事というと、こちらもまた気絶してる。

だが、真倉刑事は本当にドーパントだったのか？ それともただ人間が別のメモリの能力で姿かたちだけ変えられていたのか？ 次に起こった出来事に、僕らは目を疑った。

なんと、足から排出されたTCガイアメモリは、霧のように、すーっと消えていった。ど、どうなってるんだ？

「だが、とりあえずメモリとしての能力は成立していた」

エクストリームが真倉刑事を示す。確かに、トン級のエクストリームの攻撃を受けても、あまりたいしたケガはない。これが人間だったら大変なことになっていただろうな。

「とりあえず、警察呼ぼうか、ってこの人たちが警察の人だけど」

そうですね、ライト先輩。

僕たちは周囲を気にしながらエクストリームの変身を解いた。すばやくデータ体を再形成するエクストリーム。ここらへんは、料理と違って手際よい。

しかし、今日になってなんでまた、こんな奇妙なメモリ事件が起こったんだろう？

第十三話 Cと共に／奇妙なドーパント（後書き）

—製作ウラ設定—

13、今はいっつ？

現在は、物語の時間で、夏休み後ちよつと経ったあたりです。大
体十月で、体育祭の時期ごろ。ここまで時間を早めてる理由の一つ
として、一刻も早くMOVIE大戦について言及しなければ、オー
ズが大変だ、ということからです。それに、レッツゴー仮面ライダ
ーの映画ともどうにかして連携させなければ！ という、映画関連
の使命感からです。あと、個人的理由として、フィリップを復活さ
せたいという理由です。

第十四話 Jとの出会い／エクストリームVSジョーカー（前書き）

ーカウント・ザ・メモリーズー

エクストリーム・・・極限の記憶

マスカレイド・・・仮面舞踏会の記憶

マネー・・・お金の記憶

オーシャン・・・大洋の記憶

ユニコーン・・・一角獣の記憶

第十四話 Jとの出会い／エクストリームVSジョーカー

二人の刑事さんは、警察に送られた。僕の見たところ、真倉刑事は、ドーパントに操られてたって感じだったから、悪いことにはならないだろう。ちゃんと、刃野刑事に謝ってたし。

その後も、僕たちは歩き続ける。その間、エクストリームはきちんと順を追って事情を話してくれた。

「光介、今回捜すキーワードの内容はだな、二項目ある。一つは、『仮面ライダージョーカーについて』だ」

やっぱりそうか。僕もジョーカーさんについては気になってたしね。でも、もう一つって？

「もう一つは、あの日学校で感じたメモリの気配に関して、『ドーパントは誰なのか』だ」

ああ、学校でエクストリームがなんか言ってたやつ。でも、結局いたのは、鏡 真さんだよ。あの有名カメラマンの。急いでたから、まちがったんじゃないの？

「おいおい広くん、急いでたのは君だけ。エクストリームのほうはまったくあせてないんだよ」

「ライト先輩、別に正門周辺に限定されるものでもないし、ちょうど真さんの近くにTCガイアメモリがあっただけじゃないですか？」

うむと一考すると、エクストリームは言った。

「とにかく、まずはこの二項目について調べよう。メモリを使っているのが誰なのかは、調べる過程で充分に知ることができる」

そーだね。僕たちはまずそっちのほうを調べなくちゃ。

真さんは、とっても礼儀正しい人だったし、TCドーパントなわけないよね。ほかに、ノットベリードーパントなんてのが出没してるんだから、そっちを操ってる人がドーパントというのもありえる。

先日、ジョーカーさんと共闘した、風都緑公園に到着。

あのときは学校がえりだったこともあって遊んでる人はいなかったけど、今は休日だから結構多くいる。砂場やシーソーなんかもあるから、幼稚園の人とかもいる。

まだまだ大きく広がり、上の丘までというとても大きな公園で、名前のとおり緑あふれる場所だ。

きれいな空気に、僕は思わず息をすーっ。あー、気持ちいい。エクストリームもやってみなよ。

「そんなことやってるヒマがあるか。まずは検索キーワードを見つけるのが先決。……で、誰か、この中に、ジョーカーが現れたときにいたヤツっているか？」

「いないよ。あのときは下校時刻だったんだ」

「なるほど」

ふーむとうなるエクストリーム。じっと公園内を見つめ続ける。けれど、その向きは、ただ一点に集中しているようだった。その目は、砂場に向けられている。なんだと思いつつも、僕とライト先輩もそこを見た。

「そのスコップ、貸してよ」

「ええ、ヤダよ」

あ、スコップの取り合いしてる。ケンカに発展しかけると、見かねたお母さんが飛び出して、貸してほしいと言ったほうに一言。

「たっくん、待ってあげなよ」

「でーもー」

「お願い」

だだをこねる『たっくん』をお母さんがさとした。うーむ、この辺お母さんってエライよな。

「おまえの母親はどうなんだ」

エクストリーム……。そっちはどういうべきなのかなあ
……。僕はこめかみをおさえて考え込んだ。

普通、こんなに考え込むなんておかしいだろう。ただ、風都に来

てから一度もお母さんに会ってないんだ。そういうことで、『エライ』といえるのか……？

ライト先輩も、心配そうに見てる。いや、エライのはわかってる。だけど、今はと聞かれると……。

「うーん……」

「いや、そうまで真剣になって考えなくていいから」

エクストリームがこめかみをおさえる僕の手をゆっくりはずした。そうだよ。こういうことは、まだ考えるべきじゃない……。

『ノットベリージェラシー！』

僕の思考を、電子音声がさえぎった。なんだろう、と、公園のみんなの視線が砂場に集中する。

僕は目を疑った。あの、たっくんが、さっきの刑事さんとおんなじ、ノットベリージェラシーメモリを持ってる！ 今の音は、ボタンを押したことで起こったのか！！

そして、刑事さんと同じく、色のないピエロ風のドーパント、TCノットベリージェラシー・ドーパントへ。

まずい！ 行かなくちゃ！

「行くよ、エクストリーム！ 何とかしなきゃ！」

ロストドライバーを構える僕の手を、突然エクストリームが右手でさえぎった。

エクストリーム、なんだよ。

「やめろ」

おいやめろって、おかしいだろ!？ あの子がドーパントになって、悪影響が出ちゃうじゃないか!!

「ノットベリージェラシーなら、さっきの刑事と同じく、体に影響を及ぼすことはない」

いや、そうだけどさ……。

僕とエクストリームが押し問答をしている間に、ノットベリージェラシーになったたつくんが、スコップを友達から奪おうとする。

「おい、俺、そのスコップ……欲しいなあ俺のシャベルより、使いやすいも〜ん……」

「た、たつくん!？」

お母さんが、驚愕の表情を見ている。自分の息子の様子が突然豹変したのだから、当然だ!

エクストリーム! 本当にいいのかよ!

「問題ない! それより耳をすませ。……ヤツが来る」

ヤツって誰だよ！

今だ押し問答を続ける僕たちを見かねたのか、ライト先輩は動き出した。

「二人とも、なにやってる！ くっ！！」

友達に危害を加えそうなノットベリージェラシーからお母さん・友達を守るために、二人の前に立つ。

「どいてよく。俺え、それうらやましーっ！」

ウオラア、という叫び声を上げながら、ライト先輩を殴ろうとするノットベリージェラシー。幼児が変身しているとは言え、痛いものは痛いに決まってる。

とにかく、行かなくちゃ！！！！

「やめろ、光介！ 今はヤツに任せたほうが得策だ！」

「ヤツってなんだよ！ ライト先輩か？ それじゃダメだ！！ 僕たちが出ないと——————」

ブルルルウン！！！！！！

僕の言葉を、誰かのバイク音がさえぎった。どうしたんだろう、この公園にバイクの音なんて？

公園入り口のほうを見ると、黒と緑のバイクに乗った、あの仮面ライダージョーカーが入ってきて、バイクから降りざま、ジャンプ。

そしてノットベリージェラシーを、

「おりゃああっ！」

と殴った。衝撃により、さっきと同じく変身解除となるドーパント。排出されたTCノットベリージェラシーメモリは、また、霧のように消えた。

「た、たっくん！」

お母さんは走りより、たっくんを抱きしめた。

「大丈夫か、奥さん」

ジョーカーさんは言った。心配してるようだ。それが不可欠とは言え、目の前で息子が殴られたのだから。

「すまなかった、奥さん。このタイプのドーパントは、一度強い衝撃を与えないと、元に戻らないんだ」

ジョーカーさんが説明する。説明なしには、耐えられないような場面だったしそういうしかない。

ジョーカーさんも何回かノットベリードーパントと戦ったことがあるのか。

「はい………」

お母さんは砂場から出ると、去っていった。同じく他の人たちも去る。

少しすると、もう、この中には、誰もいなかった。

はあーっ、とため息をすると、ジョーカーさんは変身を、ゆつくり解く。ロストドライバーを閉じ、ジョーカーメモリを抜いたんだ。端子の金色が、キラリと光った。

ヒュウウウウ・・・・・、という風の中から、帽子をかぶった男の人が現れた。

あっ。

僕は息をのんだ。その人には見覚えがある。ついこの前出会った人だ！

ジョーカーさんに変身していたのは、左 翔太郎さんだった。

翔太郎さんは、クルリと僕とエクストリームのほうを向いた。

「おお、確か君、広、ってのか」

「はい、そうです」

うん、やっぱり翔太郎さんだ。だって、雰囲気、まさにハーフボイルド！

「ハーフボイルドって言うなよ！」

すると、エクストリームがくすりと笑った。

「なんだよ」

翔太郎さんが、けげんそうな顔でエクストリームを見る。

「いや、こんなヤツが仮面ライダージョーカーだったのか、と思うと面白くてさ」

エクストリーム、今にも爆笑しそうな勢い！！　おいおい、大人相手に『こんなヤツ』はちよつとまずいって！

だけど、翔太郎さんは、さっき僕が言ったことと反対になろうと、ハードボイルドっぽく帽子をさわった。

「まあ、そうだな。実のところ、俺が仮面ライダーだ。左　翔太郎。よろしく」

自分の心をきっちり抑えて、自己紹介する翔太郎さん。なんだかこっけいすぎて笑っちゃいそう。

そんな気持ちを心の奥にとどめると、エクストリームの紹介。

「改めてよろしくお願いします、翔太郎さん。えっと、こいつが、僕の友達の」

「エクストリーム」

・・・・・・僕が言う前に名乗るな！

「エクストリーム・・・？」

『エクストリーム』という名前に翔太郎さんはちよつと目を見開いて、驚きを隠せない様子。僕たちが仮面ライダーだって言えば納

得するかもしれないけど、今言っちゃってもいいのかな……。

僕がどうしたものか迷ってるうちに、翔太郎さんは今度はライト先輩のほうを見た。一応、僕たちは翔太郎さんの正面に回りこんで、ライト先輩との自己紹介の様子を観察。

見てると、翔太郎さんの表情は、さっきのエクストリームという名前を言ったときの数倍、すごくなった。目の見開きが、まるでマンガの登場人物のようだ！

エクストリームは、まったく動じず、翔太郎さんの動向を観察中。すると、だんだんと、翔太郎さんの口が開いた。ゆっくりと、開いた口から叫びとして出された声のほうに、僕たちは驚愕した。

「フイ、フィリップー！！！？？」

で、でかつ！！ さっきまであんまり表情の変化を見せなかったライト先輩も、顔をこわばらせて耳を押さえた。

それほど、翔太郎さんの叫びは予想外だった。

あーあ。ここにガラス窓たてたら、どんだけ震えたかなあー。もしかしたら、割れちゃったり……？

でも、叫んだ単語があまり長くなかったために、このでっかい声はすぐに聞こえなくなった。

思いつきり驚きを声として出しても、まだ翔太郎さんは目を見開いたままだ。

「フィ、フィリップ・・・・・・・・。なんで・・・・・・・・？」

耳を押さえるのをやめたライト先輩は、とりあえず翔太郎さんの間違いを修正することにしたようだ。はあー、とため息をつく、早口で紹介する。

「あの、僕はフィリップではなく両崎 ライトです、・・・・・・・・よろしくお願いします」

しかし、翔太郎さんは何か間違ってるようで、まだ修正されない。

「そ、園崎^{そのざき} 来人^{らいと}？ それは、フィリップが園崎家にいたときの名前じゃねーかー！」

ああもう、聞き間違えないで下さいっ！ 両崎、ですっ！！！！

僕が後ろからそういつてやると、やっと翔太郎さんは落ち着いてくれた。

「ああ、そうか、両崎、か・・・・・・・・。すまねえな、外国に行っちゃまった友人に顔が似てるんで、つい・・・・・・・・。」

ああ、なるほど。友達と顔が似てたのか。その友達と、公園で会ったってシチュエーション、ドラマの感動編でありそうな話だし。

すると、ちょっと悲しそうな顔をする翔太郎さん。その友達と、何かあったのかな？

僕が心配そうな目を向けると、さっと翔太郎さんは顔をあげた。

全体にヤセガマンな雰囲気漂ってる。無理しなくてもいいのに。

誰だって、友達と会えなくなったら、悲しくなるじゃないか。

と思っただら、翔太郎さんに向かってエクストリーム、が唐突に話しかけてきた。

「それより、君が仮面ライダーであるという事実についてだが」

ずずいと僕の前に出るエクストリーム。おい、空気読めよ、そして敬語使えよ、エクストリーム！

「うるさい、光介。年齢で言えば、僕のほうがずっと年上だ」

え、そうなの？

なんか、メモリの年齢とかあんまり知らなかったから、びっくり。

エクストリームはいつ生まれたんだろうなあ？

僕が首をひねってる間に、話を続けるエクストリーム。

「ん、まあそうだな」

ハーフボイルドな翔太郎さんは、敬意とかそういうのには結構うといらしい。よかった。もしそういう敬語を気にする大人が相手だったら、僕はどういう対応したらいいのか迷っちゃうし。

「そうか、俺が仮面ライダーだってことおまえらにバラしちゃったんだっけな」

エクストリームはふっと笑って翔太郎の言葉に受け答える。

「問題ない。こっちも仮面ライダーだ。仮面ライダーエクストリーム」

って、おい、いいのかよ、僕たちが仮面ライダーだって教えちゃって!？ ついこの間まで隠してきたことじゃん!

「相手が仮面ライダーなら問題ない」

いや、そうかもしれないけどさ……………。

「え?」

ほら見ろ、翔太郎さんも帽子が取れそうなくらい髪さかだって驚いてんじゃない!

「信じられないのなら、この場で信じさせる。おい光介」

さっき、ノットベリージェラシーと戦う前に装着しようとしたロストドライバーを、エクストリームが無理やり僕の腰に押し付ける。ロストドライバーに自分の意思とかはあんまり関係ないらしく、ベルトがシュッと巻かれる。

「おい、エクストリーム……………」

「変身」

「おいおめえら、やめ」

翔太郎さんの制止も聞かず、エクストリームはライブモードになり、勝手にロストドライバーにメモリ部分を挿入した。

おいエクストリーム、やめろ！！

『エクストリーム！！』

ロストドライバーの展開まで自分でやっちゃって、僕は反論する間もなく、仮面ライダーエクストリームに変身させられた。

変身するときの風で、背中のウィンディスタビライザーがたなびく。

『仮面ライダー、エクストリームだ』

これでわかるだろ、という風に自己紹介するエクストリーム。右目が点滅し、エクストリームの発言を知らせる。

「おいエクストリーム、なにもこんなことしなくたっていいじゃないか」

すると、エクストリームは少し申し訳なさそうに言った。

「すまなかったな、光介。『自分が仮面ライダー』と相手に言ったところで、実証する手立ては、実際に変身して見せる以外にない。今回は、手っ取り早く仮面ライダージョーカーにボクたちが仮面ライダーであることを知らせるためにこういう形でやらせてもらった。一刻も早くキーワードを集めなくてはならないからな」

なるほど、確かに、僕たちみたいな人が言っても信じてもらえないかもしれないね。

しかしエクストリーム、あんまりはらはらせないでよ。

そのあと、僕たちは変身を解いて翔太郎さんに今までのことをすばやく教えた。翔太郎さんは、納得してうなずいた。

「なるほどな。今までの事件は、COREっていう組織のせいなのか」

『まあ、そういうことだ。いろいろ事情がわかったろ？ 例えばその両崎 ライトとかな』

エクストリームが砂場に立ったまま、話を聞いているライト先輩のほうをアゴでしゃくった。

「よくわかった。それで、おまえらはこれから何を――――」

ダアアン！！

『ジョーカー！』

翔太郎さんの言葉を、またこの前と同じ、謎の銃声と電子音声さえぎった。ま、まさか！

僕たちが翔太郎さんのほうを見直すと、もうそこには翔太郎さんの姿はなく、代わりに、おそらく翔太郎さんが変身させられたであろう、TCジョーカー・ドーパントが立っていた。

「グオオオオオオッ!!」

さっきの、翔太郎さんの叫び声とはかけ離れた、『ドーパントとしての』叫びが公園にこだました。その黒光りする流線型の体を、震わせながら。

「広くん、付き人！」

ライト先輩、離れててください!!

『言っておくがボクは付き人じゃない!』

こんなときまで訂正するなっっ!!

いくぞ、エクストリーム!

『そうだな、いくしかない!』

僕たちは走り出した。今回ののは、さっきのノットベリージェラシーとは違い、本物のメモリで出来ている。ということは、メモリブレイクでどうにかなるはず!

「そうだな、ぱぱっと決める!」

『ユニコーン! マキシマムドライブ!!』

電子音声が僕の耳にひびく。TCユニコーンメモリをマキシマムスロットに差し込んだからだ。

ご苦労、エクストリーム!!
いようし、必殺技だあ!

「『ユニコーンストライク!』」

TCユニコーンメモリで強化されたパンチ技、『ユニコーンストライク』がTCジョーカー・ドーパントの腹に直撃する。

「グオッ!」

TCジョーカーは少し押されるが、また立ち直り、うなり声を上げる。

「グオアアアアアッ!!!」

『なんてうるっさい叫び声だ! 左 翔太郎のときの声のポリウムはまだ健在だなっ!』

こんなときまでギャグっぽいこと言うなよお! って、うわっ!

僕は飛びのいた。TCジョーカーが飛び掛ってきたんだ。ジョーカーメモリでドーパントになると、技の力で強くなるから、危険だな。よし、それならば。

僕はTCユニコーンメモリを引き抜き、次いで、TCオーシャンメモリを差し込んだ。

『オーシャン! マキシマムドライブ!!』

「『オーシャン・イズ・ウォーター!』」

おおっ、必殺技がカッコよく! 英語の知識がこんなとこで役に

立った！　ちなみに今のは日本語訳で『大洋は水』！

『変なところで感心してる場合じゃない。これは液化の技だ！』

えっ、そうなの？

そういつてる間に、僕の体は一気に水みたいになった。

これには少し驚いたけど、液化したことで、TCジョーカーの技も、なんなく避けられるようになった。

さっと固体に戻ると、僕はまたTCオーシャンメモリを引き抜いてから、エクストリームメモリを閉じ、再び展開した。一度TCオーシャンメモリを抜いたのは、今から行うマキシマムと被ってしまつて、メモリの力が増幅されすぎるのを防ぐためだ。

ちなみに、そういうことになる状況を、『ツインマキシマム』と呼ぶ。強烈な技が出そうだけど、危険なことは、今はあまり出来ないけど。

その後、僕たちはパンチによるラッシュに徹した。出来る限り翔太郎さんがメモリブレイクをよけないようにダメージを与え続ける必要があるからだ。

「うおおおおお・・・」

TCジョーカーが逃げないように、細心の注意をして攻撃を続ける。

「グ」

ふいに、TCジョーカーが空高くジャンプした。黒い流線型の体がキラリと光る。

そして、一気に僕たちの後ろに回りこむと、赤いものを出した。

ああっ、あれってロストドライバーじゃないか！

『まずいな。TCガイアメモリでロストドライバーを使ったら、ドーパント以上に厄介なことになる』

確かに。

早く何とかしないと、大変なことになる！

いくよ、エクストリーム！！

第十四話 Jとの出会い／エクストリームVSジョーカー（後書き）

—製作ウラ設定—

13、必殺技の名前たち

切る技（スキヤニングスラッシュ）、たたく技（スキヤニングブランディング）を除いて、キック技、特殊技に限り、必殺技名が一応設定されています。ネタバレ以外のもののみ説明しておきます。

エクストリーム・・・ライダーエクストリーム、エクストリームサイクロン、データーリリジョン

マスカレイド・・・マスカレイドエクストリーム

オーシャン・・・オーシャン・イズ・ウォーター

ユニコーン・・・ユニコーンストライク

番外編第二話で書くべき『エクストリームの追加必殺』がこんな形で書くことになりました。

光介「少ないから？」

エクストリーム「番外編第一話を編集すればいいだろ」

それやると、順番的にネタバレになってしまうので。

光介「ああなるほど。ネタバレを防ぐために、この場でって感じ？」

エクストリーム「まあ、結構定期的に必殺技についていたがるかな」

これからも必殺技については触れていこうと思います！

光介「理由…最低でもA to Z二十六種類×2、あるいは×4くらい必殺技の種類があるから」

エクストリーム「間違いないな」

第十五話 Jとの出会い／勧誘成功（前書き）

ーカウント・ザ・メモリーズー
エクストリーム・・・極限の記憶
マスカレイド・・・仮面舞踏会の記憶
マネー・・・お金の記憶
オーシャン・・・大洋の記憶
ユニコーン・・・一角獣の記憶

第十五話 Jとの出会い／勧誘成功

とにかく、早くしなくちゃ、手遅れになる！！

僕はTCジョーカーに立ち向かっていく。

ロストドライバーを奪わなくちゃ！！

ただ、それだけを考えていた。

今だ、パーンチッ！

と、僕は出来る限り力をこめて攻撃した。

「うわぁっ！！」

だけど、TCジョーカーはただでさえ強い。でも、早くしないと、翔太郎さんが！

『光介、どうする？ ヤツにはたいていの攻撃が効かないようだが』

わかってるよ………エクストリーム。

僕はそう答えながら、ゆっくりと起き上がる。いつの間にか、風都の風車かざぐるまを回していた風が止まっている。

まるで、翔太郎さんがドーパントになってしまったことに対して悲しみの心を表して、無言で唇を噛みしめ、耐えているように。

僕は、この街を泣かせるわけにはいかない！

「エクストリーム・・・いくよ。翔太郎さんを街に取り戻すんだ！！」

『ああ。ボクも彼にメモリをうめこんだヤツに怒りを感じる』

エクストリームの声、めずらしくふるえてる。当然だ。翔太郎さんは風都を守る仮面ライダーなんだ！ 翔太郎さんを、僕たちはもとのもどさなきやいけないんだ！！

「『積み重ねられたおまえの・・・後ろにいるヤツの罪・・・いずれ打ち砕く！』」

すぐに決めるぞ、エクストリーム。

『・・・今すぐにな』

僕たちは、ゆっくりと、しかし確実に、ロストドライバーを閉じ、再展開する。

『エクストリーム！ マキシマムドライブ！！』

力強い電子音声が公園の中で鳴り響く。それが聞こえると同時に、僕たちは全速力で、ロストドライバーを構えるTCジョーカー・ドーパーントに走っていく。僕たちの、仮面ライダーの必殺技だ！

僕たちは低く飛び上がり、みぞおちを狙って飛びげりを放つ。

「『ライダーエクストリーム！！』」

仮面ライダーエクストリームの必殺技、ライダーエクストリームは、緑色のエネルギーを帯びている。それが風のようにスパイラルして、足に凝縮。

「グオオオオウ！」

ザザザ……………。

数メートルほど、TCジョーカー・ドーパントは押される。必殺技を受けたんだから、このくらいは押される。

しかし、TCジョーカーは翔太郎さんに戻らず、依然として、黒光りする体を持っている。ど、どうして!?

TCガイアメモリだからメモリブレイクはされないまでも、ドーパント体を保てるような衝撃じゃないのに!

『光介、どうやら、元々が仮面ライダーだったことで、ある程度、マキシマム系統の攻撃の耐性ができているようだな』

エクストリームも、少し驚いているみたい。きっと、今まででこういうことが起こらなかったからだろう。

体勢を整えたTCジョーカーは、ロストドライバーを装着。

ああ、やめるんだ、翔太郎さん!

エクストリーム、どうする?

『……………』

答えようのない、というようなうめき声をあげるエクストリーム。

『・・・・・・・・』

TCジョーカー、翔太郎さんは何も言わずに、ジョーカーメモリを出した。

『まずい・・・・・・・・TCジョーカーとT1ジョーカーを同時に使用しようとしている・・・・・・・・。ツインマキシマムだ。ここまで来ると、僕たちでは太刀打ちできないし、左 翔太郎の体にも影響が出ることは間違いない』

そ、そんな・・・・・・・・。

今、ついさっき会ったばかりなのに、もう、こんなことになったやうなんて・・・・・・・・。

「『くう・・・・・・・・』」

僕たちは二人ともうめき声を上げた。

『ジョーカー!』

TCジョーカーは、左手に持った、T1ジョーカーメモリを構えた。一体、どうしたら？

すると、突然、TCジョーカーは頭を抱えた。どうしたんだろう？

「グオオオオオオッ!!!!」

苦しいな叫び声をあげる。それは、ドーパントとしての痛みというより、愛着のあるジョーカーメモリに対する翔太郎さんの気持ちなのかもしれない。

以前戦っていた二色の仮面ライダーも、『ジョーカー』のメモリを使っていたらしいことは、エクストリムの検索によって聞かされていた。ということは、あのジョーカーメモリは、ずっと一緒に戦い続けた、最高の一本……。

さらに、TCジョーカーの体から、四本のガイアメモリが飛び出した。うち二本は、端子が金に光っているT1。

『光介……あれは左 翔太郎が使っていたらしき、『マスカレイド』『ロケット』『トリガー』『メタル』のガイアメモリだ』
エクストリームが、理解しがたいといった声で、でもゆっくりと教えてくれる。じゃあ、あの四本も、翔太郎さんの愛着のあるガイアメモリなのか。

「うああああ！」

TCジョーカーの声は、人間らしい、翔太郎さんの声での叫びに変わった。そして、翔太郎さんの体から、TCジョーカーメモリが排出される。

TCジョーカーは、翔太郎さんに戻った。

なんだか、わけがわからないけど、翔太郎さんの意思が、ドーパントの暴走に打ち勝ったのは事実みたい。

メモリがまた再挿入されないように、僕たちは地面に落ちたTCメモリに走りよる。

『光介、彼がまたドーパントにされないうちに、メモリを回収しろ！』

「うん！」

僕はすばやく回収しようとする。

だけど、それは一発の銃撃によってさえぎられた。

ドン！！

「『うあっ！』」

ダメージを受けた僕たちは一瞬うずくまり、またすぐに顔をあげ、周辺の状況を確認した。

公園にこれといった変化はない。……何者か不明の、青いドーパントが、TCジョーカーメモリをぐつとにぎっている以外は。

『君は、……誰だ？』

突然の状況の変化に、エクストリームは首をかしげた。

だが、そのドーパントは、無言で公園を去っていく。その速さは、ドーパントであるために、あくまで速い。

ま、待てっ！

僕は青いドーパントに手をさしのぼすが、さっきのマキシマム連続使用や、TCジョーカーとの戦いが体にこたえたのか、全然体が動かない。

青いドーパントが去っていくうちに、僕たちは変身を解除しバタツと倒れた。

「大丈夫か」

低い声で呼びかけられ、僕ははっと目を覚ました。

見回すと、そこは鳴海探偵事務所。この前来た場所だ。僕はあの赤いソファに寝かせられていた。

声の主は翔太郎さんで、心配そうに僕を見てる。ライト先輩も、イスに座って僕を見ていた。ここに運ばれてきたみたい。

「ああ……大丈夫です」

ふう、とため息をつく、翔太郎さんは安心したように話し出した。

「いやあ、よかったぜ。話は全部あいつに聞いた。すまなかったな」

「いえ、大丈夫です」

翔太郎さんがあごでしゃくった先には、エクストリームが人間態の状態で座ってる。僕よりも先に目を覚ましたのか。

次に、翔太郎さんは僕に、カメラを持って座ってる男の人を示した。真さんだ。

「ちょうど鏡さんが公園に通るかかってたんで、一緒にここに連れてきてもらったんだ」

そうなんですか。真さん、ありがとうございます。

「いや、いいんだよ。困ったときはお互いさま、というじゃないか」

はあ………。

「あ、さっき話を聞いたって言ってましたけど、真さんは？」

僕が小声で聞くと、大丈夫というふう翔太郎さんは答えた。

「ああ。鏡さんにも話したが、肝心のところは言ってない」

ほっ。

いくら真さんがいい人とはいえ、簡単に仮面ライダーの正体を明かすわけにはいかないからなあ。

「どっこいしょ」

「無理しなくていいぞ」

「いえ、このくらい大丈夫です」

マキシマムの疲れなんて、結構楽にふきとんじやうものだしね。

僕がソファに座りなおしたとき、唐突に事務所のドアがバンと開いた。なんだろう？ 新しい依頼人の人かな？

と思つたら、入ってきたのは依頼人じゃなくて、新聞部部員の皆さん。

また勧誘に来たの？

「いや、今回は勧誘じゃなくて、手がかりを見せに来たのさ。さすがに僕も、そんな毎回毎回勧誘の用事で来ないって」

友、毎回そうじゃないか。困ったヤツだって顔しないでよ。

だけど、友はそんな僕には目もくれず、

「真さーん！」

たった今気づいて真さんに走りよった。君は久しぶりに会った恋人の役でもやろうとしてるのかよっ！

「やあ、よく来たね、みんな」

真さん、にっこり。

勇香がずいとい前に出て翔太郎さんに大きな封筒をさっと見せた。ここらへんは手際いいね。

「どーも、部員その四」

部員じゃないってのに。いや、そもそもその四ってなんだよ。僕は家臣か召使いかいな！

「いいえ、もう部員だって友に聞いたけど」

友・・・・・・・・。ちゃっかり勧誘よりすごい、犯罪レベルの改ざんしてんじゃん！

「部員その一、封筒の中身を翔太郎さんに出してあげて」

「わかったよ」

友が封筒を受け取り、中の写真を出すと、

「どうも」

翔太郎さんはそれを受け取った。

「これは・・・・・・・・」

「部員その二、写真の説明」

「へいへい」

一真はつまんなそーな顔をしながら、翔太郎さんや真さんに向けて説明を始める。

「ああー、この写真は、この前部長がストロボで撮影した写真です。そのシーンは、仮面ライダーが校庭で戦闘しているときのもので。

で、印刷したら、面白いことに気づいたんです。ほら、ここ」

ぴっと、一真は写真の左下を指差す。写真は、右が学校の屋上、左が正門という構図だ。

「ここに、なにかおかしな棒が写ってるんです」

「なるほど」

翔太郎さんは身をのりだし、ぐっとそれを見た。

「もしかしたら、これを挿すと怪物になるんじゃないかと……」

「なるほどな。とすると、これを一般の人に撃ったヤツが犯人か」

ううむ、と翔太郎さんはうなる。と、そのとき、

「ちよっといいかな。トイレに行ってくる」

突然、真さんが席をはずした。トイレの他に、なんかあの写真について考えたいことがあるから行っちゃったのかもしれないな。

「どうぞ。そこのビリヤード場にありますよ」

翔太郎さんが外を指差す。探偵事務所は、この『かもめビリヤード場』の奥にある。ってことは、トイレもそこになるのか。

真さんが言ってしまった後、中はしんと静まりかえった。『黙れ』と先生に言われたときみたいに、みんな無言。

あ、と勇香が声をあげた。

「そういえば翔太郎さん」

「なんだ？」

「その人、誰？」

エクストリームを指差す。翔太郎さんは、どう説明したものか迷ってるみたい。確かに、『彼はエクストリームです』なんて変な名前言えないし。どうしよう！

すると、エクストリームのほうから口を開いた。

「広 光介の知り合い、大道 極だ」

うへっ、変な名前。でもエクストリームって名乗んなくてよかった。でも、大道先生の名前、どうして使ったんだろう？ あとで聞いてみようっと。

「そーなの。よろしく、極さん。でも、見たところ、学校に通ってないみたいね」

「まーな。でも、そこで習うような内容は、全部知ってる」

なんか、とげとげしくなってきたような……もしかして、勇香、エクストリームを勧誘するつもり？

「そう？ でも、中学校には、部活ってものがあるけど」

やっぱり、勧誘する気かつ。

「部活。知りえるものは勉強の内容だけではない。そう聞してる。だがボクには必要はない。なぜなら全ての情報はボクしか知りえないものだから」

おいエクストリーム、まずいって。検索能力のことは言うなよ。

僕がひそひそと言うと、

「わかってる」

僕をつきはなした。

「この国には義務教育制度があるのよ。わかってる？」

「いや、ボクには適用されない。ボクは鳥・・・・・・・・」

やめろ、エ、じゃなかった、極！！

「わかったよ」

「了承したね」

え？

「では、入学決定」

「ニコニコしてる場合じゃない、勇香・・・・・・・・様！」

エクストリームはというと、ぽかんとしてる。わかったよっていう言葉尻をとらえて、なんちゅうこと言ってんだっ！

「両崎さんに言っとくから」

「「え？」」

僕とエクストリームが同時に驚いた。なんで勇香が両崎さんのこと知ってんの？

「ライト先輩、どういうことですか」

「ああ、広くんたちには言っていなかったね。入居者について。君たちのとなり、^{たけし}剛 勇香さんだよ」

な、にーっ！！！！

最悪だ、信じられん……………。

「それと、一真くんも」

なにっ！？

今まで、この人たちと同じ屋根に住んでたとも言うのか。かなりいきなりだぞ。

「じゃ、友は？」

「僕は、父さんが顧問だから、楽しくやらせてもらってます！！！」

はっはっはと笑う友。な、なんてえこったい……………。

そういうことなら、僕にせまってくる理由もなんとなく理解できる。

「・・・・・・・・わかりましたよ。入りますよ。ついでに極もどうぞ」

しかたなく言うと、勇香はやったあ、というように笑った。こ、
こんな策略だったなんて・・・・・・・・。

第十六話 Pの手がかり／ドーパントは（前書き）

ーカウント・ザ・メモリズー

エクストリーム・・・極限の記憶

マスカレイド・・・仮面舞踏会の記憶

マネー・・・お金の記憶

オーシャン・・・大洋の記憶

ユニコーン・・・一角獣の記憶

エクストリーム「今回は一時的だがジョーカーゲット」

光介「いいね」

第十六話 Pの手がかり／ドーパントは

やられた・・・・・・・・。

頭をおさえてうなだれる僕を、どういうわけか学校に行くべきという結果がでてきたエクストリームはにらみ、翔太郎さんは心配そうに見た。はあーっ。

しかたない。こうなったら、明日から、がんばって新聞部やっていこう！ エクストリームには悪いけど、一緒に学校についてきてもらおう！

ぐつと頭をあげてこぶしをにぎりしめる。いようし、決心したぞ。なんとかこの生活を耐えていこう！！ 明日からがんばらねばっ。

すると、突然変な声が事務所の中に。

「グ、クツ・・・・・・・・」

誰かの声が、僕の決心をさえぎった。はっと見ると、全身が火花みたいなドーパントが。なぜか腰には普通のドーパントにはない銀色のベルトが。ベルトの中心では、黄色い玉みたいなものがきらりと光っていた。

翔太郎さんのほうを見ると、すでにロストドライバーを取り出し、いざというときのために備えてる。エクストリームも、きつとドーパントをにらみ、身構えていた。

「ダアッ！」

ドーパントが動く。叫び声と同時に、一真が手に持っている写真がぽっと爆発した。ドーパントの能力だろう。

「エクス・・・・・・じゃなく極、あれは!？」

みんながいるところなわけだからこっちの名前で呼ばなくちゃ。

するとエクストリームが即答。

「あれはEの、TCガイアメモリ。エクスプロージョンだろうな」

「あっ、写真が・・・・・・」

写真の爆発を見た勇香はまゆをゆがめて口も細めた。

とにかく、あいつと戦わなくちゃなんないな。

僕もポケットから赤いベルト、ロストドライバーを出す。

「だあっ！」

翔太郎さんがTCエクスプロージョン・ドーパントをどつき、事務所からたたき出した。ビリヤード上へとつづく壁にTCエクスプロージョンがたたきつけられる。そしたら、ドーパントはぽっと逃げ出した。

「友たちは待ってて。行きますよ、翔太郎さん！」

「ああ！」

新聞部のみんなを事務所に待たせると、僕、翔太郎さん、エクストリームの三人は事務所を飛び出し、あとを追った。

そうしていると、TCエクスプロージョンは、翔太郎さんの乗っていた、前が黒、後ろが緑のバイクがある駐車場に出る。

みんなは見えてない。決めるなら今だ！

僕はロストドライバーを腰に装着。翔太郎さんも同じく。次に翔太郎さんは黒いガイアメモリ、ジョーカーメモリを出し、エクストリームはガイアメモリに。

それぞれのガイアメモリをドライバーに挿すと、変身待機音が鳴った。

「『変身!』『』」

ドライバーを展開。

『ジョーカー!!』

『エクストリーム!!』

二つの電子音声が空気を裂き、風がたつと、仮面ライダーエクストリームと、仮面ライダージョーカーが現れる。

『エクスプロージョンの能力はモノを爆発させるんだ。さっきのは小規模だったが、今度はただではすまないかもしれない』

「わかった。エクスソード！」

叫ぶと、緑クリアの部分から、エクスソードが出てきて、僕の右手にがしっとつかまれる。これで攻撃すれば、データイリユージョンでエクスマグナムにして、遠距離攻撃もできる。

だから、僕はロストドライバーを閉じ、再展開することにした。

『エクストリーム！ マキシマムドライブ！！』

「『データイリユージョン！』」

エクスソードをぐっと構えると、エクスソードがエクスマグナムに変化する。横から見ると、なんだか√（ルート）1にも見える。これが通常モードで、メモリを差し込んで必殺技を撃つときには、ルートのちよつと下にカクつとなつてるところを引き上げてマキシマムモードにできる。

「おまえらジーンみたいなことしてるなあ」

翔太郎さんが感嘆の声をあげる。ジーンと戦ったみたいだけど、ジーン・ドーパントってなんだろう？

「エクストリーム、ジーンって？」

僕が聞くと、エクストリームは落ち着いた声で答えてくれた。

『ジーンとは、遺伝子という意味の英単語だ。有機物の遺伝子構成を変えることで、別のものに変えることができる。まあ、データイリユージョンは、有機物だけに限定されるものではないがな』

へー。ま、いっか。なんか難しいけど、データリユージョンの生物版みたいな感じなんだね。

「よーっし！」

エクスマグナムの銃口をTCエクスプロージョンに向けると、発射。うまく照準が合わせられたのか、きちんとドーパントの体に直撃した。

「やったな」

こくつとうなずくと、翔太郎さんはTCエクスプロージョンに蹴りをいれる。

「ウワアッ！」

これもきれいに当たって吹っ飛ぶ。このことに対して、エクストリームが疑問を口にした。

『こんなに簡単にやられるとはおかしいな』

「僕と翔太郎さんの実力ってやつじゃない？」

結構うまくいってると思うしね。

『いや、暴走ってのは、たいていの状況下では直線的な運動をとるはずなんだ。曲線的な攻撃というのは、基本は理性がある動物にできるものだと思うんだが』

まあ、チーターとかは直線だよ。けど、相手は人間なんだし、そういうのはないと思うよ。とにかく、今は目の前の敵を倒しとかな
いと。

『・・・・・・・・そうだな』

ちょっと無言になったあと、エクストリームはふっと息をはいた。

もう、考えすぎだよ、エクストリ——。

っておわっ！！

突然、誰かが僕の首をしめにかかった。

「仮面ライダー・・・・・・・・」

このぐつと低い声、一真だ！　どうして事務所から出てきたの？
翔太郎さんも驚いて体が硬直しているみたいだ。一真が相手じゃ
どうしたもんかわからない。

『光介、なにもしゃべるな』

エクストリームが小声で注意する。そうだった、正体がバレたら
まずいもんね。でも、本当にどうして一真がいるの？

言っといったのに出てきたのかっ！　この状況だと変身までは見ら
れてなさそうだけど、どうして仮面ライダーの邪魔をするの！？

「仮面ライダー・・・・・・・・。許さない」

恨みがましい声で言葉を搾り出す一真。新しいメモリの能力？

『いや、こいつは正気だろう』

出来る限り小声でエクストリームがまた教えてくれる。正気って、それじゃあもつと意味がわからないよ。

まさか、昔悪い仮面ライダーがこの街にいたっていうのか？

『とにかくこれではらちがあかない。しかたないな』

どすっという鈍い音がしたと思うと、一真の体がずつとずり落ちる感覚がする。エクストリーム、まさか本気じゃないよね？

でも、とりあえずこれでどうにか。

「翔太郎さん、ぱぱっと決めましょう！」

「そうだな。これ使え！ 多分ヤツには有効だと思うぜ」

パンチ技を連続で繰り出したあと、翔太郎さんは黒い、あのジョーカーメモリをロストドライバーから抜き取り、僕に渡す。

「ありがとうございます！」

早速使ってみるか。ジョーカーのマグナム技！！

僕はエクスマグナムの銃口にジョーカーメモリを差し込むと、大砲型のマキシマムモードに変形。

『ジョーカー！ マキシマムドライブ！！』

通常マグナムには装填しないメモリだから、どうなるかわからない。

じっと見てると、マグナムを黒いエネルギーが包んだ。どうなるのかな？ そう考えつつまだ待つと、そのエネルギーは形をだんだんと作っていく。

やがて、それはジャンケンでグーを出したときみたいににぎりしめたこぶしの形になった。これって、マグナムと称したパンチ技じゃない！

『光介、そんなことは気にするな。ぱぱっと決めるんじゃないのか？』

「そうだった。いようし、行くぞっ」

翔太郎さんは少し後ろへ下がり、僕はぱつとTCエクスプロージョンに走りよる。自慢の爆発は出ない。こうなると、ただ当てるだけっていう状況だ。

「『ジョーカーマグナムパンチ！！』」

「グオッ！！！」

エクスマグナムを当てると、パンチのエネルギーがTCエクスプロージョンに流れ込んで、大爆発。

「おわっ！」

僕は爆発をさつとよける。元のメモリの能力が爆発で、ジョーカイマキシマムの刺激もあって爆発を起こす結果になったんだろう。

「よっし」

爆発の煙の中から最初に出た、『TCエクスプロージョンメモリ』を拾う。

『さて、変身者は』

次に、ドーパントに変身していた人を確認する。仮面ライダーエクストリームの赤い目が、煙が消え去る前に変身者の姿を見せてくれた。

って・・・・・・・・。ええっ!?

僕はマスク越しにぶつと噴き出した。

なんと、変身していたのは・・・・・・・・。

真さんだった。

番外編第二話 コンボの確認（前書き）

こんにちは、k. iです。

今回の番外編第二話では、この小説に登場するオーズのコンボについて、誰か同じコンボをやっていないか確認するために、オリジナルコンボを出しておきます。

早めに確認をしておかないと、オリジナルがオリジナルでなくなり、パクリになる危険性はらんでおりますので。

実際にオーズが出るのは、セカンドライダー章の次になります。このコンボは、その章のそのまた次になるだろうと。

自分のものと同じだ、というものがあれば、感想あるいはメッセージでお伝え下さい。

番外編第二話 コンボの確認

光介「今回は番外編第二話？」

エクストリーム「そうらしいな。必殺技ネタじゃなく、今度はコンボネタだそうだ」

こんにちは、二人とも。k.iです！

光介「来たね、作者さん」

エクストリーム「やっと来たか」

二人とも知っているとおり、今回はオーズのオリジナルコンボについて。

光介「なんでこの時期に？ オーズが出るのってまだまだ先って作者さんが言ってたような気が。それにオーズって？」

エクストリーム「検索によると」

番外編だから言わないように。

エクストリーム「わかったよ」

光介「気になるなあ……」

というわけで早速オーズコンボについて！！

仮面ライダーオーズ　ビャッコザクリューコンボ

使用メダルは、ビャッコ、スザク、セイリュー。一つだけないゲンブは、武器として使われます！

変身者については、映司じゃなく、別の人になるでしょう。なぜなら、この話に出てくる映司は、アंकと出会って間もないからです。

光介「よくあるリ・イマジネーションってヤツで、エイジさんかも」

光介の妄想・・・・・・・・。

エイジさん「変身！」

『ビャッコ！　スザク！！　セイリュー！！！！　?????????↑コンボ音声』

光介「作者さん、お願い！　変身音を教えて！」

無理です！　今の時点で他作者様とコラボするくらい、ありえない！！

とにかく、他作者様の中でジャッコザクリューコンボをやろうとしている方がいらっしゃいましたら、実際にオーズが出るまで時間があるので、お伝え下さい。

以上、k. iでした。

番外編第二話 コンボの確認（後書き）

セカンドライダー編は短くいくつもりです。そして、もうすぐメモリ量産編が終わるだろうと思います。
では。

第十七話 Pの手がかり／真さんは（前書き）

ーカウント・ザ・メモ리즈ー

エクストリーム・・・極限の記憶

マスカレイド・・・仮面舞踏会の記憶

マネー・・・お金の記憶

オーシャン・・・大洋の記憶

ユニコーン・・・一角獣の記憶

エクスプロージョン・爆発の記憶

光介「今回、新仮面ライダー登場か・・・・・・・・」

エクストリーム「おい待て光介。それ以上は言うな」

ライト「今回、僕もいるはずなのに描写がまったくなかった」

k.i「それはごめん。完全に存在を忘れてた。それに今回は完全にエクストリームが独走」

第十七話 Pの手がかり／真さんは

「真さん!？」

僕と翔太郎さんは、同時に叫んで、真さんに駆け寄った。同時に、変身を解除する。幸い、傷はないみたい。良かった。変身解除をねらったの攻撃だったけど、もしダメージがあったら、新聞部のみんなには顔向けできないよ。

「大丈夫ですか」

翔太郎さんが起き上がるとする真さんを支える。僕の後ろでは、エクストリームが体を再構成していた。

「ああ、ありがとう」

ゆっくりと起き上がる真さん。僕のほうは、一真をどうにかしなくっちゃ。一真のほうへかけていくと、一真に声をかけた。

「一真っ！」

「んっ・・・・・・・・」

良かった、一真のほうも大丈夫みたいだ。エクストリームが攻撃したときには、どうなるかと思ったけど。

「広、仮面ライダーはどこだ!？」

ガバッと起き上がると、一真はあたりを見回した。ああ、やっぱ

りさっきのことが続いた。

一真、ごめん。僕が仮面ライダーだなんて、今は絶対言えないや・
・・・・。

「とりあえず、戻ろうか、一真」

「・・・・・そうだな」

うなだれつつ、身を起こす一真。

一真は、もう完全に大丈夫。あと、真さんだな。

ふっと、真さんのほうを向くと、普通に立っていた。よしっと。

「僕、そろそろ帰りますよ」

真さんが翔太郎さんを見て言った。なんか、強い口調。さっきのことがそんなに・・・・。って、暴走してたときの記憶って残らないような・・・・？

どうしてこんな急に？

「真さん、無理はしないでください。場合によっては、家まで・
・・。」

翔太郎さんが心配そうな目で真さんを見る。

そうですよ、真さん。そんな無理すると体に悪いですよ。

「いいんだ。僕は大丈夫」

翔太郎さんを引き離すと、真さんはその場を離れようとした。しかし、それをエクストリームの声がさえぎった。

「待て」

ぴくっと、僕たちから見て後ろを見せていた真さんの背中が動いた。そしてエクストリームのほうへ振り返る。

エクストリームはというと、再構成し終わったその体で、真さんをにらみつけていた。

「なんだい、大道くん」

いつもどおり、やわらかい雰囲気にくずさずにエクストリームに言う真さん。エクストリーム、突然どうしたんだろ？

「鏡 真。おまえ、CORE側の奴だろう」

にらんでいるその視線を真さんから離さずに低い声を発するエクストリーム。COREがなんのことなのかわからない一真は、細い目を見開いてどうしたものか迷ってるみたい。

「COREって、なんのことだい？」

「最初におかしいと思ったのは、光介の話をきいてみたときだ。それによると、おまえ、写真を撮りたいと言って光介たちから離れたそうじゃないか。その直後、ドーパントが現れた。他のケースも似ている。」

さらに前にさかのぼると、学校でドーパントが二体同時に出現したとき、おまえは正門近くにいたようだな。

そこに証拠がある。

さっき、………検索によると、はついで初志 一真という名前らしいが………そいつが探偵に説明していた写真があったな。あれによれば、写真の左下に棒が写っていたそうじゃないか。

あれはガイアメモリなんだろう？ 新聞部の人間その他には話していない情報だが、探偵とボクと光介、そしておまえは知っているはずだ。

写真の構図では、写真左は正門。つまり、そのときメモリをとばせたのは、おまえか、おまえの近くにいた奴しかいないということだ！

さらに、さっき言ったような不可解なことが続いているおまえこそ、一番疑われる者というわけさ」

びっと、右手の人差し指で真さんを指差すエクストリーム。だけど、今度は真さんが口を開いた。

「でもね、大道くん。それは誤解ってものだよ。僕はそんなこと知らないんだよ。僕はさっき暴走？ ということなのかな。とにかく、そうなってしまって、今僕はその『ガイアメモリ』にはえらい迷惑をかけさせられているんだ」

だけど、エクストリームはまだ落ち着いてる。エクストリームの

ことだから、何か証拠にぎってるのかな。

やっぱりそうみたいで、エクストリームはまた口を開いた。

「そう、そこが問題なんだよ。」

普通、ドーパントが暴走した場合、記憶が残るはずがない。残っても少しって程度だ。まあ、これは人間に限らず、全てに共通する暴走だろうが。

そして、暴走したドーパントは、通常より強い力を発揮する。当然だ。力を抑える知性を持たない上体なのだからな。

だが、さっき暴走していたTCエクスプロージョン・ドーパント・……おまえが変身していたドーパントは、異常なほど弱かった。爆発が花火なみに小さい上、実際爆発させたのは小さな写真一枚のみ。

本当のエクスプロージョンは、『爆発』を表すその名前どおり、大爆発を起こす能力が基本だ。しかし、さきほどのエクスプロージョンの能力はどうだ。CORE仕様な上、暴走までしていたのに、あの程度の力！

むしろ、ああいう爆発に押さえ込むほうが難しいんじゃないのか？

ここからわかるのは、さっきのエクスプロージョンは、意識を保っていた。この仮説ならば、ドーパントとして暴走していた記憶が残るのもうなずける。

さっきの戦闘中、エクスプロージョンには他とは違いベルトが装

着されていた」

ああそうだったわけ。僕もそれおかしいなって思った。

ってことは、さっきのベルトになにか秘密があるってことかな。

「さっきのベルトは、ボクが一度関わったことがあるから知っているのだが……ガイドライバーという代物だ。

あれは、メモリによる人間への負担を軽減するものだ。主に、メモリ流通組織の幹部が所持するもの。幹部に簡単に死なれると困るから。

こういったことから、おまえはCOREの幹部だ。違うか？」

そして、もう一度びつと真さんを指差す。今度はさっきよりも力強く。

エクストリーム……。

なんとか、真さんの弁護をしたいところだけど、こうまで証拠がそろってちゃあね……。一応僕に出来るのは、二つのこと。

「翔太郎さん、今のエクストリームの話、本当ですか？」

小さな声でひそつと翔太郎さんに質問。以前仮面ライダーWとしてこの街を守ってたなら、メモリ流通組織の幹部とも戦ったことがあるはず。

そう予想していたら、やっぱり翔太郎さんから即答で答えが返っ

てきた。

「ああ。確かに幹部はその『ガイドライバー』とかいうベルトを装着していた」

言った後、帽子を整える翔太郎さん。そうか……。といふことはあともう一つできることは。

「真さん、メモリは僕が持っています」

そうして、ポケットからエクスプローションメモリを出して、真さんに見せる。

「もし仮にあなたがCOREの幹部だったときには、逃げてもダメです。本当はCOREの人じゃないことを祈ってますが。」

逃げて、あなたの所有するメモリは僕の手にあります」

ゆっくりと、説得するように告げる。僕に出来ることは、真さんが何かする前に止めること。それくらいしかない。

「真さん、COREの人だったら、警察に……」

そこまで言ったら、

「ふ」

と真さんが笑い出した。

「なるほどね。それが言いたいのか。そうだね。ここまで証拠がそろってしまったら、僕がどう弁明したところで、無駄だ。大道くんの言うとおり。僕はCOREの幹部だ。間違いない」

笑いをこらえているような声で言う真さん。そんな、やっぱりそうだったなんて……。

なんだかわかってても、信じらんないよ。ついさっきまではまったく疑ってなかったのに、エクストリームが証拠をあげたら、一気に悪人ってことになったちゃった。

そうだったなら、なおさら止めないと。

「真さん、メモリはこちらに」

「なにを言ってるんだい。それは僕のメモリじゃない」

えっ。

僕がぴくつとあとずさる。それを見たあと、真さんは話を続ける。

「僕のメモリはこっち」

さっと、真さんは青いメモリを出した。Tの文字が書かれたTCガイアメモリ。メモリに対してななめに書かれてる。

カチ、とそのメモリのボタンを押すと、電子音声流れ出た。

『トリガー!』

「そして、僕が真に使うドライバーは、ガイドドライバーじゃない」
もう一つ、何かを出す真さん。それには、見覚えがあった。毎回、

僕が変身に使っているもの。

それは、真っ赤な、僕が使ってるドライバー、ロストドライバーだった。

「僕は、ドーパントではない。仮面ライダーさ」

シュル、とドライバーを腰に巻く真さん。かちりという、金具がくつつく音がすると同時に、TCトリীগメモリをドライバーのスロットに装填。

「こうなってしまったら、僕は君たちをこの場で倒す。変身」

『トリガー!!』

スロットを展開すると、青い光が真さんの体を包んだ。

「光介、ヤツは仮面ライダートリガーだ。まずいぞ!!」

手で光をさえぎりつつ、エクストリームが僕に向かって叫ぶ。そんな、こんなことになっちゃうなんて！

光が収まると、中から、青い装甲の仮面ライダーが現れた。

見た目は、青い仮面ライダージョーカー。ただ、胸にあるW模様のマークは、歯車がいっぱいあるみたいな物になってる。

真さんから見て左胸には、エクスマグナムの色違いのようにも見える、多分、名前をトリガーマグナム、という感じの漂うマグナムが装備されていた。

「そんな、真さん!？」

翔太郎さん、ときおり見せるハーフボイルドなあせった顔。

「すまないな。今君たちを倒す意外に方法はないんだ」

そして、胸のトリガーマグナムを構えて、僕に向けた。

くっ!!

僕が身構えたそのとき。

「コードネームトリガー。彼らは泳がせておいたほうが良いのではないですか？」

静かな、でも聞こえやすい声で、仮面ライダートリガーになった真さんに問いかける人がいた。低くも高くもない声だ。同じCOREの人なのか？ でも、その姿は、ドーパントの変身直後みたいに、光っててよく見えない。

「なぜだい」

「彼らは、多くのガイアメモリを所持しています。他に仮面ライダーの仲間がいるとすれば、タイプコア以外のガイアメモリを集めてくれるでしょう。さらに」

真さんは、トリガーマグナムを下げると、しぶしぶといった口調でつぶやいた。

「仮面ライダーオーズか」

「そうです。彼がこの仮面ライダーたちに近づいてくる可能性も否定できない。泳がせておけば、メダルというとてもいい研究材料がCOREに流れ込むでしょう」

「そうだね」

ふ、と息を吐く真さん。どうやら、僕たちを攻撃するっていう話ではなくなったみたいだ。

「納得したのであれば、私がCOREまで送り届けます」

「わかったよ、サイクロン。そろそろ、写真家としての活動も終わらせようと思ってたところだ。最後に、広くんに言っておこう」

ふいに、僕のほうを向く真さん。さっきのサイクロンは、使うメモリのことかな。でも、そんなことには構ってられない。今から真さんが僕に何か言おうとしてるんだ。

「君が、僕と戦えるのかどうかは、もうすぐ戦うことになる僕の部下を倒せるかどうかだ。まあ、その男に僕が加勢にやってきて、それで戦うというケースもありうるけど。」

そしてもう一つ。僕は、簡単には倒せないよ」

「伝えるべきことは伝えましたね。では行きましょう」

すると、バツと、エクストリームの変身時のような緑の風が吹く。

「うわっ」

風の強さに一度目を閉じ、もう一度目を開くと、そこには真さんはいなかった・・・。

第十七話 Pの手がかり／真さんは（後書き）

TC待機室、今回も更新がないです。

忙しい他に、みんながあまり動かない（動かしてもらえない）ことが原因です……。

早く光介に家に帰ってもらわないと、メモリの場所に変動がないんです。それに、人間じゃないから、やれることが限られてて、トクくらいしか出来ないんです。

別の連載ですが、一緒に読む外伝なので、ここで話しておきます。

以上、k. iでした。

第十八話 Fのフォーム／始まった戦い（前書き）

ーカウント・ザ・メモリズー

エクストリーム・・・極限の記憶

マスカレイド・・・仮面舞踏会の記憶

マネー・・・お金の記憶

オーシャン・・・大洋の記憶

ユニコーン・・・一角獣の記憶

エクスプロージョン・爆発の記憶

第十八話 Fのフォーム／始まった戦い

少し時間がたち、アパート ツイン。

みんなには、この旨を話さなかった。言っちゃうと、僕が仮面ライダーであることについて多少なりとも触れてしまう結果になってしまうから、『真さんがドーパントにされてしまってそれを仮面ライダーが助けてくれた。その後真さんは帰った』くらいのことだけ言っておいた。

「ねえ、エクストリーム」

昼食である醤油がゆを食べているエクストリームに、僕は言った。僕はもうすでに食べ終えて、たった一つの窓から差し込む光に当たっている。エクストリームはズズズとおかゆをかきこんだ後、

「なんだ。仮面ライダートリガーに関する何か?」

と返した。

「うん。別にもう過ぎちゃったことなんだけど、どうしたらいいのかな」

「ヤツはCOREの人間だ。あまり親近感をかせないほうがいい」

そして、またおかゆを食べ始める。

「そうだけど、真さんが言ってた、僕がもうすぐ戦うことになる真さんの部下について調べとかないといけないんじゃないかなあって」

「なるほどな。それは一理ある。鏡 真にはその部下と戦うか倒す

かすれば会える可能性はあるしな。検索してみよう」

カン、とおかゆが入っていたお茶碗をテーブルにのせ、さっと立つエクストリーム。そして目を閉じると、エクストリームのまぶたには、本棚が広がっているんだろう。

「で、キーワードは？」

エクストリームが僕に問う。僕は、少しうなる。ライト先輩と一緒に行ったときは、結局検索のキーワードは探し出せなかったから。仮面ライダージョーカー、左 翔太郎さんに会えたのは良かったけど。

今まであったことの中から、キーワードになりそうなものを探してみる。案外すぐに一つ目は思い出せた。そうだ、あれだ。

「ノットベリー」

エクストリームはそれに対する答えを返さない。ということは、検索は順調に進んでいるみたいだ。良かった。ただものじゃないキーワード集めの人、ライト先輩には劣ってるから、出来るだけ適切なものを探さないといけないし。

「ジェラシー」

「一般人」

ごくろ、とつばを飲み込む。連続でキーワードを出してみたけど、あと思いつくのって何もない。

「光介、次のキーワードはまだか。まだ数棚本が残ってる」

「待って。なんかある気がするんだけど、頭に浮かばないんだ」

こめかみを押さえてうなり続ける。エクストリームはしびれを切らしたようにつぶやいた。

「早くしてくれ。こうしてる間にも、誰かがメモリの犠牲になる。今回はメモリの数が多いんだよ」

うん・・・・・・・・。

でも、中々思いつかないよ。風都緑公園では二回くらいドーパンに会ってるけど、それは僕たち仮面ライダーがいたからなんだ。

エクストリームの言うとおり、早くしないといけない。こうしてる間にもたくさんのメモリが・・・・・・・・。尋常じゃないくらいたくさんメモリが作り出されているんだ。

ん？

そういや、どうしてこんなに今回はメモリが多いんだろう。翔太郎さんもジョーカー・ドーパントにされ、刑事さんや幼稚園の子供までノットベリージェシー・ドーパントにされてる。一般の人もたくさん。だから僕はたくさんのTCメモリを持ってるわけで。

いつになく考えまくってる僕の額を汗が流れる。うん、ここから何かいいキーワードが出る。

たくさん・・・・・・・・。たくさん作る・・・・・・・・製造・・・・・・・・

僕たちの使うロストドライバーは、数少ない……。という
ことは、こんなにたくさんあるってことは。

量産？

そう考えた瞬間、僕の頭の中で何かがびびびっとスパークした。

「エクストリーム、キーワード追加だ。『メモリ量産』」

そういうと、エクストリームの肩がぴくりと動く。そして、ふつと笑った。多分、本が一つに特定されたんだろう。そりゃそうだ。ここまでやると、メモリ関係の情報しか出てこないはずだから。

「よし」

エクストリームはそのまま、空気をつかむようにしてイメージ上の本を手にとった。そして開くような動作をして内容を読み上げる。

「COREはガイアメモリを大量生産して風都に送り込む作戦に出てるんだな。そこで生産されるものは二種類。ノットベリーメモリとTCメモリだ。TCメモリは仮面ライダートリガー……鏡真がトリガーメモリで形成される銃、トリガーマグナムで一般人に打ち込み、暴走させる。COREの人間は、ロストドライバーを持っているか、メモリを差し込むために挿入コネクタ手術をしているために暴走は起こらず、普通どおりの能力を持っている。」

そしてノットベリーメモリは、今のところジェラシーメモリのみを媒体として作っており、マスカレイドに変わる戦闘員になりうるかどうか力を抑えて研究しているそうだ。最終的なところはこれも一般人に直挿しするして暴走、手駒として使う結果となりそうだが。

そして、メモリ量産工場は今のところ一つ。実験的に作った物で、結構粗末なものだけだな。

そこはFUTO工場がかつてあった場所、今は違うが、廃屋となっている場所。FUTO工場跡を主に利用しているな。ちなみにそこは最近若者の溜まり場となってるらしく、奴らは『EXE^{エクゼ}』と名乗っている。ここらへんはあまり今回のことと関係のないことだが、要はそこには人がたくさんいるってことだ。すぐに行かないとまずい」

そっか。

じゃあ、すぐに行こう！

「待て。あまり音を立てるんじゃないぞ。となりの部屋は部長の部屋。感づかれるとまずい。近くに初志 一真もいるようだからな」

ああ、そうだったけね。確かに、一真に見つかるといろいろ厄介かも。

そう思いとどまった僕は、そろりそろり、抜き足差し足忍び足ですーっとアパート ツインを離れた。今回はライト先輩は呼ばずに、二人だけで行ったほうが安全かもしれない。何しろメモリがいっぱいある場所だし。

そんなわけで、僕たちは二人だけでFUTO工場跡に向かった。

まず、いつもの土手を通って、翔太郎さんの探偵事務所まで行くことにした。さすがに仮面ライダーの助けは必要だからね。

「あっ、光介、あれを見ろ」

土手を通りきったところで、エクストリームがここからそう遠くない場所を指差す。どうしたの？

見ると、金銀宝石店が営・業・中・・・・・・・・。

うそっ！？　だってCOREの人でしょ？　あまり地位が高そう
な人じゃなかったけど、ショウタロウ先輩を脅迫してお金奪った人
なんだよ？

「どうやら、COREの奴ら、金銀　銅鉄のCOREに関する記憶
を抹消したようだ。なるほど、嘘発見器とか言う代物にもわから
なかったのは、メモリの能力が何かで記憶が消されていたからか。
そして、記憶が消されれば、脅迫したという事実しか残らない。し
たがって、罪も軽くなる。あれほどの金を持っていた銅鉄だ、金に
よって懲役刑を逃れたんだろう」

へ、へえ・・・・・・・・。COREの人たちにも、こういう能力
がある人っているんだ。

あ、そういえば。

「エクストリーム」

「なんだ？」

問いかけると、エクストリームの首がこちらに向けられる。

「エクストリームって、何歳なの？　この前、翔太郎さんに敬語使わなかったときに言ってたけど」

「ああ、そのことか。実のところ、ボクにも正確な年齢はわからない。少し推定になってしまいが、いいか？」

いいよ、別に。長生きの人って、結構自分の年齢忘れそうだし。でも推定になるってことは、相当の年齢なんだな。

「四十六億歳だ」

.....。

僕は無言になった。いや、それどころか、心の中でも何も言えない。ええと、四十六億歳って、地球と同じなんだね。おどろき・ものき・さんしょの木！！

「まあ、どうしてこの年齢かについては、今はまだ言及するべきときではないがな」

わかったよ。

とんでもなくすごい年齢なのはわかった。よくわかった。

でも、地球と大体同い年って信じられないな。まあ、エクストリームはガイアメモリなのいろいろ出来るくらいだから、このくらいの年齢はありえちゃうけど。

それきり、僕たちは何もしゃべらなくなった。銅鉄さんにも会ったときだったけど、今はそれよりもFUTO工場跡に行かなくちゃ。

そして、鳴海探偵事務所に到着。翔太郎さんは事務所の中にいるみたいで、前が黒、後ろが緑のあのバイクは、ビリヤード場の前にきちんと置いてある。

「行くぞ、光介」

「わかった」

入って、少し暗い探偵事務所の入り口に立ったとき、足元に何か緑色のものがキラツと光った。拾ってみると、ガイアメモリ！それも、端子が緑色のTCメモリだった。紋章は、Sが、気流が巻き上がるように描かれている。横向きに書いてあるメモリ名を見ると、『stream』……気流の記憶を有するストリームメモリだ。

「エクストリーム、こんなところにガイアメモリが！」

「ほう、奇遇だな。使えるかもしれないから持っとけ」

言われたとおり、ストリームメモリをポケットに突っ込んで、ガチャリとドアを開ける。

「翔太郎さん、いますかー？」

入ってみると、やっぱり、翔太郎さんは置くにある黒いデスクとイスのところにいて、イスに座ってた。

「おう、光介、どうした」

いつの間にか『光介』って呼ばれるようになったのか。ってそれは置いといて。

僕ではなくエクストリームが翔太郎さんの問いに答えてくれた。

「左 翔太郎、一連の多量のメモリ事件は、COREによるメモリ量産が原因だ。今からそれが行われているFUTO工場跡に来てくれないか」

なに、と叫んで、イスからガタツと立ち上がる翔太郎さん。

「わかった、すぐ行く！」

そして、翔太郎さんは僕たちを追い抜きそうな勢いでビリヤード場前に出て、バイクに飛び乗った。と、そこまで言ったとき、

「あ、そういえばおめえら、バイクなかったっけ。年齢的にもダメだし」

と言った。

確かに、僕中学生だった。こんなんでもよく仮面ライダーが成立してたな、と今になって感じる。だけど、エクストリームは冷静な表情をくずさず、

「大丈夫だ、行け。ボクたちはボクたちでどうにかする方法がある」

あ、そっか。そこらへんに自転車かなんかあれば、データーリユージョンでバイクに早変わり！ だったね。

「そうか、わかった。じゃ、必ず追いつけよ！」

ブルルン……。

ちよつと空フカシした後、翔太郎さんのバイクは走り去ってった。

「あ、そうだ」

エクストリームが唐突に口を開いた。

「どうしたの？」

「あのバイク、色が半分な上、乗ってるのが単なるハーフボイルドだから、あれの名前は『ハーフボイルダー』でいいんじゃないかな」

……それはあまり名付けたくない名前な気がする。

「とにかく、あそこのゴミ捨て場に捨てられてる自転車もらってこよう」

少しFUTO工場跡に近いほうにあるゴミ捨て場の自転車を指差すと、エクストリームはうむ、とうなずいた。

「じゃあ、これから使うバイクはあれに統一するか。生身のままでデータリユージョンを存続させるようにしよう」

え、そんなことできるの？

「当たり前だ」

ふう、と息を吐いて、さっきまであった体をデータ化し、その分

を自転車に与えた。すると、自転車はこの前使った黒くて横から見ると前側に赤く『X』ってなってるバイクに変化した。

でも、エクストリームの体、大丈夫なのかな。

そう思っていると、察したようにエクストリームは言った。

「問題ない。今は臨時だが、いずれボクの人間体も元に戻るさ」

「そっか。じゃ、遠慮なく」

僕は、バイクに乗った。見た目はバイクだけど、中身はバイクだから、問題ない……よね？

「そんじゃ、エクスポイルダーに乗って出発だ!!」

「その名前やめろ」

いいじゃん別に。

エクストリームは空から、僕は地から、FUTO工場跡に向けて出発。

「おう、光介」

工場前道路。赤茶けた工場の前で、先に来て待ってたらしい翔太郎さんが、バイクに乗って待っていた。後ろには、たくさんの若者たち。そこまで不良な雰囲気は漂ってこない。髪も染めずに黒々

として健康的、まだまだ若い、って思う。中学生の僕が言うことじゃないけど。

「こいつらは、さっき工場にいたから出しといたぜ」

僕よりも年上の、二十歳くらいの人たちをあごでしゃくる翔太郎さん。そっか。一時はすごく心配したけど、大丈夫みたい。

「そんじゃ、これから工場内に行くか」

エクストリームが仕切る。その前に、翔太郎さんが、僕の、バイクに乗っかってる下半身に目を向けた。

「おめえ、中学生なのにバイクに乗ってんのか？」

「いえ、これは、エクストリームのマキシマムで作り出した幻影、ってな感じです。高速移動に役立ちます。といっても本体はただの捨てられた自転車ですけど」

僕が説明すると、へえ、というような顔をして、

「そうか……なんか俺のハードボイルダーに似てるな」とつぶやいた。

エクストリーム……『ハーフボイルダー』っていうネーミング、意外にオツケーだったみたいだよ。

とまあそれは置いておいて、僕たちは工場にいた人たちを残し、入っていった。

カッ、カッ、カッ、カッ……。

工場に入ると、靴の音がよく響く。あたりを見回すと、なるほど、作業機械に見せかけてメモリがいっぱい。実際にメモリを作ってるのはこの建物じゃなさそうだけど、『EXE』って言ってたあの人たちがメモリを知っちゃったらあとから厄介かもね。

「光介、静かにしろ。靴の音が四重だ」

エクストリームが僕の行く先をさえぎる。四重ってことは、僕たちの他に誰かが来てるってこと。

「まさか、真さんの部下・・・・・・・・？」

「そのまさかだよ」

機械のかげから、若い、まださっきいた人たちと変わらない人が姿を現した。その人の言葉を信じるとすると、あの人がジェラシー・ドーパント？

その疑問に答えるかのように、その人はTCガイアメモリを出し、ボタンをカチッと押した。

『ジェラシー！』

工場の中で、電子音声が反響して僕の耳に響く。そうか、この人が今回の事件の犯人か。

「さあ、始めようか。俺にとってもおまえら、仮面ライダーは邪魔だ。この先俺が幸福になるために、やられてもらおうぜ」

「幸福、とは？」

メモリを首に差し込もうとする前に、エクストリームがずいとい前に出た。

「あー。説明が必要か？　じゃしてやろう。俺ははっきり言って、さっきいたEXEの仲間だ。下っ端のな。」

奴らは、何かにつけて俺を精神的に攻撃してきた。おかげで、いろいろと不幸なことに陥った！！　アイツらのせいだ。

だが、奴らを裏切るには勇気がいる。仲間から離れるか、このまま我慢していくか。俺はそのほまで悩み続けた。そんなとき、俺を仲間にしてくれる新しい組織が現れた。COREだ。あの超有名なカメラマンに誘われて、俺はそこに入った」

そうか、真さんが風都でCOREの仕事をするときに、部下としてこの人をやとったんだ、きっと。

「あそこはいいところだったぜ。前みたいに仲間はずれにしたり攻撃してきたりはしない。俺はただ、この工場を守ってりゃいいんだからな。ちなみにこの工場も、俺がCOREに提供したものだ。」

COREから、秘密の内容は公表しないよう言われてるが、俺がここに入った理由くらい言ってもいいだろう。

じゃ、やってやるぜえ！！」

だあつ、と叫びながら、首にジェラシーメモリを挿す。するとあつというまに、ピエロが大鎌を右手に構えてる、『TCジェラシー・

ドーパント』に変化した。

戦うしかない。僕は頭の中で、そう思った。とにかく、この人だって、銅鉄さんみたいに、倒せば記憶が消えて、普通の人に戻る。そう考えると、自然に力が入った。

シュツ。ロストドライバーが僕の腰に装着される。

「行くぞ、光介」

エクストリームも僕の考えを感じたのか、すぐに自分の体をロストドライバーにセットする。気が付くと、翔太郎さんもロストドライバーを装着、ジョーカーメモリを構えていた。

『ジョーカー!』

ガシ、と端子をドライバーのスロットに装着すると、翔太郎さんはスロットを展開。僕たちも同時にそれを行った。

「「『変身!』」」

二つの風が巻き起こり、仮面ライダーエクストリームと仮面ライダージョーカーが姿を現した。

第十九話 Fのフォーム／超最強のサイクロンな力（前書き）

ーカウント・ザ・メモリズー

エクストリーム・・・極限の記憶

マスカレイド・・・仮面舞踏会の記憶

マネー・・・お金の記憶

オーシャン・・・大洋の記憶

ユニコーン・・・一角獣の記憶

エクスプロージョン・爆発の記憶

ストリーム・・・気流の記憶

k. i 「今回、新フォームが登場するぞ！」

光介「メモリ量産編は、今回で最後だぞ！」

エクストリーム「何故そんなにいろいろ急ぐ」

k. i 「もし将来コラボとかやったら、負けちゃうだろ!？」

光介「そうだそうだ!　せめて互角にしくちゃって作者は思ったんだ!」

とにかく。

新ライダー出したい。

新フォーム出したい。

これが今の僕の願いだったんです！

第十九話 Fのフォーム／超最強のサイクロンな力

風の中から、二人の仮面ライダーが姿を現した。黒く、目が赤いジョーカーと、同じく目は赤く、ジョーカーの間に緑クリアが割って入ったようなエクストリーム。二人いるこっちのほうが数的には圧倒してるな。だったら、この前の中学校での戦いみたいなマキシム戦法じゃなく、素手で充分いけると思う。

だから今は。

「行きますよ、翔太郎さん！」

声を上げて、僕が走り出すと、それに応えて、翔太郎さんも、

「おう！」

と受けて、黒光りするジョーカーの体を走らせた。赤茶けてさびた工場内に、二つの足音が強く鳴り響く。

「ふふふ………」

ところが、TCジェラシーは、何か余裕の笑い声。あまりにも余裕過ぎて、逆に不気味さを感じちゃうくらい。何か作戦があるのかな。でも、今はとにかく攻撃だ！

「そりゃああああっ！」

出来る限り体重を乗せて、重いパンチを放つ。もちろん、手首にあるX字のアンクレットでパンチ力は並の人間以上にはなってる。けど、それがいけなかった。

「トリガー」

T C ジェラシーが何か言った。すると突然、走りこむお腹に衝撃が。僕はシュッと吹っ飛んで、後ろのドラム缶に直撃する。ちらと見ると、翔太郎さんもいつの間にか動きを止めていた。

痛いな、もう！

『光介、あれをみる』

エクストリームが指示した方向を見ると、そこには、ついさっき会ったばかりの仮面ライダートリガー、真さんがいる。

ふう、と息を吐くと、

「まったく、どうやってこんな早く調べたのか。息つく暇もないとはこのことだ。仮面ライダーの情報収集能力が気になるよ」と手をやれやれというふうに振って見せた。

それはエクストリームが……、っていうのは言えないな。口が開きかけて、慌てて閉じる。

あつと、とにかくCOREの幹部っぽい真さんに会ったことは、早くどちらか倒さないとまずい。しょうがないから、ここはマキシマムを。

僕はT Cユニコーンメモリを出し、右腰の黒いマキシマムスロットにセット。

「む」

動きを察知したのか、TCジェラシーがカマを構える。

『ユニコーン！ マキシマムドライブ！！』

その音と同時に、右手に緑色のエネルギーがたまってゆく。ユニコーンメモリって黄緑色だから、エネルギーも黄緑色なのか。

「よっし！」

このエネルギーなら、例えトリガーの装甲が硬かったとしても、突き破れる！

「だっ！」

今度はもっと力をこめて、突っ込む感じで走りこみ、こぶしを突き出す。

ところが、今回は真さんは少し後ろへ下がっただけで避けた。距離的にそのくらいで大丈夫だったけど。

そのせいで、僕は真さんの眼前で体をびたりと止めた。

「・・・・・・・・」

無言になる。刹那、っていうのはこういう状況を言うのかな。背後にいるはずの翔太郎さんにも動きはない。

十秒ほどして、エクストリームが最初に口を開いた。

『何のつもりだ、鏡 真』

すると、真さんは無言のまま懷から四本のガイアメモリを出した。

「なに、ここへ来た用事は、主にこれさ」

な、なに？ 真さんは落ち着きはらって、メモリのスイッチを順に押していく。

『ネオ！』

『コール！』

『ファング！』

『ジョーカー！』

えっと、ネオは『新たな』、コールは『召喚』、ファングは『牙』、ジョーカーは『切札』だっけか。それにしてもジョーカー需要多いな。

そう思って見ていたら、真さんは四本のTCメモリを放る。空中を舞ったメモリは。

パキン！！

かんだかい音をたてて飛び散った。それぞれのメモリの破片が目に見える。け、結局何がしたかったんだろう？

『光介、油断するな。どうなるかわかったものじゃない』

おっと、そうだね。メモリの名前だけ見ると、『新たな牙、切札を召喚』な意味になりそうだ。だったら、何か起こるというのが普通の考え。

だけど、全然何も起こらず。本当にどうする気だろうか？

警戒する僕たちを無視してふ、と短く息をすると、真さんは、

「これで、僕の役割は終わり。あとは、ジェラシーくんに援軍をあげるだけ」

どうぞ、という感じに手をあげると、僕たちの死角からマスカレイドが二体入ってくる。どうする気？

「彼らが、君を助けてくれるよ」

それに答えるように、マスカレイドたちは一人一本ずつメモリを持ち、スイッチをカチリ。

『ストーム！』

『サンダー！』

手首にTCメモリを差込み、ストーム・ドーパントとサンダー・ドーパントが僕たちの前に立つ。ストーム・ドーパントは粘土が風で吹き飛ばされたみたいに後ろに体の突起がなびいてる。サンダーは金色の、雷を模したような黄色の突起が。

「この二体は特別強いガイアメモリを使用している。君たちを倒すのにはもってこいだ。まあ、倒せなくても泳がせるという本来の計

画通りだけどね」

身を翻し、真さんは二人のTCドーパントと入れ違いに僕たちの死角に消えた。

「光介、とにかく今はアイツよりも、こいつらをどうにかするぞ」

翔太郎さんが三体のドーパントに向かってくつと身を低くする。

『そうだ、光介。この人数だと、ガイアメモリの大量使用が必要とされる。覚悟しとけよ』

そして僕たちも構えた。結局メモリ戦法になっちゃうのね。仕方ない。

『光介、砂と水を合わせて硬め、動きを止めろ』

エクストリームが作戦を教える。

オッケー、今やるよ。

僕はTCユニコーンメモリを引き抜き、代わりにTCエクスプロージョンメモリを。

『エクスプロージョン！ マキシマムドライブ！！』

えいっ！

手を振り上げると、目的の場所、ドーパントたちの頭上で爆発が起こり、砂風が吹いて、視界がなくなる。そこがチャンス！

さらにメモリを引き抜き、TCオーションを挿す。

『オーシャン！ マキシマムドライブ！！』

そして、液状化。

「『オーシャン・イズ・ウォーター！！』」

もうもうとほこりが立っていて周りが見えていないドーパントの周りを取り囲む。

そう。水と砂は、合わせると粘土みたいに硬くなる。今回は自身自身が水だけど、動きを止めるのには適してる。

「グオッ！」

「チィッ！」

叫ぶ声と、舌打ちが耳に入る。拘束だけじゃなく、締め付けてるからだ。

『光介、固体に戻れ』

うん。砂が混ざりすぎるといけないもんね。

そして固体に戻る。

「ぺっぺ、砂が口に入ったよ」

『光介、面白いこと言ってる最中に悪いが、ダメージがうまく与えられた。次のマキシマムをやるぞ。相手は強い能力ばかりだ。先手を打つ』

おう、行くよ！

「ハッ！」

走り出す前に、TCストームが手のひらを向ける。すると、嵐が僕に直撃。

「光介！」

心配そうに叫ぶ翔太郎さんの声が聞こえるのが速いか遅いかというスピードで、地面に叩きつけられる。

『光介、いかん！ 調子が乱れ始めた！』

「フン！！」

今度はTCサンダー。僕の頭上に閃光がキラリと見える。

次の瞬間、ズバッ！ それは僕に降り注いだ。

「おわっ！」

腹に穴が開く直前で、何とかかわし、立ち上がる。でも、さっきの嵐で、まだ立ちくらみがした。

「光介！」

翔太郎さんは僕を援護するためにドライバーに装備されたマキシ
ママスロットに緑の『R』のメモリを差し込む。

『ロケット！ マキシママドライブ！！』

翔太郎さんの右手に大きな緑のロケットが現れる。

「だっ！」

地を蹴り上げ、空に飛んでTCサンダーを狙う。

「・・・・・・・・」

TCサンダーは無言のまま、手を上に上げる。あ、まずい。雷が！

そう思ったときにはすでに遅く、翔太郎さんに雷が直撃していた。
ジョーカーの装甲やロケット装備もあってか、死ぬほどではなさそ
うだけど。

「うわあああああああ！」

翔太郎さんは絶叫、地に伏す。

「翔太郎さん！」

『光介、どうする？ こいつら、強すぎる』

そうだ。このままじゃ、TCジェラシーまで届かずに終わり。い
つもは作戦を立てるサイドのエクストリームも僕に相談してる。

あ。

「・・・・・・・・ツインマキシمام」

『おい光介、今なんていった』

「ツインマキシمامなら、この状況を何とかできる」

僕はちらと翔太郎さんのほうを見る。翔太郎さんはさっきの落雷で気を失ってるのか、全然動かない。

『やめろ。ただじゃすまない』

「でも、この状況でもただじゃすまないよ」

今やらないと、ツインマキシمام以上に大変なことになっちゃうよ。

『やめろ！ 浅はかな考えはよせ！』

いや、ツインじゃ勝てない。全部で勝負する。

「エクスピッカー」

エクストリームの声を聞かず、僕は緑クリアの部分からエクスピッカーを召喚、背中に装備する。

『やめろと言ってるだろ！ おまえじゃ耐え切れない』

「エクストリーム、やらなきゃわからない。とにかく今は、・・・
・・・これしかない！」

事実、この三体を倒すにはこれしかないんだ！

エクスビッカーの右端から、だんだんとメモリを装填していく。

『マスカレイド！ マキシマムドライブ！！』

『マナー！ マキシマムドライブ！！』

『オーシャン！ マキシマムドライブ！！』

『ユニコーン！ マキシマムドライブ！！』

『エクスプロージョン！ マキシマムドライブ！！』

『ストリーム！ マキシマムドライブ！！』

「六本オール装填！」

「何！？」

二体のドーパントの後ろに立ってるTCジェラシーが驚きの声を上げる。

「うおおお・・・」

力を溜めるように腰をかめる。体全体を小さな緑のオーラが包みこむ。

『バカな、光介、おまえ何故耐え切れる？』

人間、やるときはやるもんさ！

「食らえ、緑のハイパー球！　エクスネバーエンド！」

手を向けると、体に溜まったエネルギーが球になって一気に放出された。

いってえー、手がビリビリする。感電って、こういうのを言うのかな。とにかく、緑の球は二体のドーパントに直撃した。

再び起こった砂ぼこりが晴れると、中から二人の男と、黄色と緑のTCメモリが現れる。僕はすばやくそれらを回収し、

「エクスビッカー！」

エクスビッカーを緑クリアの部分、クリスタルサーバーに取り込む。

『ツイン以上のマキシマムに耐え切れるとは、一体なんで……
・？』

エクストリーム、そんなこと考えずに、次の相手だよ。

「ジェラシー、あなたの負けは決まりました！」

びっと右手人差し指をTCジェラシーに向ける。それを見たジェラシーは大鎌を少し動かした。

「あなたは僕には勝てない。決まりです！」

「どうかな？」

くつくつく、と不気味な笑みを見せるTCジェラシー。まだ何か余裕がある策でもあるというのかな。

「おまえらは、俺のメモリの能力を知らない。俺のメモリは、『ジェラシー』……嫉妬だ。世間に嫉妬した俺の心が、このメモリと共鳴してるんだ」

嫉妬。

ずいぶんと欲望チックなメモリだ。だけど、欲望チックなら、限りがないのが理^{ことわり}。だとすると、確かに使う人間によって強さは変わるのだろう。ましてや、あの人はそういう心が強そうだ。

でも、翔太郎さんが気絶しちゃってる今、頼れるのは自分のみ。

だったら、いくよ、エクストリーム！！

お互いに走ってきて、こぶしをぶつけ合う。二発、三発と、どんどんぶつけ合う。ときどき蹴り技も交える。

「COREも認めた俺の嫉妬の力、見せ付けてやる！」

カマを振り上げ、僕の首を狙う。

ああっ！

僕は吹っ飛ばされる。とにかくキツイ状況になった。ストームの立ちくらみに続き、首の傷まで追加なんて。

『光介』

ふいに、エクストリームが話しかけてきた。

「なに？」

『ストリームとストームがそろっただろう』

僕は二本の緑のメモリ、どちらもSがかかれてる、ストリームとストームを見る。確かに、二本ある。でも、そろってるって？

『六本同時マキシマムが出来たおまえだ。ボクにだけある能力、使いこなせるかもしれない。詳しい説明はあとでする。まずは使ってみろ。エクストリームメモリとかけあわせるんだ』

うん。よくわからないけど、信頼してくれてるみたいだし、やってみるよ。

「何する気だ？」

「『エクスソード！』」

右手にエクスソードががしりとつかまれる。

僕はTCストリームメモリをセット。

『ストリーム！ マキシマムドライブ！！』

次に、右腰にTCストーム。

『ストーム！ マキシマムドライブ！！』

最後に、ベルトのエクストリーム。一度閉じて、もう一度展開する。

『エクストリーム！ マキシマムドライブ！！』

「変身！！」

ロストドライバーから、新しい音声 flowed。

『ストリーム！ ストーム！！ エクストリーム！！！！』

「くっ！」

緑の嵐が、僕を中心に巻き起こる。それを、TCジェラシーはどうにか耐え切った。

ゴゴゴゴゴゴ・・・・・・。

翔太郎さんの体が工場跡のすみまでやられた。そこまでの風なんだ。

嵐が晴れると、目がよく見えた。ジェラシーの目に反射する自分の姿まで、まるで鏡で見ているかのようによくわかる。

その姿は、今までとは違っている。

さっきのTCストーム・ドーパントみたいに、今までの体が、後ろになびくように流線型に変化している。ウインディスタビライザーは今までの通り装備されている。目の色は今までと変わらず赤。クリスタルサーバーは、最初の変身の時みたいに白クリアの色を取り戻してた。黒かった部分は緑に。肩とかのマークは変わらない。

『仮面ライダーエクストリーム・風神だ。今までにないポテンシャルを秘めている。使ってみろ』

う、うん。わかった。

相手にパーを向けて、グーに変える動作をとる。

「なにっ!？」

TCジェラシーがうめく。緑のエネルギーが、TCジェラシーを締め付けていた。これが、ストリーム、『気流』の能力。

パーに変えると、解放されたTCジェラシーは力がぬけて地面に倒れこむ。

「この、やろっ・・・・・・・・」

いてっ。体に電撃みたいな痛みが走った。

『まずいな。さっきまでのダメージがあるか。じゃあ、エクストリームを展開しろ。今回の戦いは早く終わらせたほうが良さそうだ』

言われたとおり、エクストリームメモリを閉じ、再展開。

『エクストリーム！ マキシマムドライブ！！』

嵐が再び僕の周りを取り囲む。嵐が僕を吹き上げ、必殺技の体勢が取れるようになった。

「『風神ストーム！！』」

両足蹴りをジェラシーにおみまいすると、強烈な爆発が起こり、ぱし、とTCジェラシーメモリが僕にキャッチされた。

ふうー・・・と、風が地面にゆっくりと僕たちを下ろすと、一気に変身解除。あ、あれ？　なんで・・・・・・・・・・。

同時に、地面にどしっ！　っと倒れる。

「やはり、この組み合わせ、六本マキシマム以上だったか」

人間態のエクストリームが僕の真上に立つ。え、組み合わせ・・・・・・・・？

「詳しいことはあとで話すと言ったろ。今、両崎 纏を呼ぶ。今回ライトを連れてこなかったのは正解だった」

そ、そうだ、ね・・・・・・・・・・。

エクストリームがかけていった。

その直後。

「アオーン!!」

という、犬か狼の遠吠えみたいなものが。

や、やべ。狂犬かも。

エクストリーム、早く頼む・・・・・。

レギュラー登場人物（前書き）

k. iです！

今回、新聞部もでて、周りを取り囲む仲間ポジションが確立したので、今回は、レギュラーとなる基本的な登場人物を出します。ただし、あと一人出る予定ですがね。

では、どうぞ！ 簡単な紹介ですが、よろしくお願いします！！

レギュラー登場人物

ひろがるこうすけ
広 光介

大道という名の教師と共にCOREの者に襲われ、最後に大道から託されたロストドライバーと、突然飛来したエクストリームメモリで仮面ライダーエクストリームに変身する。好きなものはバターライス。中学一年生。

顔は横長で童顔。微妙に茶髪。かっこいいというよりはかわいい。見た目は『仮面ライダー電王』の桜井侑斗。

だいたい
大道

下の名前は不明。光介と共にCOREの者に襲われ、最後に光介にロストドライバーを授けた後に死亡。人間関係など、詳しいことはわかっていない。

中年で、頬にシワが入っている。見た目は大道 克己。

エクストリーム

エクストリームメモリが人間態のデータ体を持った状態。メモリ形態であるライブモードのときでもしゃべることは出来る。好きなものはおかゆ。

口が少し大きい。髪型は『仮面ライダーオーズ』のアंकに似ているが、黒色。顔もまたアंकに似ている。

新聞部部長である勇香に勧誘された際、大道の苗字をとって、『大道 極』と名乗った。データ体の年齢は光介と合わせるようにして中学一年生。

仮面ライダーエクストリーム

エクストリームと光介が二人で変身する仮面ライダー。初変身時に力を使いすぎたため、エクストリームは自分の体をデータ体の中に保存する必要がある出てきて、形態はクリスタルサーバーが本来の色である白クリアから緑クリアに変わった。

仮面ライダーエクストリーム・風神 ふうじん

エクストリームのメモリのポテンシャルを生かし、ストリームとストームを使った形態。何故このようなことになるのかは今はまだ明かされていない。

両崎 りょうまき ライト

中学二年生。情報屋としての能力があり、その能力はエクストリームが「ただものではない」と言ったほど。

見た目はフィリップ。

初志 はつし 一真 かずま

中学一年生。新聞部。目が細い。仮面ライダーになんらかのうらみがあるらしい。光介らと同じくアパート ツインに住んでいる。

柱 はしら 友 ゆう

中学一年生。新聞部。超友好的。見た目は『仮面ライダー響鬼』の明日夢。新聞部の中では一人だけアパート ツインに住んでいない。ただし、新聞部の顧問は父親の支 きぬえ。

剛 たけし 勇香 ゆうか

中学一年生。新聞部。剛力な人。単純なツツコミで光介は死にそうな気分になった。

レギュラー登場人物（後書き）

光介からのいい忘れ。

光介「小説版MOVIE大戦もよろしく！
参加していただけの方
は、感想かメッセージでお知らせ下さい！」

第二十話 Sで感電／病み上がりでいきなりバトル（前書き）

ーカウント・ザ・メモリーズー
エクストリーム・・・極限の記憶
マスカレイド・・・仮面舞踏会の記憶
マネー・・・お金の記憶
オーシャン・・・大洋の記憶
ユニコーン・・・一角獣の記憶
エクスプロージョン・爆発の記憶
ストリーム・・・気流の記憶
ストーム・・・嵐の記憶
サンダー・・・雷の記憶
ジェラシー・・・嫉妬の記憶

第二十話 Sで感電／病み上がりでいきなりバトル

どうも皆さん、ご迷惑おかけしました。今起きました。

「まったくだよ。僕を置いて、そんなとこまで行くなんて……」

アパート ツイン。もうあの戦いは遠い日となり、三日三晩寝まくった僕はライト先輩とかエクストリームとかからいろいろ言われていた。翔太郎さんは探偵事務所の人たちに引き取ってもらったけど、同じような状況、というか、電撃でもっとひどいんじゃないかな。

TCサンダーメモリも、なんか危険そう。

せまい部屋だから、人口密度は低い方が……って、そんなこと言える話の状況じゃないよね。

明日から、全快して、学校に戻る。今日は、部長やら何やは、学校。仮面ライダーの説明とかはもちろんしてない。特に、一真には言えない……。

「すいません、仮面ライダーじゃないと危なくて無理なところだったんで……」

頭の後ろに右手の平を当てて、よく会社員の人が平謝りするときみたいにライト先輩にあやまる。

「しょうがないな。まあ、そろそろ新聞部のみんなが帰ってくるこ

ろだし、仕方ない」

ライト先輩が腕時計を見て言う。え、もうそんな時間？　そういえば、見てみると僕の服は、青いパジャマ。なるほど、起きたときにはもう四時とかでそういう時間帯か。

確かに、部員（にされた）の人がこういうことになってたら、部活動すつとばして帰って来そうだしね。

「光介、間違っても、部員の奴ら、特に、初志^{はつし} 一真には、仮面ライダーのことを話すなよ。おまえの傷ですら、『車にはねられてこなくなった。犯人はわからない』で通してるんだから」

う、うん。いや、話さないよ。また首絞められたらたまんないもん。

あ、そうだ。

「そういえばエクストリーム、エクストリームも明日から学校行くの？」

「ああ。おまえの理不尽な行為のせいだな」

・・・・・・またまた、ご迷惑おかけしました。

と、それは置いといて、学校でどうするかとか、わかってるの？　エクストリームって、全然学校生活の経験ないし。特に、最初で重要なのは自己紹介とかだと思うよ。僕はあんま得意じゃなくて、大したことは話せなかったけど。

「そこらへんはまかしとけ。検索をすでに行い、いろいろな対策を練ってある。」

大事なのは、

1 名前はわかりやすく伝える。黒板に書くときには見えやすく大きく書くべき。

2 聞きやすい声で、大きく、長い内容を話す。

3 最後に特技などの解説をいれ、実際にやってみると効果的。

だろ？

特技なら大丈夫だ。鳥は歌がうまいんだ」

・・・・・・へ、へえ。

微妙に心配だけど、いいんじゃない？ まあ、鳥だって、鳴き声きれいだし、ってことはエクストリームも歌がうまい？ ってことだし。ガイアメモリだけだ。

意外に乗り気で、ちょっと安心した。

「当然だ。あんな奴の攻撃をくらったら、失神じゃすまない。ここは、奴の言う通りにするべきだ」

やっぱし、それはエクストリームも怖いんだね。

「じゃ、僕は家に戻ってるから」

おお、はいはい、ライト先輩。また会いましょう。

ライト先輩が出て行った後で、僕は手を振る。じゃあ、これから、明日に備えてちょっと体を動かしておこうかなあ。

「そうだな。そろそろ動かないと、動けなくなるぞ。」

聞いた話では、こたつから出ずにずっとネットゲームをやり続けた中学生が、下半身に力が入らなくなったという状況が報告されている」

ま、まじすか？ やっぱり、動かないとやばいじゃん！

僕は半ばあせりつつ、布団のとなりに置いてある服に素早く着替える。赤いジャケットが何となく動きやすさを感じて、アクセル全開！ な感じがする。

「それは両崎　ライトがショウタロウの服から選び取り、用意したものだ。昔着ていた古いものだから、そのまま自分のものにして構わないそうだ」

へー、ありがと伝えといて。

そんじゃ、アクセル全開で散歩にレッツゴー！

僕たちは、この前刑事さんがノットベリージェラシーになったところまで歩いてきた。

「うん、なんか力がみなぎる！」

「その、人間のオジサンとかいう種類に入る趣味の服のせいかな？」

「いや、違うって」

また、あのときみたいにドーパントとか変な人とかが出なければいいけど。

「あ、発見」

と思っただら、なんか危なそうな女の人の声が。な、なに？ もう、治ったばかりで感覚がにぶるな！

じっと見ると、電柱の影から、その人が姿を現した。

ぬおう！ 近頃においてのハデハデ女というのは、こういう奴のことを言うのか！ 『ぶらんど』とかいう奴の、∞からちよつと両端抜いたみたいなマークが腰の端っこあたりについてる。まあ、全体的に、黄色のTシャツに短パンと、軽い格好だったけど。化粧濃くないし。髪はある程度長く、首にかかるくらい。

ただ、服装からはわからねど、全身から感じられるこの派手さは何？

「光介、つまらない一人トークはよせ。こいつは怪しい奴だ」

おっと、すみません。

「あらあ、怪しい奴っていうのはないでしょお、エクちゃん」

エク？

エクストリームの言葉を受けて言ったこの人の言葉。もしかして、知り合い？ エクちゃんって、どういう間柄だか知らないけど。

「気にするな、こんな奴。ロストドライバー、ガイアメモリはちゃんと持ってきてるか？」

え、持ってきてるけど。もしかして、この人といきなりのバトル？ 病み上がりなの？

「あらあ、戦う気？ ならあ、これで！」

その人は、ロストドライバーを出した。ってことは、この人もC OREの人？

「当たり前！」

次に、ロストドライバーを腰に押し付ける。すると、ベルトがシュツと勢いよく飛び出して巻かれた。さらに、黄色いTCガイアメモリを右手に持って、スイッチをカチリと押す。

『ルナ！』

Lのメモリ、ルナメモリを装填。

「変身っ！」

『ルナ!!』

いつものガイアメモリの音声响起、その人の身体が光に包まれた。なんだか、いつもよりも明るさがすごい。

光が晴れると、そこには、仮面ライダーが。名前はメモリから取って『ルナ』かな。フォルムは、やっぱり、ジョーカーとかトリガーとかと同じで、ソフト。

「光介、変な一人トークはやめろと言っただろ」

とと、すみません。じゃ、僕たちも変身だ！

ロストドライバーを左手に持ち、腰に押し付けると、仮面ライダールナのと看みたいにベルトが装着される。

「変身」

珍しく人間態のままて、変身宣言。うん、寝てばかりだったから久しぶりでいいね。

ガシイイン！ と、データ体を元に戻したエクストリームがスロットに入る。よし、展開だ！！

『エクストリーム!!』

ルナメモリと同じ人の声で、電子音が。これを聞くのも、ほんと久しぶり。光と一緒に、風まで巻き起こる。

風が晴れると、強化された目で、ルナの黄色い身体のスミズミま

で鮮明に見える。赤いアイと、Wの角がやっぱり特徴的だな。

「アターック！」

よっしゃ、行くよ！！

僕は走って、ルナに近づこうとする。

「CORE幹部龍堂^{りゅうどう} 月乃^{つきの}、仮面ライダーエクストリームを倒します！」

妙に明るい声を出すな、この人。戦闘中なのに。って、僕も同じか、今回は。

「えいっ！」

なんて思ってたなら、何故か、月乃さんの腕が伸びて、僕にパンチ。

ばふっ！ と、衝撃がかかり、僕は反対側に飛ばされる。いてて、どうしてこんなことに？

『光介、龍堂 月乃が使用するTCメモリ、『ルナ』は、腕や足を自在に伸ばし、曲げることが出来るトリッキーなメモリだ。だから今回は、細かく攻撃する『サンダー』で行け』

ああ、サンダーね。確かにアレなら、月乃さんのルナの能力に対応出来る。

僕は黄色のガイアメモリを出し、マキシマムスロットにセットした。すると、電子音声が聞こえ、マキシマムスロットには電流が流

れる。

『サンダー！ マキシマムドライブ！！』

Sのメモリ、サンダーを使って、攻撃する。ええと、この前のド
ーパントと同じ攻撃方法でいけるなら、こうやって手を振れば。

右手を振り下ろす動作を取ると、月乃さんの頭上で閃光が見え、
降りてきた。

「な！？」

避けられず、月乃さんに直撃。よし、これで気絶間違いなし！

………と思ったら、何と、僕の頭上にも落ちてきた！

バリバリバリバリ！！

「あばばばばばばばばばば………」

『光介、サンダーメモリは力が逆りゅ………おわあああああ
あああああ！』

がふう……。僕はその場にザシャツと倒れる。病み上が
りでサンダーはきつかったかな………。

「いたた、一時撤退！ エクちゃん、また会おうね！」

ああ、逃げられ、る………。

今回は、エクストリームもだめだったらしく、二人そろってバタ
ンキュー・・・。

第二十話 Sで感電／病み上がりでいきなりバトル（後書き）

すみません、最近ペースが乱れてきてます……………。

光介「頼むから負けないで」

エクストリーム「光介、よせ。彼なりに頑張ってる……………。頑張ってるんだけどおっ！」

光介・エクストリーム「OOO・ホーク休め！」

第二十一話 Sで感電／エクストリームの自己紹介（前書き）

ーカウント・ザ・メモリーズー
エクストリーム・・・極限の記憶
マスカレイド・・・仮面舞踏会の記憶
マネー・・・お金の記憶
オーシャン・・・大洋の記憶
ユニコーン・・・一角獣の記憶
エクスプロージョン・爆発の記憶
ストリーム・・・気流の記憶
ストーム・・・嵐の記憶
サンダー・・・雷の記憶
ジェラシー・・・嫉妬の記憶

第二十一話 Sで感電／エクストリームの自己紹介

・・・・・・・・またまた、すみません。ご迷惑を・・・・・・・・。

アパート ツイン。きれいな茶色の木の部屋の中で、僕はみんなに向かってごめんなさい。特にエクストリームに。

あの電撃の後、というか、戦ってる時点ですでに、新聞部の人たちはアパートの周辺まで来ていた。それで、また僕の部屋まで運んでもらったというわけ。しかも、そのときに、友を除く新聞部の人たちがいたということは、一真に正体を知られちゃったということ。いや、一真だけじゃないけどね。

一真、反応、大丈夫かなー・・・・・・・・。とにかく、どういう対応をするか、決めとかなないと。

エクストリームは、すでにもう気を取り戻してる。こころなしか、少しだけ顔色が悪い。ああ、サンダーがうまく使えれば、って、あのとき月乃さんが出てきた時点で充分もう、駄目だ、っていう状況になってたけどね。

それはいいとして、目の前に新聞部のみんながいるこの状況をどうにかせねば・・・・・・・・。一真とか、すごい目でこっちにらんでるし。ただでさえ細いその目は最早糸みたい。中からは狼みたいにきちつとにらみつける光が。

「ああー、一真—————」

言いかけたら、それを避けるように、すっと立ち上がってドアを

開け、どこかへ去ってしまった。ああ、やっぱり……。

一番僕に近いところにいた部長が、座ったまま僕に向かって切り出した。

「一真、いろいろあったんだよ。仮面ライダーとか嫌う理由が。むしろ、ヒーロー全般がダメなんだ」

え？ 何だよ。仮面ライダーって、風都のヒーローじゃないの？
何か、悪いことしちゃった？ 翔太郎さんが前から風都にいたんなら、もしかしたらそういうこともあったのかもしれないけど。

「悪の仮面ライダーって、実際いるかもしれないけどさ、悪は悪、正義は正義なんじゃないの？ どうしてダメなの？」

「一真の父親は、消防士だった。もう死んじゃって、今は母親と二人で暮らしてる。」

その死に方が、一真にとって、問題だったわけ。火災になってる家突っ込んで行って、死んじゃった。五年前のこと。

あのとときだけ、一真はそこに来ていた。だから、父親の死に際だけ見る結果になった。燃え盛る炎の中から、ふと上を見上げると、そこには白い仮面ライダーがいたって言うんだ」

簡潔に話してくれて、部長は言葉を切った。なるほど、いやでも、それは解釈の違いってやつで、本当は助けに来てたんじゃないの？

白い仮面ライダー。思い当たるところがあるしね。

「それにしても部長、よく知ってたね」

「同じアパートだったし、入部するときにあるていど過去については調べておくから。それこそが会社の社長第一歩！」

おお、部長の夢は社長か、スケールがでっかいねー。入る人についてもしっかりと調べておくんて、細かい細かい。

しかし、白い仮面ライダー、よく調べないと。こういうことが聞けたのは、新聞部に入ったから。入っとけば、結構役に立つかな。

と、ふいに部長が口を開いた。今度はかなり明るい口調で。

「そんなことよりも、うちの部員が仮面ライダーってすごくない！？」

へ？ あ、やっぱり見てたんだ……。何だか、この部の反応がそれぞれ個性的。一真は怒り、部長は喜ぶ。ほんと、様々な過去を持った人が集まったんだなあ……。って当然か。

ま、楽観的な見方だったらそういう喜び方しそうだけど。エクストリームは苦そうな顔でこっちを見てる。どうしようねえ、このままだと、新聞部がエンターテインメント劇場と化しそうな。

「表向きはただの新聞部。仮面ライダーについていろいろ発表する。そして裏では、仮面ライダーをサポートする最強の部活、『仮面ライダー部』！！」

ほお、いいねそれ、特撮ヒーローにはサポート隊がつき物……。
。。エクストリームに許してもらえば、こういうのはアリかも。

部長は長い髪を揺らしながらなおも続ける。

「サポート……、少年探偵団並みにすごい。素晴らしいっ！」

一人でワツと盛り上がり、両腕を頭上に振り上げた。あのう、まだ決定事項じゃないんですけれども……。

まあいつか。これもまた人生。こんなことがあっても、不思議なことじゃなく。

「じゃあ、帰って考えとくから！」

さっきまで説明していたときの雰囲気の暗さはどこへやら、ガチャとドアを勢いよく開けて外にレッツゴー。ははは、なんかだんだんレベルが高い問題に発展してきたぞ……。

「光介、おまえ、変なこと考えたらただじゃ済まさないぞ」

おお、ごめん、わかったよ。

でも、部長とエクストリーム、どっちが怖いかっていうと、やっぱり部長に決まってる。あー、けど、仮面ライダーの変身はエクストリームと共同なわけで。どうしようねえ、これから。悩む、悩むぞ、これは。

ついに、エクストリーム入学の日がやってきた。太陽はさんさん

光を学校にもたらしている。冬が近づいてきたから、暑くはないけどね。

果たして、エクストリームの自己紹介は何の問題もなく終わるのか。小学校にも行ったことがない、実際は四十六億歳のエクストリームは、未経験の出来事を、四十六億年のカンロクでどうにかするのか？ それとも、カンロクが変な方向に向いて、変に余裕を持ちすぎて、しょーもないことをやっちまうのか？

光が差す左の端っこ、一番後ろの席で、柱先生がエクストリームを連れてくるのを待つ。そもそも、『大道 極』っていう名前自体がキテレツだよ。果たして、みんなの受けはいかに！？

ガラララララ、と、木製のドアが動く音がして、柱先生とエクストリームが入って来た。超珍しく、エクストリームのきちっとした制服を着ている。いつもはそっけない、薄い色の服が多いのに。って学校に入ったのならば当然のことか。

それに、何故か、腕と体の間によりやく入るような大きさで、長さは黒板の三分の一くらいの模造紙を持って来てる。何に使うんだろう？

早速、柱先生が紹介をスタートした。いつも通りの柔らかい声。でも先生っぱさはある。

「ええとね、この前言った通り、光介くんに続いて新しい友達がこのクラスにやって来ましたー！」

一人でわあっと盛り上がり、バンザイする。ここら辺のフレンドリーさは全然全く変わらない。そこが僕にとって笑えるところ。

「では、早速自己紹介してもらいましょう！」

どうぞ！ と、エクストリームを迎え入れると、まず極もといエクストリームは、白チョークを持ち、黒板に向かった。あ、昨日言ってた、『1 名前はわかりやすく伝える。黒板に書くときには見えやすく大きく書くべき』ってやつだ。まあ、マンガみたいに、緊張して小さすぎるっていうオチはないと思う。

って、あれれれれ！？

いや、小さすぎるっていうオチはなかったよ。むしろ逆。これは、『でかすぎる』っていうオチだ！ 適正の大きさがビルとしたら、その五十倍！ ジャンボだ、ジャンボすぎる！！

チョーでっかく『大道 極』と書くと、僕たちクラスの人たちに向き直って、少しだけ腰を曲げて礼をした。

「大道 極。よろしく」

ああ、良かった、こちら辺は普通だった。でも、確かあと二つ、エクストリームが何か言ってたような……。

「ああー、身長は一メートル六十二センチ、体重は四十三キログラム。誕生日に関してはさておき、好きな動物は鳥、英語ではbirdだな。特に、色は野生のものがいい。白などきれい過ぎるものでなくともいい。好きという基準は鳴き声だ。鳴き声が美しければ『醜いアヒルの子』だろうがなんだろうが関係ない。まあ、好きな基準はそんなところだ。ところで、つい最近、新しい仮面ライダーとかどうとか言われているそうだが、ボクはそれに関して、新聞部に

入って調べようと思っている。新聞部ならば、取材ということで様々な情報を手に入れることが可能だからだ。その内容を新聞で掲載する必要があるのは面倒なことだが、それはギブアンドテイク、ものは考えよう。ボクはそういう性格なんだよ。そういう意味では、最近のこの国は体勢が固いと思う。時には水のように考え方を変えてみるのも一つ。沖縄の基地なんて、最初からなければOK。せめて自分で自分を守るくらいのが出来なきゃ、国民からの指示を失ってしまうからな。こういうのは世界の先進国で起こることだ。お互いの関係、どれを優先したらいいのかわからないことが多々ある。とりあえず、ボクは、民主主義という名の強制が必要だと思っている。それがボクの考え方の一つだ。そう受け止めてもらって構わない。そして、先ほどボクは鳥が好きだと言った、それに見合うよう、ボクもまた歌がうまい。それをこれから……」

だあああああ！ 長い、あまりにも長い！！　もしかしてこれが二つ目の『2 聞きやすい声で、大きく、長い内容を話す』っていうの？　確かに聞きやすいポリウム。よく酸素がなくなってブラックアウトして気絶しないかってほど。

そして、スケールも自分、日本、世界って、どんどん大きくなってる。めちゃくちゃ長いし。

離しながら、エクストリームはふっと笑ってみせる。「どうだ、これがボクの実力だ」と言わんばかりの顔。わかったわかった、わかったから頼む。止めてくれ！

ってあ！　もしや、この調子で行くと三番目の……………。

「披露したいと思う」

や、やっぱりか。『3 最後に特技などの解説をいれ、実際にやってみると効果的』。けど、このタイミングで歌うって、最初は冗談だと思ったよ!?

そんな僕には目もくれず、エクストリームはすー、と息を大きく吸い込んだ。ああもう、どうしたら……。

と思ったら、柱先生がそれを中断してくれた。

「いや、そのくらいでいいよ、極くん。まあ、このくらいで充分みんなには伝わっただろう」

「ま、それもそうですね」

ほー。良かった、ホームルームが全部自己紹介で終わらなくて。

「じゃあ、光介くんの前にしようか。友から、同居しているという話を聞いたから」

「わかりました」

歩いて来て、どすつと僕の前の席に座る。先生サンキュー! 変な言動はこれで止められる。

いやー、一時はどうなるかとハラハラしたけど、本当に良かった。よしっ、エクストリームを見張らねば。

「大道くんは、どうして鳥が好きなんだ?」

お昼休み。一番最初にクラスの人から聞かれたことはそれだった。エクストリームの周りを、人がいっぱい取り囲んでる。授業も普通にやってたし、まあ苦しいことってあんまなかった。

ふっと笑みを見せて、エクストリームは答える。

「そりゃあ、ボクは元々鳥————」

あ！ 早速いかん言動発見！

僕は机からガタツと立ち上がり、窓の外のを指差した。と同時にエクストリームが最後の方まで言う。

「だったから」

「あつ、UFOだーっ！！！！！」

案の定、みんなは目もくれなかった。新聞部のみんなも、くしくもこのクラスに全員そろっててくせして、全く振り返らないって、どういうことだ？

まあ、とにかくマズイ言動は避けた。次はその二が飛び出すのかな？

「休日は何をしてるの？」

「休日？ 光介と一緒に仮面————」

いかん。どうしてこんなに今日は不用意な言動が多いの？ もう

一回立って、今度は前の時計を指差して叫ぶ。

「あー！！ 五分前だ！ みんな、準備しないと間に合わないぞ！！！」

「ライダーになってるんだ」

今度もうまく打ち消せた。

それにしても、あんだけ秘密を漏らさないように自分で言っていたのに、こんなに変なこと言うなんて、もしかして狙ってるんじゃないの？

果たして、この後の部活はどうなることやら……………。

第二十二話 Kの激動／四十六億年の恋？（前書き）

ーカウント・ザ・メモリーズー
エクストリーム・・・極限の記憶
マスカレイド・・・仮面舞踏会の記憶
マネー・・・お金の記憶
オーシャン・・・大洋の記憶
ユニコーン・・・一角獣の記憶
エクスプロージョン・爆発の記憶
ストリーム・・・気流の記憶
ストーム・・・嵐の記憶
サンダー・・・雷の記憶
ジェラシー・・・嫉妬の記憶

第二十二話 Kの激動／四十六億年の恋？

さあ、ついにやって参りました初部活！ エクストリームにとつただけじゃなく、前の学校では帰宅部だった僕にとつても初だぞお！

と、テンションをあげてみたところで、何の役にも立たん・・・

だって、今度はエクストリームが何やらかすか、ハラハラドキドキなんだもん！ 仮面ライダーのことは友以外みんな知ってるはずだから、あんまし困ることなんてないけども。

むしろ、僕とエクストリームが共有するあの問題がきつ・・・
・・・。一真の過去知っちゃったら、説得が難しい。

でも、とにかく言っておくんだ。翔太郎さんも、みんな仮面ライダーって良い人ばかりだ。きっとその白い仮面ライダーだって、ドーパントを止めようとして止められなくて、そこでそこを一真が目撃っていうんだったら、こういうケースもあるはずだよ。

よっしゃ、気合入れてくぞ！

僕はガッツポーズをしながら教室の中で立ち上がる。新聞部は、顧問Ⅱ担任ということもあってか、この教室でやることが多いみたいだ。

「光介、今何考えてた？ 突然謎の動きをとるとは。奇怪な光景だぞ」

おおっと、すみません。またまた一人で盛り上がっちゃって・・・
自分で自分の頭をペシッと叩く。

「なあにやってんの？」

あ、友。そこは先生が入ってくる、前のドアだよ。後ろから入るなよ。

「大丈夫、大丈夫。先生まだ来てないもん！」

そういうもんなんすか、友？

「もちろん。それで、勇香様も連れて、来まし・・・た」

最後の方だけ、異常に声のトーンが下がる。何となく、様付けとか抵抗があるのかな。あ、僕だけ最近部長って呼び方だ。やばっ、大丈夫？

「どうも、光介。初部活へようこそ。今回の新聞部も張り切ってくからね」

ビシッ、と人差し指を突き出してみせる部長。うーん、こういうのが部活ってのか・・・対応ムズッ！

「そして、極くん。君も来たのね」

「ああ。くだらんが来てやった」

ふふっ、という笑い声を立てて、部長が後ろを示した。

「何と、今日は、三人目の新部員の登場！ その名も、伊集院 美玲^{れい}です！……」

一人で盛り上がり、パチパチ！ と拍手する部長。いつもはこれ、友の役だね？ あ、今は部長がいて肩身が狭いのか。

なんだと、と言うエクストリームに向かって笑って見せて、美玲さんを教室に入れる。伊集院ねえ、お上品そうな名前！。あっと、この人にも仮面ライダーのこと教えなきゃいけないのか。いろいろきついな、部活って。いや、これも仮面ライダーの苦悩というものか？ いずれにしても、仮面ライダーがこんなところで何やってんだろう。

入って来た美玲さんは、なるほど、気弱そうな人だった。茶髪が腰までかかってる。制服は普通だけど、気弱そうなのに、それでいて印象に残る。おお、顔はといえば十人中十人が振り向くっていう表現が適切？ 目が大きい。口は小さい。ふーん。

「光介、ちょっと来て」

くいくい、と手をやられて、僕は前の方の部長の前へ。そのまま一緒に廊下に出された。何、なんかあるのかな。ここまでの関係から行くと、仮面ライダー関係の話だろう。

「なんですカー、部長」

おおっと、これはNGワードを言っちゃったってやつか。果たして、その結果は？ 殴られるOR蹴られる？ いや、先生が来てくれればこの状況は充分打開可能だ。ってこんなに考えるって今日はほんとにどうかしてるよ。

「単刀直入に言っとくと、美玲は丁重に扱わないとダメだよ」

え、なんで？ 名前のイメージ通り上品な金持ちの人ってことなの？

「なんでですか」

「知らないだろうけど、美玲は同じクラスなんだよ」

へー。いやあ、あんまし学校に來た記憶ないからまだまだ知らないことが多いや。

「話は最後まで聞く！」

ごへっ。平手打ちをみぞおちに喰らった。部長は許容されたみたいだけど、この手のは……あれ、これツツコミか。

「ある種のいじめってやつだよ。学級委員長に無理矢理ね。そういうこと結構あるでしょ？ だあれも手をあげず、みんなは弱い人を集中して推薦する。こんな感じで、学級委員長に一直線」

ああ、前読んだ小説でそんな展開があったかな。でも実際に起こってるっていうのは知らなかった。新聞部のみんなは違うと思うけどさ、許せないね、こういうのって。この学校も、そういう問題はやっぱりあるんだ。

「だから、ここ新聞部では、そんな悲しみなんかないように、てーちよーに接するよ！」

「お任せ！　僕はそういうコトしないからご安心をっ！」

バン、と胸を叩いてみせる。僕の辞書に『いじめ』という言葉は存在しない！！　僕なら、シャツシャツシャツウトな感動な展開を必ず生み出すぞ！

「ああでも、主役は極くんでいこうね」

「え、なんでです？」

エクストリームの辞書に『いじめ』はきちんとあるよ。I d o n't, b u t h e h a s . そんな理由あるの？

「だって、あの子、極くんのことが」

え？

何、聞こえなかった。もっかいゆって？

「だあかあらあ、アレだよ。ああもう、何度も言うのはきついな。イングリッシュで！」

お、オーケー。イングリッシュすね。大丈夫、僕は英語上手いから、多分わかるさ。

「She loves him. だよ。わかった？」

部長、かなーり言いにくそう。恋の話は得意じゃないってことなんだね。ああ、なるほど、あの新部員は、エクストリームのことを・・・・・。って、ええええええええええっ!?

ノーノーノーノー、ありえまっせん! 奴は辞書に『いじめ』を持ってるぞ、危険だぞ! 言ってないけど、ほんとの顔はアレじゃないから! それとも、アレか? あの自己紹介の激長演説が良かったとか? うん、それなら、ってありえない!!!!!!!!!!!!!!

エクストリームの食事作ってるのは僕だ! 保護者として、こちら辺の責任はある!

「どうしてなんですか!?!」

「うわっ、ちょっと・・・・・。そんな、どっかのお父さんみたいな目はやめてよ」

おおっと、気がたってしまった。すんません。

自分の胸をなでて、息を落ち着かせる。うん、大丈夫だ。ええと、現在の状況は、あの人はエクストリームが好きだということ。

「なんでというかね。多分、あの演説じゃない? あんまり自分の思ったこと口に出せないから、良いと思ったんじゃないかね」

そ、そういうもんか？ む、空しい……。僕、入学から結構時間経ってる。エクストリーム、一目。よくわかんないけど、ウラヤマシイぞ、あの男！ この調子でいくと、『フラグ乱立』とかいう怪奇現象起こすんじゃないの！？

あ、でもちよつと不安かも。エクストリームは実のところ四十六億歳。地球が恋人な年齢。十三と四十六って、どういう差かというと、友達が月にいて、そこに向かって『ヤッホー！』って言って会話する感じ。

だとしたら、こりゃ失礼、オジイサンと、僕と同年齢の人が恋？ うーん、不安だ。それに、エクストリームがそんな感情抱くかねえ……。もしあっても、地球に対して抱く感じじゃない？

「そんなわけで、極くんが出来るだけ良く見えるようにみんなで頑張ろう。友には言っておいたから。新聞のネタが増える！」

そういう魂胆かいな！ イカン、イカンぞ、こういうのは。エクストリームがネタになるなんて……。案外アリ、かな……。

「アリ、なんですかね？」

「いや絶対そうだと思うよ。記者魂が燃え上がる！ ターマーシー、タマシータマシーターマーシート、記者ダーマーシート！」

「何ですか今の変な歌は？」

「うん、ラジオで、仮面ライダーの放送流すときに、『ターマーシー、タマシータマシーターマーシート、ライダーターマーシート』

つていう歌から始まったから」

へー、部長好きなんですねー。

「別に、たまたま聞いたただけだから」

あ、そうですか。

それにしても、最初に会ったときより、ずいぶん対応が良くなったよ。嬉しいことだねえ。これ以上無理強いされることもないと思うと、胸がスッキリ、明日も天気！ とととと、また変なことを。

「じゃ、よろしくね。光介」

オーケエイ、任しといてください！

長い髪を揺らしながら、後ろから教室へ。うん、友と違ってこちら辺の常識ってもんはある。

さあて、これからが大変だ。特に何が大変かって、さっきのラジオの奴借りると、『カーズーマ、カ・ズ・マ、カアズウマア』だね。

「それと、別に名前で呼んでも構わないよ」

え？

ありがとう、と言わせてもらうべき？

なんでい、仮面ライダーだからって、優遇つけるのか？ いや待

てよ、誰だか忘れたが、前にどっかで若い人にフラグ乱立その他モロモロの言葉を教えてもらった記憶がある。誰だったか忘れたけど。そうだ、アレだ。エクストリームだけじゃなく、僕にも春が訪れた？ しかも最強の。だとしたら、超うれしいかも。

「ありがとー、ぶちよー！ 好きに呼ばせていただきます！！」

「勘違いしないでね。そろそろ様付けなるものに飽きてきたただけだから」

おうっと、冷めた返し方された。誰かに教えてもらったものに、『ツンデレ』なるものありけりだった気がしたんだけど『べ、別に』的なコト言われなくちゃいけないみたいだ。でもその例では、声が微妙に震えるらしいから、やっぱ違うか。

部長の精神力が強いからとか知らないけど、もしかして、春は一瞬で過ぎた？ じゃあ、これから夏か。熱いぜ！ 特にCOREとの抗争が！ ……微妙に悲しい。

いや、あきらめんぞ！ エクストリームなどに負けはしない！ 永遠に地球に刻み込むバッキバキな恋してやるぞ！！ それはもちろん、It never ends！

「な、なんか変なこと考えてない？ あ、あまりにも顔が変だよ。怪奇現象だよ」

エクストリームと同じこと言われた。今度は別の意味で声も震える。あああ、いきなり顔の筋肉が決壊して、好感度が、コウカンドが。

「何言ってる、広」

後ろから声をかけられた。振り向くと・・・・・・・・。

あ、か、一真！ ついに来たか。よし、変な話は置いといて、一真と一対一の対話をせねば。

「あのう、一真？」

「うるさい！ 説得とかつまらないこと考えるんじゃないぞ。とにかく今回は、新聞部の仕事について教えてやるために来ただけだ！」

ああ、あしらわれてしまった。やっぱり、これは直しづらいことなのかなあ・・・・・・・・。

ガラララララ、と扉を開けて、

「新入部員が三人いるそうだな、柱。徹底的に鍛えてやるぜ」と一真。もしかして、スパルタ？

「ああ、気にしないで。アレはあんまり本当のことじゃないから」

部長改め勇香に耳打ちされる。うん、この方がなかなかしっくりくるじゃないか。友達とか、そういう関係としてね。でも、スパルタは本当じゃない、か。よかった。いきなり美玲さんがやられちゃったら、ね・・・・・・・・。

「うん、任せるよ！」

「よし、広・・・・・・・・勇香様、入れ」

机にドスンとカバンを乗つけて言う。やっぱり一真も、様付けには抵抗があるか。そりゃ僕だけ、名前で呼べる、ってあれ、勇香、ちゃんと訂正しないの？

その後、最初に口を開いたのは、エクストリームだった。

「で、何の講習を始める気だ？ こっちは、おまえの登場を待ちかねてたぞ」

「極さん、かっこいい……………です」

美玲さんがつぶやいたのを、僕は聞き逃さなかった。口調はこういう感じなんすね。

おおっ、出た、かっこいい言葉！ これで美玲さんの反応も上々だよ。うん、ちゃんと、エクストリームのことを、赤い顔して見る。

それにしても、自分がこんなに恋ネタが好きだったとは、知らなかったよ。こういう事実を知るためには、やっぱり部活っていいもんだねえ。

「もちろん、新聞部の講習だ」

「仮面ライダーに対する恨みの講習じゃないんだな。意外だ」

「あ、あの……………」

ちよっ、エクストリーム！ せっかく今くらいは安心して楽しめると思ったのに。ホラ、美玲さんもどういことかわからない顔し

ておろおろしてんじゃん。

「何だと？ 俺を怒らせるのはおまえの責任だが、気分を悪くさせるなよ」

「何言ってる。責任とかってイチイチ言うのは、父親が死んだ事実を、どうにかしているんな人間に罪を、責任によってなすりつけるためにやってるんだろ。そんなこともうとくに調べて知ってるさ」

エクストリームは、もう検索を終えていたのか。それを聞いて、元々細い一真の目はもっと細くなる。

「いつからだ」

「おまえに首をしめられた後さ。まったく、仮面ライダーやってると、こういうことあってやんなるな」

ハッ、と息を吐いてみせるエクストリーム。美玲さんは、何のことでかわからずにオロオロしてる。なんかいつもと違ってとげとげしい。これは、一真の心に対する彼なりの対応なんじゃないかと思う。エクストリームは、翔太郎さんに正体を明かすときにわざわざ変身までやって見せた。だったら、今回も然りなんじゃないかと思うんだ。

「おまえ・・・・・・・・」

抑えきれない、そんな顔をして、一真が、エクストリームの胸倉を掴んだ。ヤバイ、取り返しがなくなる！ 先生もまだ来てないし、止められるのは・・・・・・・・。

「ぶちよ、じゃなく勇香！ 止めて！」

勇香は簡単に了承してくれた。ありがとう、今メチャクチャ感謝してる！

「わかったよ！」

そして、二人の間に割ってはいる。

「ねえ、やめよ？ 今から、部活動やるんだよ？」

いつになく優しい口調で言う。その言葉に、さすがの二人も落ち着いたようだ。低い声でつぶやくように一真が承諾を告げる。

「わかったよ」

「はっ……」

一真が胸倉を掴んでいる手を離し、エクストリームは軽く息を吐いた。果たして、こんな調子で、美玲さんとエクストリームの四十億年の恋は叶うの？ そして、一真をどうしたらいいの？

第二十二話 Kの激動／四十六億年の恋？（後書き）

今回から、『ライダーで基礎英語！』をスタートします。中学校一年生程度の内容なので、あまり期待しないで下さい。

今回の言葉はこれだ！

Does Takeshi belong to Jonan university or Johoku university?

エクストリーム「意味は『タケシは城南大学と城北大学のどっちに属していますか？』だ！」

光介「ちなみに、タケシは仮面ライダー1号だよ！」

勇香「ついにヒロインになれた……と、北と南だとわかりづらいね」

光介「多分城南だと思うんだけど、城北の可能性だって充分あるんだ。エクストリーム、調べてくれない？」

エクストリーム「ここは英語をやる場であって、大学の場所を検索する場所ではない」

光介「そっか」

ライト「僕は！？」

光介「今回の文法は、三単現のSだよー！」

ライト「無視しないで!？」

光介「すみません、仕事なもんで」

主語が三人称単数（自分と相手以外）で、現在のことについてやるときには、動詞にSがつく！　これが今回のキソだ！

光介「shとかoとか、Sつけて発音するときに『スイズ』な発音になるものはESをつけるよ！　ちなみに、Doだけ例外で『ダズ』、Doesだよ！」

勇香「Doは、疑問文では一番最初に置くのが基本でーす！」

友「さあ君も、使ってみよう、ライダー英語！」

光介「なんで最後に友が出たの？」

エクストリーム「あいつはあいつでいろいろあるんじゃないのか」

勇香「まあ、いいよね」

ライト「頼む、僕の位置づけを教えてください……」

一回だけ前に言いましたが、ライトの位置づけはウォッチャマンと

かそういうレベルです。常時光介とかと一緒に行動できるほど出世してません。

ライト「そんな!!!!!!!!!!」

にしても、やっと、ヒロインらしき空気を出し始めたよ、部長。ここまで来るのに長かったです。

高らかに宣言。『主人公と相棒だけじゃ、物語は出来ない! ヒロインの葛藤が大切!!!』

光介「さあ君も……………って、最後英語じゃないじゃん!」

エクストリーム「最後は雑談タイムと、ここら辺の場所では相場が決まってるのさ」

番外編第三話 仮面ライダーエクストリーム テーマソング『It never

仮面ライダーエクストリームのテーマソングです。オリジナルのものであれば大丈夫ということで、活動報告のものを写しました。いずれ風神のものも製作いたします。曲は適当なものをお付けして楽しんでいただけると良いです。

It never ends

作詞 k.i

(歌 広 光介・エクストリーム)

この街を駆け抜ける疾風
それを受けてもたじろがない

倒れられない運命にて
全てを知ったら灰色さ

right now 刹那 感じて
今だって 戦う

It never ends 絶対 倒れない
だから shoutして 今も ETERNALに
It never ends 必ず 始めるさ
だから強くなる 今も XTREMEに

この街を駆け抜ける願い
形にして戦うのさ

極限の祈り聞き届け
僕は風の戦士になるさ

right now 瞬間 感じて
明日だって 戦う

It never ends 祈るさ ずっと続く
だからmoveして 明日もETERNALに
It never ends 願うさ 行くために
だから諦めない 今もXTREMEに

倒れられない 願い続けたい
shoutとmove重なって
心で叫び 身体で動き
明日も明後日もWell do!

(XTREME, always go! Today, too!
Tomorrow, too! The day after to
morrow, too, too, too, too!
XTREME, never end!)

It never ends 絶対 倒れない
だからshoutして 今もETERNALに
It never ends 必ず 始めるさ
だから強くなる 今もXTREMEに
It never ends 祈るさ ずっと続く
だからmoveして 明日もエターナルに

エクストリーム！

第二十三話 Kの激動／切札との出会い（前書き）

ーカウント・ザ・メモリーズー
エクストリーム・・・極限の記憶
マスカレイド・・・仮面舞踏会の記憶
マネー・・・お金の記憶
オーシャン・・・大洋の記憶
ユニコーン・・・一角獣の記憶
エクスプロージョン・爆発の記憶
ストリーム・・・気流の記憶
ストーム・・・嵐の記憶
サンダー・・・雷の記憶
ジェラシー・・・嫉妬の記憶

題名のKの激動というのは、今回あるモノが登場することにあります。題名から察することが簡単に出来ちゃいますね。

第二十三話 Kの激動／切札との出会い

「まず、新聞作りに欠かせないのが、毎回必ず良い情報載せることだ。この部活では、一週間に一回載せることになってるから、一週間に一度、何か良い内容を持って来るのが大切になる。で、それに必要になるのが独自の感性だ。ここは、ウチの部長が持つてるから良いとして、な。」

情報とは、形にしなきゃ話にならない。そう、新聞作りだ。基本的にこれと取材が大半を占める。取材に比べて新聞作りはいろいろと手間がかかることが多い。取材に比べたら屁でもないことだがな。

新聞作りには、真面目なところではデスク、記者などと分けられてるが、ここではあまりそういった技術的役割は課されてない。全員が同じことをしていく感じになるな」

柱先生も登場し、一真の説明が始まった。結構わかりやすい。この部の特色などをてきぱきと解説してくれる。先生は、みんなから離れたところでニコっと笑いながら活動をながめてる。

「この部活は休日を除けば毎日ある。といっても、何か用事が入ればやらなくとも良い。さて、今回の活動だが、取材内容について決めようと思う。おい、極、聞いているのか」

途中で話を切り、僕の後ろをにらんだ。何だろう、と思い、後ろを向いてみると、エクストリームは、そっぽを向いていた。

「聞いているさ。ただ、ある程度その手の内容は良く知っている。ちゃんと調べたからな」

余裕を持った声でそう言う。検索まで済ませておくって、かなり準備いいね。まあ、美玲さんは普通に一真の話を聞いてただけど。友たち最初からいた人たちは、コトの成り行きを見守ってる。

「なるほど。まあ、ここら辺は基礎的なところだからな。調べていても何の疑問もない。自分の責任を全うする辺りは褒めてやる」

微妙に皮肉って言う一真。でもそこまで険悪そうじゃないじゃん。

「じゃあ、ここからは実践でやってみるか。おい友、前に出ろ。話し合いだ。取材内容のアイデアを集める」

くいくい、と手招きして、友を呼ぶと、友はいつも通りニコニコした顔で僕たちの前に立った。

「これから、取材会議を始めます！　良いネタ考えてね！！」

ようし、頑張ろう。入ったからには、最後までやってやる！　エクストリームも、ふうと息を吐いて前に出た。六人も人が集まると、何だか、『仮面ライダー部だぜい！』な雰囲気がある。あ、僕が仮面ライダーだからか。それに、一真は許してくれそうもないし、却下却下。

みんなが一つの机にかたまり、それぞれのイスに座って、お互いの意見を交換しあう。ちゃんと美玲さんもその輪の中に入れてる。

最初に、勇香が声を張り上げた。

「はい、なんかある人、手え挙げて！」

「はい」

最初にエクストリームが挙手する。さっすがエクストリーム、ちゃんとそこまで調べてたんだ。目離してる間に、いろいろやるね。

「どうぞ」

「日本の歴史についてやったらどうだ？ 歴史と学校を合成すれば、図書館に行く人間の数も上がり、部活動としてはかなり学校に貢献出来ると思うが」

おお、固いねえ。でも、それだと取材は単なる調べ学習になっちゃうな。それを突かれたら却下になりそう。

「うむ、なるほどな。要は、コラム的場所を作れと。確かに定期的に内容を載せていけば、新聞の内容はある程度安定してくる。ただ、それでは取材に行く場所は図書館に集中しやすくなる。出来るならば調べる内容は毎週一種類に統一したい。今までやってきたことは、学校の範囲から、町の範囲にまで広がる内容が多く、それによって良い新聞が作られていた。だから、時間がかかりやすいのが普通になってしまっている。

そして、新聞部で製作する新聞は壁新聞。可能ならばやはり内容の統一を図った方がこの部の方針としては合っている。後で検討してみてやる」

エクストリームの意見を分析し、全体に説明する。こうして見ると、一真が部長みたいに見えてきた。勇香がいなかったら一真が部長になってたかも。

「部長みたい……」

思わずつぶやくと、

「俺は副部長なんだ、広」

と、自分の立場について説明してくれた。あれ、そういえば、この部の人って中学一年生で統一されてる。上の学年になると運動部とかが好きな人が増えてくるのかな。もしかして、この学校は野球部とかに力を入れ、目指すぜ、甲子園！ なコトやってんのかな。

「友、今のこと、記録しといたか」

「うん、バッチリ！」

一真がたずねると、友が緑色の大学ノートを見せ、光るような顔をして答えた。なるほど、部長が勇香、副部長が一真、書記が友、か。だんだんわかってきたぞ。

「よし、他の意見ある？　今回は新部員 みんなに任せるよ」

勇香がみんなに質問する。そうか、今回は新入りの僕たちのために何も言っていないんだ。

「光介、ない？」

「ないよ」

残念そうに言うと、そっか、と返した。初対面するときには殴られたりなんだからあんまし思わなかったけど、落ち着いてみて見ると

性格とかかわいいじゃないか。攻撃的だと思ってたけど、どつちか
っていうと、あれツツコミみたいなもんだったし……。

「じゃあ、美玲は？ 何か持っていない？」

聞かれると、美玲さんは頬を赤くしてうつむいた。ううむ、ここ
ら辺の弱さがみんなに攻撃サレチャッテル原因なんじゃないの？

「だいじょーぶ、面白くなくても何でも、言わなきゃ始まんないよ
？ ネタがなきゃ新聞は作れないし」

安心させるように言うと、美玲さんも少し安心したと見えて、き
れいな声で小さく言ってみせた。

「わたしの聞いたところによると……最近、町の方々が」

「うんうん」

「……犬の遠吠えに悩まされていると……段々
と、この学園に向かって遠吠えが起こる場所が近づいてきていると、
言っていました……」

なるほど、それを調べよう、ってことだね。

でも犬の遠吠えって、どこかでこの前聞いたな。あ、あそこの工
場か……。もしかして、この学園に近づいてきてるっての、
真さんがこの前TCメモリで何かやったのと関係があるんじゃない？
……？

「いようし、よくぞ答えた！ エライよ！」

勇香が大きな声で賞賛してあげる。さすが、我が部の長！美玲さんは、恥ずかしそうな顔をもっと顔を下げた。何だか、小人みたいでかわいい。そもそも身長自体、僕たちより小さいしね。

背後で、柱先生もうんうんとうなずいて言った。

「よく言った！　素晴らしい、素晴らしいぞ！」

そのまま、青春小説ばりに泣き出しそうな勢いだ。柱先生って、友のパワーアップバージョンだね。さっすが親子！

「剛さん、今回の取材はこれで行こう！　きっと良い内容になるよ！！」

すんごく嬉しそうに、わめくように言う。

「はい、そう思います！」

「よおおおっし、ガンバろー！」

やっぱり友も父に負けず劣らずだなあ。

今日はものすごく速く書くことが決定したから、後は調べるだけ！　バリバリ質問して、犬を見つけてやるぞー！

僕たちは、運動部のみなさんが練習しているグラウンドを抜け、大きな白い校門から外へ出た。初めての部活。最初は嫌だったけど、

やってみるとあながち悪いものとは言えないな。

「でしょお？　だから私は何回も誘ったんだよ」

本人の意見無視してたくせに何を……。結果的には良かったけど。

「でも、何か行動を起こしたくてたまらなくなってきた。これこそ記者ダマシッ！　ってやつなんだね」

「そうそう。うーん、これ、我が部のテーマソングにしちゃっても構わないかも。題名ともすごくマッチしちゃってるし」

「どんな名前？」

「魂新聞」

。。。。。

無言になってしまった。話を聞いていたエクストリームも、少しだけ歩く音が小さくなる。魂、か。マッチしてるけど、この学園と一体何の関係が。。。。？

「ごめん、光介。さっき言った、別にラジオ聴いてないっていうの、アレ嘘」

勇香は、この雰囲気を感じたみたいで、舌をペロっと出して謝った。

「ホントは、聴いてたんだよね。取材の一環としていろいろね。こ

こだけの話」

勇香、顔をずいといと近づける。一真は、前にいて僕たちの話はあんまり聞いてない模様。多分一真に聞かれちゃまずい話だから顔近づけたのかな。近すぎだけど。

「意外と仮面ライダーも好きなんだよ」

やっぱり、仮面ライダーの話だからか。顔、近すぎだけど。

「ラジオって、ニュースだとかずっと放送しまくってるじゃない？その中に仮面ライダー関係のっていっぱいあるんだ。やっぱり風都だからね。」

中でもスゴイと思ったのは、本当は仮面ライダーはまだまだたくさんいるってこと！ 実際に見た人の体験談とか放送されたんだ。テレビで画像も見なかったよ。それによると仮面ライダー一号っていうのがいたらしく」

何か怪しい内容の可能性ない、それ？ FM、AM、どっち？

「ちゃんと風都が運営してるAM放送だよ。夜九時頃からだから、聴いてみれば？」

「じゃ、今度」

れっきとした番組ってことか。この前真さんが『オーズ』とかって言ってたから、否定は出来ないかもしれないな。後、顔近い。

「あの、いいですかね？ 顔近いです」

「とつとと、ごめん」

慌てて顔を退ける。ま、一真対策だから仕方ないんだけどね。

「いたっ！」

突然、友が頭を押さえて顔をしかめた。ど、どうしたの？

「頭踏まれた！ 一真、何が上にいるの？」

辺りを見渡すと、黒い何かが友の頭の上に！

そいつは、犬よりも小さい、小型恐竜みたいな、何故かカチコチしてる感じがする奴。けど。

「キャオオオオオオン・・・・・・・・」

その雄たけびは、犬に似ているところもある。もしかして、こいつが、美玲さんの話に出てた犬！？ 一真も、その可能性を考えたらしく、柱先生に向かって叫んだ。

「先生、デジカメラ持ってるでしょう？ 出来たら撮影して下さい！ 多分コイツは地面に降りるから、追っかけます！」

「おお、いいよ」

自分の息子の頭の上に犬っぽいものが乗っかってるにしては、結構落ち着いている。柱先生は、友のフレンドリーさに、大人の冷静さをプラスした感じの人。だからこそその落ち着きなのかもしれない。

「撮るぞ、友」

先生が銀色のデジカメを構える。

「よろしく！」

頭を動かさないようにじっとする友。だけど、先生がシャッターボタンを押すのよりも、あの怪物物が地に降りる方が速かった。

シュタツ！ まるで忍者が降りたときみたいに、身軽な感じで、黒いそれは走り出した。

「全員、追いかける！」

一真が全体を統率して叫ぶ。ぬおおお、逃がすかあ！

「いいねえ、これぞ青春！ 輝け、部員たち！」

変なところで感動して、先生が僕たちに呼びかける。先生、そんなヒマがあったら、一緒に追いかけて。

でも、結局見てるだけで、柱先生自身があいつを追っかけてはくれなかった。ただ、応援するだけ。その柱先生から遠く離れて、もう先生が見えなくなった。果たして、この状況で、『顧問の仕事を果たした』と言えるのだろうか？

まあいいや、とにかく先生が見ていないココなら僕はフリー。よし、エクスポイルダーで追いかければ、すぐだ。エクストリームに言っていないけど、使っちゃえ！

部活の日なんだからこんなこともあるかと、学校帰りの片隅にエクスポイルダーを用意しておいたのだ！　これであの犬っぽいものも敵じゃないぜい。

途中でY字路にさしかかり、みんなは学校に沿って左の方へ走って行った。よし、Y字路のもう片方に隠してある、エクスポイルダーを……。

あった！　黒い機体も、全然変わらない。やっぱすごいね、データーリユージョンって。

どっころしよ。元自転車だから、乗っかりやすいや。いようい、ドーン！

ポンポン。出発しようとしたら、突然誰かに肩を叩かれた。え、何？

振り向くと、赤いジャケットを着た、僕と同じで茶髪の、かつこいい人が……。その人は、懐から赤い手帳を出して僕にぱつと見せた。

「階級は警視の刑事、照井　竜だ。未成年ということは無免許。無免許運転が悪いことだというのは、知っているよな？　おとなしく、署まで来てもらおうか」

最初はおだやかだったけど、最後は有無を言わせない、絶対的な口調。やっべえ、エクスポイルダーはバイクに見えちゃうんだ！　実際機能はバイクだけど。

「えっとその、これはホントウはバイクで・・・・・・・・」

「まあ、言い訳等々は署で聞くからな」

一言一言、区切って伝えていく竜さん。これって、良くアニメとかである展開・・・・・・・・だよね・・・・・・・・。

えええええ！ ど、どうしよう・・・・・・・・。みんな、気付いてくれ・・・・・・・・！

第二十三話 Kの激動／切札との出会い（後書き）

くライダーで基礎英語！く

光介「今回もこのコーナーが始まりました」

エクストリーム「今回の例文はこれだ」

There are all kamen riders in
this story.

エクストリーム「意味は『この物語には全ての仮面ライダーがいます』だな」

一真「これはこの『エクストリームの世界』とレッツゴー仮面ライダーの物語に関連性を持たせるための設定だ」

友「ま、この設定、フィリップさん登場まで全然活かされないから気にしないで」

勇香「今回の内容はthere構文だよ」

光介「thereっていうのはね、『そこ』っていう意味も持つてるけど、存在を表す意味もあるんだよ」

エクストリーム「英語ではほぼ必ず主語を入れなければならない。そのため、『くがある』という意味を表すためにもthereという主語を必要とするわけだ」

光介「t h e r eの次は、単数ならi s、複数ならa r eね」

友「さあ君もレッツトライ!!」

ライト「もういちど聞くんけど……僕は？」

光介「すんません、仕事なんで」

エクストリーム「ただものではないからといって出演出来るとい
うわけではないんだぞ」

友「さらば、ライトセンパイ？」

ライト「o r s」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9339v/>

仮面ライダーエクストリーム ～KAMEN RIDER XTREME～

2011年11月15日08時32分発行